

而して母親は胎兒より傳染する妙な事實もあることを知つて居らねばならぬ。序に繰り返し言つておくが、母は健全なれども、父の精蟲中に梅毒が有つて兒に遺傳するものもあれば、又反對に父が健全で母の卵巢より出た卵に梅毒を含んで居り、爲に其の子に遺傳するものもある。又、父の精蟲にも母の卵にも梅毒が有つて其の子に害毒を遺すこともある。

〔梅毒の區別〕 以上述べたる原因に依り、本病を(一)先天性梅毒と(二)後天性梅毒とに二大別す。即ち(一)は遺傳梅毒のことで、生る、前に父或は母或は父母よりの毒を受けるもの。(二)は生れてから交接其の他の誘因から傳染するものをいふのである。

〔時期〕 本病を潜伏期・第一期・第二期及び第三期の四期に分つ。潜伏期とは通常二三週の間を云ひ。第一期とは二三週の後硬下疳を生ずる時である。第二期とは梅毒疹が皮膚や粘膜に發する時であつて、二三年間も續く。第三期とは第二期後數十年の間をいふのである。尙詳しくことは左の病狀に就いて説くとしよう。

〔病狀〕 梅毒が人體内に入つても其の當時は少しも其の症狀が無くて、平均二十四五日も経つと初めて其の入つた部分に其の徴候が表はれて来る。而して其の表はれ方に三通りある。(一)は龜頭や其の他に乾いた疹が出る。疹は初め粟粒程で、甚だ僅かに皮膚よりも

隆くなつてゐるに過ぎぬが、日を経るに従ひ、次第に大きくなり、直径は三分にも及ぶ、之を丘疹といふ。併し後には消ゆるけれど、其の近傍の淋巴腺は腫れて硬くなるものだ。(二)初めは丘疹又は紅い斑點が出て其れより段々大きくなり、皮が剥け、少しく爛れ、其の後薄い痂皮が出来る。されど五六週間も経てば多少色が附いて治る。(三)は最も普通に表はれる徴候で大抵は陰部に硬結を生じ、其の大きさは小豆位乃至は一錢銅貨位で、その形は殆ど圓く、而して硬くて少しく腫れ、且つ紅くなり、遂に硬結部の中央の表皮が剥け、其の剥けた部より少し宛液が出て、其の液が乾くと薄い痂皮になり、其の部分を不潔にしたり、或は治療が悪いと潰瘍になつて深い部分までも入り込むやうになる、之を硬性下疳と云ふ。乃で小さな硬結は三四週間で治るけれども、大きくなつて而も瘍潰になれば數ヶ月も費し、それで治つた後でも久しく其部分が硬い。これで其の三通りを大略述べたが、此の三通りは前述の如く容易に治るけれど續いて全身症の起るものである。以下順を追うて詳しく述べよう。乃で(一)淋巴管や淋巴腺の梅毒は前述の硬結などが出た後に其の病毒が全身に蔓り、淋巴管を傳ひ、即ち普通のは陰莖に硬結が出来てから一二週間も経つと鼠蹊所の淋巴腺に病毒が傳はり、其の部の腺が幾つか腫れ指頭又は指頭以上の大きになる、

されど膿んだり痛んだりせぬものだ。次に内部に在る淋巴腺も侵されるけれど、外部から觸れることが出来ぬから素人には了らぬ。斯くて病毒が血液中に入り、従つて全身を循るやうになれば到る所の腺が腫れて甚だ硬く頸・項部・後頭・肘・腋窩などの腺が最も侵され易い。斯様に腫れた淋巴腺は數月乃至數年も有るけれど、後には次第に小さく成つて遂に消え失せる、殊に治療が行き届けば尙早く治るものだ。(ろ)發疹期といふのは硬結や淋巴腺の腫れることがあつてから後に其の毒が全身に蔓り、即ち皮膚に疹の出るをいふのだ。乃て其の發疹の状態は其の初めは體温が五分乃至一度五分も昇り、其の熱は日晡に高くて朝は低い。而して脈の數が多くなり、頭や腰其の他筋骨及び關節などが痛み、食が進まず、身體が倦い。熱も三四日續いてる揚句に皮膚に疹が出ると間もなく熱は下るものだ。但し強壯なる人になると發疹の外に何等の病状を呈せぬことがある。(は)皮膚の梅毒といふは梅毒が全身に蔓つて後皮膚に及ぶと、皮膚にも色々の疹が出来、數年の間出たり失せたりするをいふ。今其の疹を區別すれば(甲)梅毒性蕁麻疹といふのは發疹期の初めに現はれるもので、梅毒患者の九十%までは此の疹が出て其の大きさは小豆位乃至は指頭位で、其の形は殆ど圓く、色は初めは淡赤で殆ど薔薇色であるけれど、一二日も経つと次第に濃くなつて

後には黒ずんだ褐色になる、而して最も出来易い部は背部と胸部との兩側や關節の屈曲面・手掌及び足蹠などである。之は數日乃至數月も経てば自然に消えるけれど、療治をすれば如何に長くとも二週間内に消え、消えれば少も痕が残らぬ、併し中には其の部の色素が著しく少くなつて白斑の残ることもある。然るときは之を梅毒性白斑と稱ふ。此の白斑の消えるのは數月乃至一二年の後で無ればならぬ。(乙)丘疹性梅毒疹といふのは圓くて皮膚の表面から僅かに隆く上り、色は褐色で大きなのは小豆乃至は大豆以上もあり、之に觸れると硬く、之が全身に發することもあれば、又一局部に出来ることもある。それが數日乃至數週も経つと次第に小さくなつて鱗屑が剥れ、自然に消えるものなれど、中には却て周圍に蔓るものもあつて、此の疹だけ出ることもある。又蕁麻疹と共に出来ることもある。又丘疹性梅毒が皮膚と皮膚と摩擦し分泌物が多くて常に刺戟を受ける部分に出来、其の表面の上皮が剥れて濕ひ、尙刺戟が止まぬときは次第に其の面が廣くなり、大豆程、甚しきは二錢銅貨程の大きさになる、これを扁平濕疣といふ。婦人の陰部の肛門の周圍は男子よりも濕つて居るから婦人の梅毒者は大抵此の扁平濕疣に罹るものだ。抑々濕疣は灰白色又は褐色で皮膚より頗る隆く、其の面からは薄い汁又は膿を出し、惡臭を放つものだ。若し之を治

療せずにおくと、潰瘍になる。此の疹は男子の陰囊や陰囊に近い大腿の内面及肛門の周囲などにも出来る。肛門のは痔疾と間違ふもので俗には之を梅毒と言つてゐる。而して少しの摩擦を受けても甚だ痛み、之から洩れる液には梅毒を含んでることが多く、爲に最も能く他人に梅毒を傳染せしめるものだ。(丙)膿疱性梅毒疹は疹の中に膿を有ち、其の部の皮膚は間も無く破れ、膿が乾いて痂皮を被り、痂皮が剥けると爛れたり潰瘍になつたりする。其の大きな膿疱は豌豆乃至其れ以上の大きさの褐色の硬い結節があつて、其の中央に膿疱が出来、後には又其の部に膿の痂皮が出来て其の周囲に炎症を起すものである。斯うなると熱發し、身體が衰弱し、重いものになると全身に膿疱が出て一命にさへ關することがある。(丁)結節性梅毒疹は梅毒を感染してから一二年の後に發するもので、取りも直さず第三期梅毒の症状の一つだ。併し重症の梅毒になると傳染後六ヶ月位に出ることがあつて、之を(イ)皮膚の護膜腫と(ロ)皮下護膜腫とに區別す。(イ)は豌豆位の大きさの稍々硬い疹で其の形は球状をなし其の初めは赤く後には褐色に變じ、仲々容易に治らぬが、治れば跡に褐色の瘰癧が残る。抑々其の護膜腫は、一つ治ると又一つ新しく出来、長い月日を費すものだ。(ロ)は其の初めは皮膚の下に出来、次第に周囲や深部に廣がり胡桃乃至鵝卵程の大きさであ

る。其の色は初め赤く後には褐色に變る、而して初めは硬いけれど、段々軟かになり、同時に皮膚は次第に薄くなつて遂に其の中央部が破れ、粘い液を洩し、遂に潰瘍になる。此の護膜腫を療治もせずに放棄つておくと甚しく其の周囲を荒して眼瞼が外に翻つたり、口唇が除れたり、鼻が落ちたりするものである。(戊)潰瘍性梅毒疹は多くは護膜腫が破れて出来るのだ。其の潰瘍の縁は截つたやうに鋭く其の面は穢い灰を帯びた黄色の分泌物で被はれ、或は乾いて痂皮になり、性の悪いのになると數月乃至數年に及び、皮膚の廣い部分を傷めるものだ。斯の如く周圍に廣がるに従ひ、段々痂皮が殖えて恰も牡蠣殻の如き状を呈するに至る、之を梅毒性牡蠣殻瘡といふ。(己)毛髮爪梅毒は髮毛が脱けて禿頭になり、稀には眉毛・睫毛或は鬚髯までも脱けることがある。次に乾性爪溝炎とて一つの爪甲から又は二つの爪甲が厚くなつて指から剥れ、其の間に空氣が入り、爪の色が白くなり、或は全く脱けて了ふ。併し治療が行き届けば一旦脱けても再び生えるものだ。又潰瘍性爪溝炎といふのは第二期の末、又は第三期に起るもので、前述の膿疱に伴ひ、多くは足の爪甲を侵し、其の侵されるのは大抵は一つである。乃ち初めは爪甲に炎症が起り、皮下に膿が溜り、之が破れると潰瘍に變じ、遂に爪甲が落ち治療の結果再び生えても元の如く完全に

はならぬ。(庚)骨梅毒は二種ある。一は骨の周圍の膜を侵すもの、一は骨又は骨髓を侵すものである。乃で其の骨膜を侵す所謂梅毒毒性骨膜炎は大抵頭蓋骨・脛骨・鎖骨・肋骨・胸骨・前膊骨などの皮膚に近い骨の一箇所又は數箇所に起り、急性は劇痛を發し、其の部の皮膚が赤く熱くなるが、慢性は左程に痛みもせず、また皮膚にも變化を及ぼさぬものだが、併し壓せば矢張り痛み、腫れてゐる骨膜中には軟かな物が溜るけれど、療治が宜いと其の物が吸収せられ、骨にも骨膜にも變化無く治り、一先安心す可しだが、療治をせずにおくと數月間も痛み、骨が肥厚したり、或は化膿したり、甚しきは腐骨疽を起すことがある。又梅毒性の骨質炎症は骨膜又は骨髓の炎症に續いて起るものであるが、若し骨質だけの場合には鈍痛を發し、夜間は尙一層に痛むもので、之を療治もせずに放棄つておくと其の部分の骨が脆くなり遂に折れることがある。次に骨髓に護膜腫の出来ることが往々ある。乃で適當なる療治を加へ、治れば何でも無いが、中には骨質を破壊し、或は護膜腫が崩れて皮膚に向ひ、破れることがある。(辛)關節梅毒は關節に疼痛を發し、又同時に腫れることもある。其の發するは大抵一關節で最も多く膝と肘とを侵すものだ。之に侵されると關節に慢性の炎症が起り、多くの滲出液が關節の腔洞に溜ることがある。之を放棄つておくと運動

不自由を感じ、甚しきは關節が動かぬやうになつたりする。(壬)内臓梅毒は諸内臓が其の病毒に侵されるのであるが、今(い)消化器梅毒から云ふと往々口唇や口中に硬結が出来たり、尙進めば疹が出来る。此の疹にも三通りあつて、紅斑性といふのは赤色の斑で僅に小豆程の大きさのものもあるし、又頗る廣い部分を占めるものもある、而して大なるものは軟口蓋から咽頭まで蔓り、熱が出て咽頭が渴き、粘液が澤山に出で、遂に粘膜の上皮が剥れ、且つ爛れ、爲に食物を嚥み下すことが困難になるが、併し數週間も経てば上皮が新たに生ずるものなれど、治療を怠ると屢々起るものだ。次に丘疹性といふのは圓くて赤い色をなし、其の大きさは小豆程のもので間も無く疹は白色になり、上皮が剥れると更に下の赤い肉が露はれるものだ。而して口唇・舌・頬の内面を主に侵され、治療攝生が行き届かぬと潰瘍性に變ずるものだ。潰瘍性とは丘疹性の梅毒疹が重くなるので、粘膜に皸裂が出来其の底には汚い膿がつき食物を攝つたり、話をしたりすると痛が起るものだ。若し斯る疹が口腔に澤山出来て、それが互に連ると、舌及び口中の粘膜が大に腫れて劇痛を起し、十分に口を閉ぢることが出来ぬ所から常に涎を流すものだ。それから第三期にも口中や咽頭の粘膜が侵され、此の部に護膜腫が出来、それで大抵は潰れて潰瘍になる。口唇及び頬の内面に

は比較的護膜腫の出来ることが少ないが若し出来るると口唇が崩れ頬に深い潰瘍が出来、食物を噛み砕くことが仕難くなる。又舌が護膜腫に襲はれると後には其の部が軟かになつて崩れ、粘り液を洩し、揚句に潰瘍になる。其の他軟口蓋・懸壜垂・咽頭壁等にも護膜腫が出来、療治が行き届かぬと此等の部分が缺けたり孔が開いたり、色々の畸形が出来たりして呼吸及び飲食が妨げられ、甚しきは黄泉の客となることがある。次に腸梅毒は最も直腸を侵し、直腸に潰瘍が出来、其の治つた後に癩痕を生じ、爲に直腸が狭くなつたり、或は潰瘍の爲に、女子であると膣の方に孔が出来たりする。次に肝臓梅毒は肝臓に護膜腫が出来、之が爲に肝臓は大きくなつて痛み、後に肝臓が萎縮すると腹内の血液循環が妨げられ、腹水や脾腫を起して危険なる場合に陥るものだ。(ろ)呼吸器梅毒は第一に鼻を侵され易い。乃ち鼻の粘膜に第二期の紅斑が出来ると鼻の中が癢くて熱い感を生じ、粘膜は赤くなり、疹が奥の方まで擴がると、多くの稀薄な鼻汁を洩し、嗅覺が鈍くなる。それから又丘疹が鼻孔内に出ると、鼻汁が多く出で段々と粘膜が腫れて空気の通じが悪くなり後に潰瘍になると鼻汁が膿の様に變ずるものだ。偕又第三期になると、鼻中に護膜腫が出来、數月乃至數年も侵されると鼻が破壊せられるやうになる。それで其の起り方は甚だ緩かであるから

始めは氣附かずにゐるが、粘膜の腫れて空気の通じが悪くなるに従ひ、漸と氣が付き、間もなく鼻汁を増し、後に膿が出て、續いて骨は壞疽り、鼻をかむ折、骨の出で來ることがある。斯くても尙ほ病勢が進めば鼻梁が落ち、甚しきは鼻の形が全く除れ、鼻の孔だけが残り、フギャ〜と云ふやうになつてはな無き冬は淋しかりけりとまでに立ち至るは哀れなことである。次に喉頭梅毒として喉頭に紅斑を生じ、咳嗽や痰が出で、聲が噎れる位だが護膜腫を生ずると後に潰れて潰瘍に變じ、軟骨が破壊せられて癩痕を生じ、爲に喉頭は狭くなり、聲が噎れたり、全く聲が出なくなつたりする。それから又稀には聲門が腫れ塞がる所から窒息する様な危険もある。斯くて尙も進めば氣管や氣管支はをろか、肺臓をも侵すことがある。(は)泌尿器及び生殖器梅毒に移つて述べよう。乃ち第二期には往々急性の腎臓炎を起し、第三期には慢性の腎臓炎又は護膜腫を發することがある。急性の腎臓炎を發すれば尿量が減り、浮腫を發し、頭痛・嘔吐・下痢などの諸症を伴ひ、甚だ困苦するものだ。次に慢性は護膜腫を發することが稀であるけれど、長久しく治らぬ。次に睪丸梅毒は睪丸が腫れて大きくなり、後に萎縮して甚だ小さくなるのと又化膿の爲に破れて膿を洩すのとある。而して若も兩方の睪丸が侵されると、全く生殖力を失つて了ふやうになる。其

他の生殖器梅毒の事は始めに述べたれば茲には省くが、序に婦人の乳房梅毒に就いて一寸述べておかう。乳房には往々濕疹や乳腺の炎症を發したり、或は護膜腫が出来て皮膚に破れることがある。(二)血行器梅毒も亦甚だ恐ろしいものだ。今其の次第を言ふと、心臓は多く第三期に侵され、心嚢や心臓内膜などに炎症が起り、殊に心臓の筋肉に護膜腫の出来ることがある。斯うなると脈搏は其の數を増し、呼吸困難を感じ、皮膚は青色になり、浮腫を發し、衰れ一朝の露と消ゆることがある。次に動脈にも炎症を起したり、護膜腫を生じたりするもので、其の動脈の貴重なる部であると危険を伴ふことが少く無い。(三)眼梅毒は最も眼瞼や結膜に丘疹や護膜腫を生じ、又は虹彩炎を發し、眼瞼及び結膜が腫れ、角膜の周圍に充血を起し、虹彩は大に色が變り、瞳孔は縮り眼が開け難く而して痛み、且つ羞明く、次第に視力は衰へ、甚しきは失明することもある。又脈絡膜炎を發することもある。之に罹ると視力は大に妨げられ、物を見ると暗い點が出来たり、物に色が附いて見えたり、或は夜盲症になつたりする。次に網膜炎は之も視力が妨げられ、恰も脈絡膜炎の如き症狀を發し容易に治らぬものである。次に視神經が侵されると、始めは視力が減じた位に思つて居れど、段々と進めば全く失明するに至るものだ。(四)耳梅毒は外聽道に發し

易く、茲に發すれば初めに乾いた丘疹が出来、それが次第に爛れて濕疣になるものだ。而して重いになると、全く耳の孔が塞がり、聽覺が甚だ悪くなり、膿の混つた液が多く出るやうになる。又鼓膜にも充血が起り、孔が開くやうになると中耳までも炎症を及ぼすに至る。中耳に急性又は慢性の炎症が起ると、急に聽覺を傷ひ、顛顛部が痛み、而して鼓膜も共に侵された結果、孔が開くやうになると、耳の奥から膿が出る。又オイスターキー氏管が侵されると、これ亦聽覺が悪くなり、耳がガン／＼鳴るものである。それから又ズット奥の迷路が侵されるやうになれば、劇しく耳鳴を感じるのみならず、眩暈や嘔吐を發し、揚句に聾になることがある。(五)神經系梅毒は實に恐ろしいものだ。第一梅毒性の腦膜炎に罹ると頭痛を發し、次で眩暈や不眠症を來し、又嘔吐を催し、思考力も記憶力も減弱するものである。次に動眼神經が梅毒に罹ると、眼瞼が垂れたり、斜視を起したり或は瞳孔が開いたりする。其の他視神經嗅神經聽神經などが侵されると、各々夫々の機能を失ふ様になる。次に腦髓が侵されると腦膜炎の如き症狀があり、種々の器管に痲痺が起り、甚しきは昏睡状態の結果彼の世の人となることがある。それから又痲痺狂に罹ると初めは頭痛・眩暈に引き續き不眠を來し、食慾が進まぬやうになり、次で患者の氣質がカラリと變り、品行

などは意に介せず、それで喜怒哀樂の情は盛んになつて判断力を失ひ、口唇や手が腫へ、次第に精神が高慢になつたり、或は反對に沈鬱したりして病の進むと共に畢竟する所死ぬものである。次に脊髄も亦侵されることがある。乃ち之に罹ると神経痛を發したり、反射機能が進んだり、或は反對に脱失したりして遂に膀胱や肛門の筋が痙攣するものだ。偕又梅毒の爲に脊髄癆が起ると、數年乃至數十年も苦しめられるもので、初めは下肢に疼痛を感じ軀幹が絞められるやうに感じ、それたら皮膚の知覺が異常を來し、膝の腱反射が消え、次第に内科の章で述べた病狀が表はれて來るものだ。これにて内臟梅毒の一斑を述べたれば次に(癸)奔馬梅毒といふのを述べよう。奔馬梅毒といふのは、梅毒中の最も悪性なもので、恰も暴れ馬が奔るやうにズン／＼と病勢が進み、且つ重い所から斯く言ふので、傳染後數ヶ月の中に潰瘍や護膜腫などが方々の臟器に續々起つて來るとはテモマア恐ろしい症候だ。繰り返して言へば初期より硬結の組織を來すことが強く、直ちに壞疽の如き有様になり易く、而して發疹すると、普通の梅毒よりも其の症狀が劇しくて熱が高く、關節や骨が腫れて痛み、而して全身殊に顔や頭に膿を有つた疹が多く出來、其の疹が潰れて潰瘍に變じ、斯くて此の疹の十分に治らぬ中に、更に次の疹が出來、消化器・呼吸器・腦肝臟腎臟

及び心臓などにも早く病毒を逞うし、間も無く絶命せんとするものである。之にて後天性梅毒の大意は述べ終つたれば次は先天性梅毒に移ること、しませう。

先天性梅毒とは前にも述べた通り、母の胎内にある頃に罹つた梅毒の事で、斯る子は既に子宮内で梅毒性の疹が出來るもあるし、又生れた後に始めて梅毒症の出て來るものもある。何れにしても始めから後天性梅毒の第二期第三期に起るやうな病狀と殆ど同じい徴候を現すものである。が併し其の二期三期と違ふ點の大意を述べれば、皮膚に膿を有つ疹や潰瘍の出來ることは殆ど無く、唯、大きな水疱や出血性の疹が出來、皮膚の摩擦する部では上皮が剥れ、爛れてゐることがある。而して紅斑の出來るのは分娩後二週間までの中で、若し六週後に出來たら、先天性では無くて生れたる後に感染したと謂つても可い位だ。抑々初生兒に出來る丘疹は大きくて、其の皮膚の摩擦する部では濕疣に變じ、顔や頭に生ずるのは膿を有つことがある。此の疹は産れた折既に出來てゐるものもあるし、又産れた後に次第に生ずるものもある。水疱は先天性梅毒に現れる所の重い徴候で其の初めは手掌・足趾に丘疹又は紅斑が出來、即て大きな水疱になるのだ。其の水疱の中に水の如き液が溜つてゐて、時には膿の混つてゐることもあり、之が破れると濕うた赤い面が出來、それが次第に四肢・軀

幹及び顔に蔓り、遂に粘膜にまで及び、大抵は一二週の中に死ぬものである。斯様に先天性梅毒に侵されてる小兒に必ず鼻加答兒を伴ひ、鼻の粘膜が赤く、初めは水の如き鼻汁を洩し、次で膿の如くに變じ、中には血液を混じてゐることもある。此の分泌物が乾くと鼻の孔が塞がつて呼吸に障害を起し、乳汁を吸ふことが困難なる所から栄養不良を來し、遂に死亡するものである。次に喉頭にも疹が出来、咳嗽が出て、聲が嘎れ、肺も亦侵され、到底成長するの見込は無いものだ。次に口中や咽頭を始めとし小腸肝臟或は四肢の骨が侵され、齒の發育は悪く、心臓にも護膜腫が出来、血管が脆くなり、或は皮膚の下に溢血したり、或は眼病を起し、甚しきは失明し、或は耳の迷路が侵され、甚しきは聾になることは未だしもだが、最も重い先天性梅毒は、子宮内で彼の世の人となつて流産するのがある。されば梅毒は先天後天に關せず恐る可き病であるから、其の豫防法を講せねばならぬ。

〔豫防法〕梅毒の豫防法は瘵疾と同じく不品行を慎むが第一である。不品行をしなから之を豫防することは甚だ困難であるのみならず、縦し斯る豫防法が有るとしても一般人の知らぬ方が宜いのである。次に結婚する際相方に本病者が無きかを探偵すること最も大切である。然るに己れ梅毒あるにも拘らず、之を秘して妻を娶り、間も無く妻にも傳染らせ、

己れのは手を盡して療治し、妻のは放棄つておき、妻の病が甚しくなり、醜形を呈するやうになつてから離婚をするに至つては其の殘酷な事は虎狼も三舎を避けるであらう。次に乳母を雇ひ入れる際、之も相方で注意せねばならぬ。即ち乳母が梅毒に罹つて居りはせぬかといふことを調べるのと、又乳母の方でも乳兒が先天性梅毒で無きかを確かめねばならぬ。換言すれば互に徳義心を持ち、若し乳母にして梅毒あらば、何れへも雇はれぬやうにし、徳義を守り、乳兒にして梅毒あらば、其の母が育てるか、或は乳汁が出ぬ場合には牛乳で育てるやうにしたい。次に醫士たる者は種痘の際に注意し痘苗は勿論種痘針の消毒を十分になし、梅毒等の感染を防がねばならぬ。次に烟管の貸借や酒盃の献酬等を廢することは常に本病の傳染を防ぐのみならず衛生上大に必要なことである。

〔攝生法〕若し不幸にして本病に罹つたら、第一に攝生を嚴重に守らねばならぬ。攝生の第一は少しでも疑のある場合には速に専門醫士に就いて治療を受けると云ふことだ。然るに己れの不品行を耻ぢて躊躇時を移したり、或は賣藥に縱つたりするは病勢を益々重らせるのみである。次に飲食物に注意し、可成消化し易くて栄養に富んだる物を食せねばならぬ。身體の強い者は病毒に抵抗する力が強いから従つて早く治り易い譯である。酒は可及

的廢した方が可い。口中や咽頭などに梅毒疹の出来たる場合に酒を飲むと其の疹の経過を悪くするものである。又烟草も鼻や口中及び咽喉などの侵されてる時は甚だ害がある。次に身體を清潔にすることは大必要である。殊に分泌物は常に注意して拭き取らぬと病毒が蔓り易いのみならず他人にも傳染り易い恐れがある。又、口中は常に鹽酸加里液で含嗽し、能々清潔にすることを怠つてはならぬ。次に感冒に罹らぬやうこれ又注意せねばならぬ。次に劇しい運動は宜しく無い、殊に皮膚に疹の出来たる場合には摩擦を防ぐやうに靜臥してることが最も得策である。次に交接は常に相手に傳染せしめる危険があるのみで無く、己れも摩擦の爲に病勢を重くし、且又軟下疳や瘰癧を二重に傳染せぬとも限られぬものである。交接しても差支の無い時期は傳染後三ヶ年を経ねばならぬといふことである。序に言つておくが包莖の男子は都ての花柳病に侵され易いものであるから尙一層不潔な婦人に接してはならぬ。

〔療法〕 之も醫學生等の參考までに記せば第一期の症が陰莖の皮膚・大小陰唇・顔或は軀幹などに現れたらば普通に沃度仿誤を塗けるのだ。併し時日を経て既に硬くなつて居る場合には水銀軟膏を塗り、潰瘍になつて居るのには消毒液で洗ひ、場所に依ては繃帯を施さね

ばならぬ。全身療法としては一般に水銀劑を用ふるのが最も適當である。水銀劑は水銀軟膏を皮膚に塗つたり、サリチール酸水銀などの溶液を筋肉に注射したり、或は内服させたります。此の水銀療法で其の症狀が無くなつても、又暫く時日を経てから其の療法を反覆せねばならぬ。何となれば梅毒は時々再發することがあるからである。次に第三期には沃度劑を内服するのであるが、併し此の期間に於ても水銀療法と併せ用ひた方が宜い。尙處方を左に記しておかう。

▲水銀軟膏 二〇〇

右或は左の下腿に塗擦し、二日目には同量を其の上腿に、三日目には胸側に、四日目には石鹼を塗けて洗ひ落し、五日目には左或は右の下腿に、六日目には右或は左の上膊、七日目には左或は右の上膊といふ如き順序を繰り返すのであつて、療治中は鹽酸加里水で含嗽せねばならぬ、即ち左の如き處方である。

▲鹽酸加里 九〇 水 二〇〇〇

右一日數回含嗽

▲沃度曹達 〇・三 苦味丁幾 一・五 單舍 八〇 水 一〇〇〇

花柳病學及生殖器病學

右一日三回分服(但し沃度曹達は順次に増量するのである)

これにて療法の大要を述べたが、今や誰も能く人の知つてゐる六百六號即サルヴァルサンの注射は非常な效力のあるものなれば、専門醫士に就き、一刻も早く此の注射を受けた方が何よりである本藥の事柄は拙著「新藥素人藥物學」に詳しく説いてある。

軟下疳

軟下疳

〔原因〕 下疳とは男女の陰部を侵蝕する花柳病の總稱である。之に硬性下疳と軟性下疳との二種類があつて、硬性下疳の事は前の梅毒の章で述べたる即ち梅毒の初期の原發症であるが、軟性下疳の方は梅毒とは關係無く、一種獨立の花柳病であつて、原因は軟性下疳菌といふ一種の桿狀菌である。此の菌は軟性下疳の潰瘍竝に横痃の膿汁の中に在つて其膿汁が附着すると他人に傳染するのである。

〔病狀〕 試みに軟性下疳の膿を探り、小刀の尖に塗つて表皮の下に人工的の接種をする時、半日乃至一日も経てば其の部分が赤くなり、二日目には小さな丘疹が出来、三日目には膿疱に變じ、次に乾いて痂皮が出来、痂皮の下には潰瘍を現し、潰瘍は始めは圓いが、後には不正な形に變じ、潰瘍の周圍は浸潤があつて其の底は黄色で膿汁を有つてゐる、之が

二週間も経つと益々周圍に廣がるけれど、病勢が衰へるに従ひ、次第に紅い肉芽が出来、それより段々と治つて了ふものだ。併し本當の軟下疳即ち交接して傳染したのは右の順序とは違ひ、傳染後二三日で潰瘍が出来、多くの膿が出て、其の膿が乾けば痂皮を生じ、それより段々周圍に廣がり大きくなつて其の極度まで達すると、それより治癒に向ひ、潰瘍の面にある黄色の被膜が剥れて赤い肉芽を生じ、周圍から癩痕が出来て遂に治つて了ふ。されど又横痃を續發することもあつて、之に罹れば永い時日を要するものである。又本症の種類に壞疽性竝に蛇行性の下疳といふのがある。壞疽性下疳とは軟性下疳の重いのであつて、之に又二種の區別がある。其の一は軟性下疳の出来たるにも拘らず、不潔に放棄つておき、攝生も守らず、治療も加へぬ爲に炎症が劇しくなり、其の部分が腫れ上つて遂に壞疽るものである。之は大抵男子の包皮の内部に出来、爲に包皮が甚しく腫れて痛み、それより薄い膿が出て、臭氣を發し、遂に包皮の一部分、甚しきは陰莖の皮膚までも壞疽つて落ちるやうになる。今一つは下疳の出来たる部分が左程に腫れないで其の潰瘍面が壞疽り、底の方へも周圍の方へも蔓り劇しく痛み、全身に熱が出て、食欲進まず、尙段々重くなる、潰瘍の面より出血し、危険に陥ることがある。蛇行性下疳といふのは潰瘍が次第々々

に進んで行くと、初め出来た部分は治り、新に〜と生じて陰阜陰囊より段々大腿・腹部までに蔓るを云ふ。

話し變つて前に一寸述べた横痃とは一名便毒とも云ひ、俗にはヨコネといつてゐる。即ち軟下疳に續發する所の淋巴腺の炎症であつて、常に股の附根醫學上で言へて鼠蹊部の腺である。此の腺の数は一定せぬものではあるが、大抵は一側に八個乃至十個ばかりである。而して横痃は一側に生ずることもあるし、又兩側に生ずることもある。兎に角其の生ずる初めは鼠蹊部に軽い疼痛が起り、歩行することが次第に困難となり、體温は少しく高まり、鼠蹊の部分に觸れると痛むものである。此の時安靜にして治療を加へれば腺の腫れも消えて治ることもあるが、然うで無くて段々病が進めば其の部の皮膚が赤くなり、淋巴腺の周圍に炎症が起つて患者は全く歩くことが出来ず、事茲に至れば腺の内部が化膿して後には皮膚が破れ、多くの膿を洩すものである。而して其の破れた部分は久しく孔が開いてゐて幾分宛かの膿が出て數週間又は數箇月も経てば治るものである。

〔療法〕 嚴重に攝生をなし、淡泊とした食物を取り、酒は成可飲まぬやうにし、潰瘍は石炭酸水を以て屢々洗ひ清潔にし、沃度仿誤又はデルマトールなどの藥を撒布し、綿を以て

包み、繃帯しておくが宜い。横痃の出来初めには身體を安靜にし、皮膚の色の變らぬ中は沃度丁幾を塗つたり水銀軟膏を塗つたりして水で冷すのだ。斯くても炎症が進むと醫士は皮膚を切り開いて膿を取るか、或は又反對に患部を温め、早く化膿させて切開し、膿を洩して後に硝酸銀液を注射して繃帯するも宜い。内服藥としては矢張り沃度曹達の類に過ぎぬ。尚花柳病の療法に就いて言ふ可きことは數多あれども、此の種の病氣は可成早く専門醫の治療を乞はねばならぬことであるから、餘り多く記せぬが公衆衛生否公衆道德の爲だらうと思ふ。

陰萎

陰萎

〔原因〕 多くは他病から来る。即ち慢性淋病・脊髄癆・糖尿病・臭素加里・ルフリン・カンフル・モルヒネ・沃度等の中毒・陰莖の腫瘍や癩痕・睾丸病・尿管症・慢性消化器病・慢性腎臟病・貧血・結核及び榮養障害等である。次に先天的即ち生來の陰莖縮小・陰部の不具・睾丸の發育不全も勿論本症を惹き起すものだ。次に手淫過房も最大なる原因となる。次に精神感動例へば悲哀沈鬱してゐる如きを云ふ。又、手淫を行つた者が偶々衛生書或は醫書を讀み、手

淫の有害あることを知り、後悔の結果又は自ら陰萎者なりと過信したる所より眞の陰萎になるもある。

〔病狀〕 之に大凡三通りある。(甲)は生殖慾全然或は殆ど無く、従つて陰莖の勃起は全くせぬか或は不完全なる者。(乙)は生殖慾は十分に有るが、陰莖の勃起は之に伴はぬ者。(丙)は生殖慾も有り、且つ勃起も之に伴ふけれど、交接時に臨めば忽ち萎縮し易く、或は腔内に没入するに先ち又は没入するや否や射精するものである。(甲)は先天的原因或は身體若くは精神の非常に衰弱せる者に多い。(乙)は過房若くは手淫を行つた者に往々有る例。(丙)は恐怖心の有る者や又は想像力の強き者に在るのだ。されば妻帯せぬ折に全く陰萎であると自信してゐる青年が一朝妻を娶り、恐怖心も除れ、淫情の想像もせぬやうになるに伴れ、陰萎で無いやうになつた例もある。併し之と反對に正妻に對しては陰萎なるも、他の賣淫婦等に對しては陰萎ならざるものもある。之は嘗て過房であつたか、或は身體に不健全な所があつて生殖慾の足らぬか、或は正妻との情交が足らぬからである。更に繰り返して言ふやうなれど、世の陰萎と自信してゐる中には恐怖心より起る者が多く、特に初回の交接時に不十分であつた所から、次回よりも亦同じだと恐れるのが最も多數を占めてゐる。又、妙なるは普通の人よりも幾分か陰莖の短小なることを大に悲しみ、之では到底人事の目的を達せられぬものと悲しみ、其の結果次第に陰萎になるものもある。又原因の章で述べる事を忘れたが今一つ老齡の爲に發する陰萎もある。之は老齡なるを愧ぢて精神的に陰萎なものもあるし、又心身の老衰より生理的に陰萎になつたものもある。

〔豫後〕 原因に依るもので、老齡及び先天的のは大抵治らぬが、他病より來るものは其の他病の如何に依て治る治らぬのがある。其の他は大抵治るものであるから悲觀せぬ方が宜い。

〔療法〕 原因を退治する様にせねばならぬ。原因若し糖尿病であるとか或は貧血病であるとかならば、其の糖尿病其の貧血病を治せば陰萎も亦従つて治るは理の當然である。一般に心身を強壯にする方法即ち全身の冷水摩擦殊に陰部の冷水摩擦を數多くなし、滋養強壯の食餌を攝り、適當の運動を講じ、貧血者衰弱者には鐵劑及び其の他の強壯劑を與へ、又精神を安慰するが必要である。尙後章に述べてある飲食物と淫慾との關係を參考とするが宜い。藥物としては催淫劑として、カンタリスや麝香などを用ふる法もあれど、之は唯一時的に淫情を起させるだけで、陰萎の治療とならぬのみならず、却て病勢を重らせる結

果となることがある。其の他鹽酸スベルミンやヨヒンビン及びフィチンを賞用する人も有れど果して效あるや否やは予に經驗が無いから保證出来ぬ。が併しフィチンは男子の生殖器を強くする效が多少有らうと想像せらるゝのみならず、縦し生殖器に左程效かぬとしても神經衰弱・不眠症・貧血及び重病恢復期等に良效あるものなれば陰萎者に對しても有效無害と謂はねばならぬ、試して見るが宜からう。若しフィチンは高價であるから不可ぬとか、或は買ひ求め難い場合には、ユーキリンを以て代用しても可い。ユーキリンはフィチンと同じ成分で同じ効力が有るものである。今右に述べたる藥物の處方を記しておかう。

▲還元鐵 ○・三 鹽酸規尼涅 ○・一 甘草末 適宜

右爲ニ丸ニ一日三回食後三丸宛 (貧血症)

▲鹽酸ヨヒンビン ○・〇〇三 沸湯 ○・三に溶したる液

有皮下注射

▲ヨヒンビン錠

右一日三回、一個宛

▲鹽酸スベルミン ○・〇一 蒸餾水 ○・八 偲里設林 ○・二

右一日一筒 皮下注射

▲フィチン ○・七五 乳糖 一・五

右分三包一日三回食後一包宛

▲ユーキリン 二・〇 乳糖 一・五

右分三包一日三回食後一包宛

遺精

〔原因〕 これも多病より來るものが頗る多い、即ち慢性痲疾・精囊炎・包莖・膀胱加答兒・膀胱結石・龜頭炎・尿道狹窄・神經衰弱・痔疾・肺病・糖尿病・脊髓病及び病後等である。次に手淫及び過房より來るは言ふまでも無い。次に精神感動即ち淫情の想像を逞うするより起ることもある。

〔病狀〕 夜間猥褻なる夢を見、或は見ずに射精し、段々重くなると書問でも不隨意に精液を洩し、其の他脱糞時排尿時又重い物を持ち上る際などにも射精し、身體何と無く倦み疲れ、心臟の動悸は高ぶり、頭痛はする、胸内は苦悶を感じ、精神は沈鬱し、斯くても尙止まぬ場合には益々貧血して記憶力は衰へ、身體は瘦せ、見るも哀れな姿になる者である。

〔豫後〕 原因に關するとは言ふもの、適當なる攝生及び治療法に依て大抵は治るものである。

〔療法〕 これも原因を除くやうにす可きは勿論である。次に強壯なる青年者壯年者に對しては無刺戟性の飲食物を與へ、衰弱者には滋養強壯の食物を取らしめねばならぬ。尙後章の淫情と食餌の關係を見る可し。次に婦人と交際することは可成禁するが宜い。次に猥褻なる書畫や談話は言ふに及ばず、男女の關係を述べたる小説類をも避け、其の代りに精神修養の書物でも見て心性を高尙にするが何より肝要である。次に臨臥に飲食物を取ることは絶對的に廢せねばならぬ。飽食して寝たり、或は排尿を忍んで寝たり、否排尿を忍ばざるも飲料を多く飲んで寝ると遺精の種となるものだ。次に夜具は可成硬くて而も感冒に罹らぬ範圍に於て薄着せねばならぬ軟な夜具を暖か過る程重襲して眠るは本病を誘ふ基となる。次に早起の習慣を養ふことを務めねばならぬ、早起して早寢する習慣を養つた爲に本病が自ら治つた例も往々ある。次に冷水療法も一方ならぬ效がある。之を行ふには一般の冷水摩擦や冷水浴も勿論効果あるが、尙進んで冷坐浴から陰部及び臀部に冷水を瀉ぐ事、其の他夏日には海水浴・河水浴などを行へば想像以外に偉效あるものだ。次に非常な衰弱を來して居ら

ぬ限りは運動を勵行するが急務である。特に武道的の運動即ち柔術・劍術等の如きは遺精陰萎何れも効果があるもので、當に身體を強壯ならしめるばかりで無く、精神を武的にし、劣情を殺ぐものなれば、之を續けて練習して居れば、色情の事などは次第に忘れて陰萎遺精も次第に治るものだ。就中陰萎の如きも武士道的の體育精神を受けける中に、心が武士道的になるに伴れ、淫情の事を自然に忘れ、己れの陰萎などを苦にもせず無邪氣に日を送つてる中に何時の間にか治つて、今度は正義に生殖の道を盡されるやうになるものである。陰萎や遺精が治つたら直ちに又荒淫漁色せんと思ふやうな人は天が之を罰するから却て容易に治らう筈は無い、此の理を辨へて正義の心に立ち戻ることが陰萎や遺精を治すの奥義である。藥品としては、

▲臭素加留謨 三・〇 アセトアニリド 〇・九 乳糖 適宜

右分三包 一日三回一包宛

▲臭素加留謨 二・〇 樟腦 〇・四

有分二包 蠟紙に包み朝夕二回オブラートにて一包宛

淫慾と飲食物との關係——神經を興奮させる飲食物は直接間接に淫慾を促進するも

のである。然れば如何なる飲食物が然うであるかといふに、鳥獸魚肉・鶏卵・葱・唐辛・胡椒・酒類・殊に麥酒・貝類・牛旁・人參・自然生薯・馬鈴薯・肉荳蔻・松露・塘蒿・防風等で、就中貝類・鱘は燐を含んでる最も淫情を起させるものだ。佛法では僧侶に肉食及び葷酒を禁ずる理由は他の原因もあるけれど、一は淫慾を起さしめぬ爲である。次に淫慾を鎮靜する食物は麥飯・鮭・蕪菁・大根・甘藍・南瓜・胡瓜などである。右の如くであるが、淫慾缺乏症といふ一種の病に非る限りは特別に興奮食物を選んで取る必要が無い。されば普通の人は唯健康を維持すべき範圍に於て兩者何れも取る可き必要がある。乃て過淫が原因となつて陰萎者は前にも述べた通り、刺戟性の飲食物や淫慾を興奮せしむ可き物は可成避けて、一般の衛生を勵行せねばならぬ。西洋の俗間に牛や小鳥の罌丸を食すると陰萎が治るといふが、果して然るや否やは予に經驗が無いから保證は出来ぬ。尙本章を終るに臨み、繰り返す一事は手淫の惡癖を止めよと云ふ一語だ。血氣の青年が之を侵せば心身の發達力を生殖慾に奪はれ、嘗に本人が薄弱な人となるのみならず、子々孫々にも其の影響を及ぼし、延いては國家に對しても忠勇の臣民となることが出来ぬ。嗚呼慎しまねばならぬ。

花柳病學及生殖器病學終

診斷學大意

之は主に内科診斷法であるのみならず、何病だの確診は各病の徵候を心得て居らねばならぬ。故に爾來述べたる各病狀を熟讀記憶せられたい。

總論

病の狀態を診斷學上から大別すると、自覺的・他覺的及び自他兼有の三つとなる。自覺的とは患者自ら我が身體の變常を感覺するを云ひ、他覺的とは縦ひ患者何等の苦痛を感ぜざるも醫士の五官に由つて、これは何病であると鑑定の出来るを稱し、自他兼有とは患者も醫士も共に病氣と認むるものである。大抵は病は第三に屬するもので、第一は鈍い頭痛或は軽い腹痛などの如き場合、第二は精神病や或は心臟病等である。そこで醫士は色々の病氣に就いて彼是參考し、その病狀を鑑識するのが所謂診斷で、診斷すれば、これより治療に取懸るのである。診斷法は問診・望診・觸診・打診・聽診・檢温・顯微鏡檢査及び化學檢査の

八通りである。併し茲には望診法・検温法及び化學的検査中の検尿法に就いて述べておく、詳しくは拙著素人診断學に就いて見られたい。

望診法

望診法

望診は第一に體格を診ねばならぬ、體格の如何は病の發生から、將來病の長短或は治る治らぬなどに大なる關係を及ぼすものである。醫道では有ゆる人間の體格を強壯、虛弱、中等の三つに大別して太刀山の如き大力者でも、一寸法師の様な者でも皆この中に當嵌めてゐる。強壯とは骨組が大きく強くて、而も逞ましく、胸廓が潤く太く、軀幹四肢の筋肉はデブ太りで無く、堅く縮つて能く發育し皮膚は滑らかに脂附きて光澤のあるものを云ひ、薄弱とは骨組が薄く纖く而も弱くて胸廓は狭く小さく、筋肉は軟かに瘦せて、皮膚はザラ／＼に所謂鮫膚を呈はすもの、中等とは右兩者の中間に位するものである。『病氣は随分重いですが、體格はお立派でありますから、御案じなさるな』『病は左程重くはありませんけれど、兎に角お弱い體格だから御養生が肝心でありますぞ』など、言ふが如きは右三ヶ條を標準にするのである。

次は體質である。患者の身體一般の構造狀態等を眺めて見るに、その或る狀態は特に或る

病氣に罹り易い素因を表はしてゐる者がある、之を體質といふ。億兆の人民は皆夫々の體質を有つてゐるけれど、醫學上では之を大きく區別して肺癆質・神經質及び腺病質等の數種となす。肺癆質とは全身の構造が薄弱で瘦せて居り、頸が鶴的に細長く胸は狭くて小さく、或は扁平で皮膚の色は蒼色く、顔は細長く、而して頸骨部に少し赤みを帯び、眼球はパツチリ大きくて、一種の色澤あるものである。此の質に屬する人は女ならば小野の小町男ならば丹次郎的で、若い中は優しいとか美しくいか持囃さる、けれど、所謂美人薄命で終るとは實に情無い次第である。卒中質とは骨格筋肉逞ましく全身脂肪に富み、顔は大いに赤く頸は短く厚く肩は高く聳えて梅ヶ谷宜しくといふやうな丈夫さうに見ゆる身體なれど僅かの運動にも呼吸苦しくなり、動悸は高ぶる體質である。斯る人は卒中の遺傳あるか、或は興奮性の飲料例へば酒などを嗜むと卒中になり易いものである。神經質とは體格體質といふよりも寧ろ其の容儀若くは行爲に其の特性を表はすものだ。容貌は惻怛さうに見え、物を見ること如何にも敏捷で之を形容すれば、男でありながら細かい處に氣が付き、一目見て『彼の婦人の着物は洗張でけす』など、鑑定出来るやうなものだ。髪はコスメチックでも附けて奇麗に掻き分け、靴は漆の如くピカ／＼に磨き着物に少し塵が附いて

も大いに氣にする言葉は疾く爽で人と應接しても如才無い、學問技藝を教ふれば常人よりも早く悟るけれど、大器晩成の人とはならぬ。意志變り易く或は興奮し、或は鬱閉し且つ屢々人を疑ふ、故に何かの刺戟あれば神經病に罹り易い質である朝に民黨に在るかと思へば夕に吏黨に屬く、斯る人と兄弟の交りをせんなどは到底駄目なことである。嗚呼當世高襟紳士中に讀んでこの章を見れば果して如何の感を起すであらう。腺病質とは主に小兒にあるもので、皮膚蒼白く、筋肉瘦せて潤ひなく、顔は浮腫あるかの如く見ゆるか、或は顔面狭く、小さく従つて身體弱く細く皮膚は僅かの刺戟で紅くなり易く、靜脈は透いて見ゆる、而して往々皮疹の出来る質だ。斯る撫子を有づ親は大に注意せぬと、早く無常の風に萎み易いものである。

次は容貌である、容貌は第一に眼を視ねばならぬ。これ眼は情意の宿る所であつて、喜怒哀樂自ら其中に顯はる、のみならず、或は病に特有な徴候を存することが多いからである。されば醫士ばかりで無く古今東西の人相家も先づ眼を視て判斷の種となすのだ。今一二の例を擧ぐれば「怒らずして眼光人を射るが如きは君將の相なり」「細長くして上下に波紋あるは心氣豊かなるの相なり」「下眼瞼の直下に水腫の如く豊厚と圓く高く起るは妊娠の徴

なり」など書いてある。此外西洋の骨相學者も其の大小形狀及び色澤等に就いて色々の説をなしてゐる。されど東洋人相家の説は漠然たる議論で「如何となればの」説明無いのみならず往々事實に矛盾する所がある。西洋骨相家の論は稍々見るに足る可きも、概して牽強附會である。診斷學上で論ずるのは生理病理を根柢とし、之を實驗に照して判斷するのであるから、毫も疑はしい點の無いばかりで無く、十分にその理由を説明することが出来る、今其中最も著しきものを擧げれば、

瞳孔散大してゐるのは、内臓に條蟲などの生じてゐるのか、或は或る藥アトロヒを服したる徴候と疑つて可い。これに反して瞳孔縮小してをれば脊髄癆では無からうかと参考にして十分の價値がある。視勢朦朧として眼球光澤を失ひし者は體力大いに衰へてゐる徴候である。一種水様の光澤があつて多少充血を伴ひ視勢活潑ならぬ者は大酒家の相。視勢キョロ／＼と浮動し屢々遠方を見るが如き、状態を呈はすは讒語を言ふ患者か、或は精神に異常のある人と看做して可い。眼光爛々として射るが如く恐ろしさうに見ゆるは精神病者に屢々ある所の相だ。眼球大きく見えて一種特異の光澤を帯ぶる者は肺癆者か或は肺癆の素因あることは既に前章に説いた。眼球陷落して凄く見ゆるは勿論高度の衰弱でこれに反して

從來普通で有つた眼球が次第に突出し、甚しきは眼瞼を閉づることが出来ぬ位になるのが
ある、之はバセドー氏病とて其の原因は遺傳或は精神興奮或は身體の震盪或は生殖器の病
或は手淫を犯すなどから起るものだ。尙々眼に就いて澤山あるけれど、専門的に互るから
次は鼻にませう。鼻に就いても人相學者に種々様々の面白い説がある。一つ二つ紹介す
れば、鼻梁通つて高く、而して醜くからぬは賢者の相。低く平く所謂獅子鼻なるは愚者の
相である。と東洋西洋の議論殆んど一致してゐるやうなれど、彼の希臘の古賢ソクラテ
ス氏は獅子鼻で甚だ醜かつたと云へば、何うも信じられぬやうである。又鼻の基が高く
中央低く、尖又高きは之を鞍鼻と名づけて心は非常に正直なれども、先見の無いために氣
の毒ながら一生不自由に暮す相なりと、人相家は鼻動めかして説くが、醫道では梅毒者或
は癩病者の徴候では無いかと疑ふ。若し之を兩説共に信なりとせば梅毒者や癩病者は正直
なものであると謂はねばならぬ所の滑稽論になるのだ。所が事實は全く反對であるから、
人相家の説は一笑に附して可い。鼻翼の運動即ち小鼻のビク／＼動くは俗に之を高慢の相
だといふが、診斷上では呼吸困難の徴である。酒齶鼻即鼻上の赤きは人相家に言はずと
淫亂の相であるとか、或は梅毒者の徴候であると、されど醫道では大酒家に非ずば慢性の

サルドニ
瘰癧は畢
苦笑に似
るゝので
ある。

腸胃病或は寒冷の空氣に觸れて終日業を執る者、又は月經不調の徴であると診斷するので
ある。又鼻中隔の附着部に腐蝕性の潰瘍あるは、これぞ梅毒か癩病の恐ろしき徴候である
と我等は認むるのだ。其の外にフギヤ／＼鼻聲を發するも梅毒なればはな無き冬の景色は
これ誰でも知らるゝことであらう。次は口及び顔面一般に就いて述べませう。人相學者
は口にも亦種々雑多の説を唱へてゐる。或は口元の整然と締つてゐるは惻怛な相であると
か、或は唇の薄きは輕薄才子であるとか、或は口を開けて涎を垂してゐる體の者は勿論馬鹿
の體であるとか、其の他澤山の議論あるけれど、大概取るに足らぬ口ばかりの説である。
矢張確乎たる我が診斷學上の智識をお話し致しませう。口角が昂上り、口を大きく開け、
視勢何と無く鈍く濁つて眼中に毫も喜ぶ色の無きはサルドニ瘰癧と名づけ、患者の極
めて危篤に迫れる容貌で、サア大變醫者よ藥よと寸時も早く其の手當をせねばならぬ。口
唇を固く閉して眉間に縦皺を作り、苦惱不安の容貌を呈はすは劇しき疼痛特に胃腸の痛む
のか左無くば悲みと怒とが交々戦ふ際である。口は左右に牽かれ額には深き溝を作り、眼
は狭く小さくなり、口は左右に牽かれ外背に皺を生じて恰も笑ふが如き風を呈するは破傷
風顔とて破傷風の疑ある徴候なれば外傷・拔牙・皮下注射・外科手術及び分娩後或は流産等

無きかと確め、果して然りと言はゞ容易ならぬことだ刻一刻も早く、これが治療を施さねばならぬ。口を緊しく閉ぢ、眼球をグルグル旋らし、口より泡を出し、拇指を内に屈指し、拳を作つて人事不省となるは癲癇の症候で左程に驚くに足らぬ病である。一方の口角下に垂れ、一眼は大いに開いて涙を流し、而して眼瞼を全く閉づることが出来ず、其上屢々涎を漏してをるは顔面神経癱痺症である。額及び眼の周圍に腫脹を呈はし、且つ一種の光澤を放ち、睫毛及び眉毛が段々に脱け落ち、甚しきは獅子の顔に似て来るは之を獅子顔と名づけ、必ず癲病者に相違無いと言つても可い。額骨隆起り、頰部・額部及び眼球陷没し眼瞼の周圍に稍々赤色或は青色を呈はし、皮膚に冷汗又は粘汗を發するは虎列刺顔として世にも恐ろしき、虎列刺病の症候なれば斯様な人を見たら君子は危きに近寄らずと、早くその場を逃げねばならぬ。面貌何と無く阿呆然として、泥が附いてをらうと、墨が附いてをらうと、一向平氣で笑つてゐる如きも一種の精神病である。凡て顔は最も大切な器官の集合處なれば診断の材料となることが頗る澤山あるけれど、多くの圖を挿まねば説明し難いから次は皮膚の色に就いて聊か述べよう。

皮膚の色は健體に在つても年齢・職業・風土・人種等に由つても大いに異なるのみならず、實

物に就いて説明せねば了解し難いものだ。況んや予の拙い筆に於てをやである。何となれば色が白いから斯うの、黒いから何うのと判断出来ぬからである、例へば「遊ばせ」言葉で優しく暮さる、お姫様と「コラ妻ア」と怒鳴つてゐる漁夫とは、其の色「雪炭も管ならず」だが、何れも健康であるとか、何れも不健康であるやうなものである。されど今其の概略を言へば蒼白色・紅色・藍色・黄色・青銅色及び銀色の六種に分けることが出来る。蒼白色とは白の中に幾分か青みを加へてゐるので、玲瓏雪の如しと形容出来ぬのだ。併し蒼白色であつても、一定の度までは病氣で無いのである。例へば深窓の下に書物ばかり見てゐるやうな者は蒼白色たるを免かれぬやうな道理だ。然らば何を以て健不健を區別するかといふに粘膜即ち唇・眼瞼結膜などの色を見れば容易に判断がつく、縦ひ顔色幾分蒼白くとも粘膜の色が鮮かであれば病氣ではないから「些と戶外遊戯でもなさりませ」で宜いが、皮膚粘膜共に蒼白かつたら貧血病或は十二指腸蟲或は結核或は慢性の鉛毒、水銀毒、熱性病後等の中であると疑ひ、然る後他の診断を参考せねばならぬ。紅色は常に日光に照らされてゐる者は固より然りだ、がさうで無いのは、一般に多血性の人である。殊に顔色杏の實の熟したやうな色になつてゐるは腦充血・月經不調・便秘・高熱・酒精過飲或は魚蟹などの中毒等

である。藍色は一般の皮膚にも呈はる、が、それは甚だ稀で大抵は唇・鼻尖・爪などに限局するものだ。これは心臟に異常あるか、或は過勞・死期及び炭酸中毒等なれば、何れにしても打捨られぬ一大事である。黄色は東洋人の特色で、獨逸人は黃禍など、恐ろしがらるが、予のいふ黄色は一層甚しいので、白い手巾を以て拭へば、手巾に黄色の着く位なのだ。これは黃疸・十二指腸加答兒・肝臟病・珊篤寧の大量内服及び密柑の多食等の原因と診斷するが可い。青銅色はアヂソン氏病或は砒石中毒に呈はる、ものだ。世には色を白くする目的を以て亞砒酸或は法列兒水などの砒石劑を方法を過つて服むのがある、白色にせんとて青銅色になつたら、其の時の悲しさ果して如何、之を思へば病的で無い限りは天然の色に安んじてをるが可い。銀色とは硝酸銀中毒に限ると診斷しても差支無い。尙ほ色に就いては色々あるが次は毛髮の事を聊か述べませう。毛髮の黒きはこれも東洋人種の特色であるが、さりとて餘り黒過る者や又爾來左程黒く無つた者が次第に漆色に變るなどは癌腫の徴と疑はねばならぬ。白くなるのは肺癆者及び精神過勞者に多い。但し老年者は、この限りで無い。褐色に變ずるは其の原因不明であるが、兎に角色素の缺乏には相違は無い、現今西洋のコスメチックを着けて得々たるものがある、之れは西洋人が毛を軟かにし、且つその色

を宜くするために没食子酸といふ藥を入れてあるので、而して、この藥物は褐色にするの目的である。借問す高襟男子よ、それでも宜しう御座んすか聞かま欲し。毛髮の禿るのに、局處と全體とあるが、局處は寄生物、全體は熱病後・梅毒・及び腦充血などに屢々見る徴候である。この外肩から上膊などに惡液毛とて初生兒の毳毛に似たもの、生えるは結核的である。次に爪に就いて一言すれば、爪の甲に横溝を現はすは寧扶斯・癩疹などの恢復期で縦紋を呈すは貧血或は血行の障害である。又爪甲の彎曲してゐるのは、これ亦結核者の一徴候になることがある。

右に述べたる外に望診法では、歩ぶり坐工合、寢行儀、全身の骨骸筋肉等の鈞合など論ずることは澤山あるが、それは追々述ぶるとして、其の前に一言申したきは聲音のことである。聲音は望まる、ものでないから聞診法に屬すべき善では無いかと疑はる、方もあらうけれど、醫道で言ふ聞診は患者から病の過去現在に就いて聞き糺す法であるから、聲音は矢張望診の中に屬すべきであらう。人相家は聲音に就いても種々の説をなしてゐる。これは餘程道理に適つてゐるやうであるから、例に依つて、その二三を紹介すれば、概して高聲なるは正直の相。低音なるは不正直の相。高聲にして爽か、而も耳立つて聞えぬは賢者

に非ずんば能はず。其の音堂々として臍下より出るが如きは長命。其の音舌端より出るが如く而も散るが如く浮ぶが如く、或は漂ぶが如く濁つて且つ小なるは愚者の相也。語未だ終らずして聲の先きが絶ゆる如きは短命。又、くが如く悲しむが如く聞ゆるも短命或は貧賤者の相也。之を診斷學上で言へば概して高聲なるは健康者。低聲なるは薄弱者。高聲にして爽かなるは精神快活なるの徴候。其の聲嘶嘎れて聞ゆるは氣管支加答兒又は肺結核などの呼吸器病。語未だ終らぬ中に消ゆる如きは呼吸困難であるから、人相家の説と或は一致せる節もあるやうだ。されども東洋の人相家が、顔の青色は驚愕、黄色は喜悅、赤色は憤怒、白色は悲哀、黒色は殃害の相也と説くに至つては實に幼稚な論である。これを以て世の人の運命を判斷せんとするに至つては如何にも大膽なものと謂はねばならぬ。これで望診法の一斑を説いたが、尙望診法の中なる坐按排・歩工合・臥行儀などに就いて聊か述べてからにしよう。

先づ坐按排を人相家の方から言ふと整然と落着いてゐて、身體の大小即ちスワルト・パールと否とに拘はらず、大山の岬々たるが如くに、少しも動ぜざる趣あるは賢者の姿である。膝につき、肩を張り少し反氣味になつてゐるは傲慢で、これと反對に首を低れ脊を前

屈し如何にも喪家の犬の如しといふ風か、或はへい／＼御意で御座りますと、唯々諾々する番頭然たるは賤愚に非ずんば媚び諂ふの相である。その外足を開いて座れば何うの傾けば斯うのと色々言ふが、餘り細かい處に到ると、例の馱法螺的に流るゝか、或は牽強附會になつて了ふ。然るに診斷學上では座つてばかりるねば工合が悪い換言すれば横になつては苦しくて堪らぬのは咳嗽の劇しく出る徴候か、或は胸水腹水などの如く身體何れかに水氣のあるものである。それから又健體に就いて言へば或は傲慢の風かも知れぬけれど、脊柱を眞直にし、頭及び肩を少しく後力に反らして腹部を突出してゐる體なるは健康にして、之に隨ひ精神も快活なるの相とでも謂はねばなるまい、否斯うして坐つてゐる方が空氣を十分に吸ひ入れらるゝのみならず、脊柱彎曲症などに罹る憂は無いのである。次に歩行の状態であるが、これは診斷學上頗る必要なれど、割合に人相家は左程重きをおかぬやうである。唯前へ傾いて、小股にチヨコ／＼と早く歩くは輕忽性急であるとか、少し後方に反つて行く體なるは伸氣な性か、或は矢張傲慢である云々と、遂に此の論が下駄にまで及び前が減れば斯々、後が減れば云々と、下駄相まであるが、これは恰も彼の人走つて行くから急用があるに違ひ無い、遅く歩くから急がぬのだらうといふやうな取るに足らぬ愚論

である。それは偕おき醫道では姿勢直立せぬ患者を見ると彼の人は腦髓か脊髓かに異常あるかも知れぬ、若しさうで無くば、餘程衰弱してゐるに違ひ無いと、斯う疑ふのである。それから又歩き方が蹠々踏々として確實ならぬ者は矢張腦及び脊髓に故障があるのだ。彼の酒醉者が大道を千鳥足に歩くも酒精が腦を侵してゐるからである。腦を侵されてゐるから言ふ可からざることも言ひ、行ふべからざることも行ふのである。又其の歩行が調子を失ひ、恰も鶏の走るが如きに似て少し異なるは脊髓癆とて殆んど不治性の大疾病である。又別に怪我したでも無く、或は外科的の治療を受けたことも無いのに往々跛行に似たる歩き方をするは、子宮に故障ある婦人に多い。又面白いのは驅幹は前に屈り、上肢はこれに著き肘を曲げ手拳を作り運動は思ふやうにならず、時には自から起立したり、或は臥床に在つて臥反りすることも出来ないでゐた揚句に歩行すると、歩行が漸々早くなつてきて、容易に止まることの出来ぬがある。これは精神感動・火傷・窒扶斯などにあるものである。右の外種々の歩き方に依つて病名を異にするが大抵は腦脊髓及び神經に關するものである。次に行儀であるが、これには人相家は口を極めて論じてゐるけれども、多くは睡眠中即ち反射運動とて、無意に爲る行儀を彼是言ふのだ。所が死人の如き貌をして臥てゐるは

愚者の姿であるとか、或は仰向に大字的なるは賤者の相であるとか、けれども是等も信するに足らぬ説が多い。著者の如きは夏向になれば小兒も同じく西枕が東になるやら、或は仰向或は横、東西南北勝手なものだ。人相家に言はしむれば、嘸や至賤至愚と嘲るであらう。診斷學上では斯る無意の動作をいふのでは無くて、隨意の臥位をなすことの出来ぬものを参考とするのだ。即ち仰向より外に、横にも伏向にもなれぬのは兎に角重病者であつて大に注意せねばならぬ徴。又伏向ならば其の苦痛は緩解するけれど、其の他はとても堪へられぬといふは必ず腹部の疼痛である。又肋膜炎の如きは初め健側を上にして居れども、末期には病側を下にするものである。それから又ヒステリー患者は妙な臥方をすることがある、それは仰向になつて後頭部と踵の部とで身體を支へ腰を少し持ち上げてゐるのだ、之を醫道では角弓反張の姿と云ふ。我嘗て或る病家に行くと、一婦人が斯様な臥方をしたから直にヒステリーですなと言つたら、家人を始め、病者に至るまで『まあ驚きました室に入るや否や診斷がつくとは實に豪い御方である』と賞められたことがある。これは何も驚くに足らぬことなれど、予の爲には都合の善い臥方をしてゐたのである。次は愈々小兒診斷學に移りませう。

小兒診斷法

小兒診斷法

診斷學の知識は何人にも必要であるが、殊に小兒の診斷法は父母たる者の大いに心得ておかねばならぬことだ。同じく醫士を呼ばるゝにしても、先づ氷嚢を當て、おくとか、或は「血清御持參願ひ上候」とあれば如何程瞬間を争ふ病氣を助くるかも知れませぬ。これ皆診斷學を知る結果でせう。故に今順を追うてこれを話しする積りです。

嚴寒の折に一寸咳嗽聲一つ聞いても乾いてゐて短く、小さく、而も痛みある如く聞ゆるは急性の喉頭加答兒。其の吼る聲の一層劇しきは實布の里亞の疑ひ。呼吸短かく、吸氣長きは百日咳。濕つて寛やかで其の上身體に熱あれば肺炎かも知れぬ。僅かに此の位心得ても、コン／＼ヒール、偕て坊やは百日咳知ら、コホン／＼ヒュー、さあ嬢やは實扶的里亞で無からうかなど、何程の注意を促かすか計られず、さても診斷法の價値は愈々高く、愈々尊しと申さねばなりません。三千世界に子を有つた親の心は皆一つ、何うぞ此の知識を養つて頂きたいのである。

容貌を見る可し——バツ／＼／＼など叫びながらニコ／＼笑つてゐる生後一年未滿の赤坊から「もち／＼龜よ」など片言歌ふ四五歳の者に至るまで、兒供といふ兒供は、生來の美醜に拘らず何と無く活々したる可愛らしい容貌をしてゐるものだ。されど一旦僅かの病にでも罹れば直ちに其の容貌が變つて自から沈鬱の有様になり、小兒らしい無邪氣な顔は大人の心配してゐる如き風になる。病愈々重ければ大いに悶へ、大いに苦しい惱む状態を呈はすは言ふまでも無い。又先天的に鬱々たる顔貌を備へて如何に愛してもニツコリともせぬものがある、斯の如きは主に腺病質の小兒で、詳しくいへば皮膚蒼白く筋肉瘦せてゐて潤ひ無く顔面は浮腫あるかの如く見ゆるか、或は顔面が狭くて小さく、從つて身體弱く、細く皮膚は僅かの刺激で紅くなり易く、靜脈は透いて見え、而して往々皮疹の出來易い質である、斯る可憐兒を有つた親達は「今少し年が経つたら丈夫になるだらう」など、暢氣なことを言はずに早く小兒科専門の名醫に就き養まんとする撫子を活させねばなりません。それから話しは元へ戻りますが、爰に大いに注意すべきはサルドニン瘡笑といふ一種の笑顔であつて、其の口角が少し吊り上り、口を大きく開け恰も笑つてゐるかの如く見ゆるが、視勢何と無く鈍く、而も濁つて眼中に少しも活氣の無きを云ふ。事茲に至れば極めて危篤に迫れる容貌であるから、刻一刻も早く醫士よ藥よと其の手當を急がねばならぬ。然るに、若も悠々時を移してゐたならば其の笑顔の儘永眠するのだ。之を見る親の心果して

如何、嗚呼果して如何。次に小兒の病は眼を見る必要だ。若し身體に熱があつて眼を羞明がるは餘り宜しくない徴候と心得て可い。殊に瞳孔大いに小さくなつて、而も斜視の風を呈はして來たら、さア一大事、直ちに室内を暗黒にし、一方には急使を醫家に馳せしめ、一方には冷頭温脚兼ね行はねばならぬ、若し此の手當かないと醫士の來る時分は頸を硬くし、齒を噛みしめてブル／＼手を顫はせ甚しきは其の儘人事不省になることがある。次に今一つ眼に注意す可きは初生兒の膿漏眼、これは出産後三日或は七日の間に發するもので、最初は少し眼中に赤みを呈はしてゐる位に過ねども一晝夜経れば眼瞼次第に腫れ、續いて膿汁を洩し續いて衰れ墓無き目無鳥、されど其の赤みを呈したる當初に於て専門醫の治療を受ければ容易に治るものだ。思つて茲に至れば診斷學の價値愈々大なりと申さねばならぬ。此の外瞳孔の散大は寄生蟲の有る徴とか、鼻翼の動くは呼吸困難など、容貌に就いても多々益々辯じたくもあるけれども、餘りに専門的になりますから、これにて止め、次は啼聲に就いて申しませう。

泣聲——何うか斯うか片言雜りを話さる、やうな年になつてから泣くのは、必ず我が心身の苦痛を訴ふるには相違無いのみならず痛いとか痒いとか、或は菓子を欲しいなど、駄々

を捏ねるから、其の泣く原因を容易に悟られるが、唯泣のみを以て漸く單なる吾が意志を訴へんとする赤坊の泣聲に至つては、大人の語と同一的に看做さねばならぬものなれば、其の親たる者の大いに注意すべきことである。即ち必ず大人の思ふが如き苦痛ばかりに泣くもので無ければ又必ずしも乳汁を求むるのみでも無い。或は衣服が窮屈で呼吸に障害のある所から泣くのもあるし、或は襪襪が濕つて不快なる故もあらう。其の他皮膚を蟲が刺すとか、或は腹痛・熱等千差萬別である。故に育兒者たる者は常に能く小兒の身邊を取り調べて其の泣く原因が何くにあるかを診斷せねばならぬ。然るに唯乳嘴哺ませて其の泣聲を止めようとするは無智の母と言ふよりも寧ろ不慈愛の人と言はねばならぬ。斯う申すと然らば身邊を調べて見ても何の異常を發見することも出來ず、それでシー／＼泣くは主に腹痛と、次に述べんとする發熱との爲である。腹痛時の泣方はオギャ／＼キーといふやうに聲を引張り而も下肢を腹部に向けて引く様な状をなすものである。又其の様な状をしても亦間斷があるので若し刺すが如くに痛めばギャ／＼呼吸の絶ゆるやうに泣くは言ふまでも無い。そこで腹部に手を觸れて見ると、抵抗力が強い、これア便秘かも知れぬ、さア醫士を迎へねばと、

甚だ恐れ入候へども、小兒の灌腸器を御持參にて至急に御來診の程御願ひ申上候也。斯くありたきものだ。次に發熱の時は如何に泣くかを言ふべきであるが、それは次の發熱診斷法に在るから爰に之を略しておく。嗚呼難攻不落と唱へられたる旅順城頭に立つて三軍を叱咤したる御大將の號令も或は又格子の内から「一寸好男子」など叫ぶ妖婦の言葉も元は呱呱の聲の變化したるものなれば、之が慈愛の母たるものは能々オギャ／＼に注意せねばならぬ。

熱の有無——小兒がシー／＼泣かざるまでも、何と無く不愉快らしい顔色をして居るときは必ず先づ熱の有無を診斷せねばならぬ。之を診斷するには第一に育兒者たる母が愛の手掌を或は額或は胸腹或は手足などの各部に觸れて其の肌熱を試みるが宜い、されど其の觸る、人の手が時に依り極めて冷えてゐるか或は殊の外暖かであつたとすると、往々其の感覺を誤ることがある。故に最も簡便なるものは我が唇を小兒の額に當てるのだ。口唇の感覺は手よりも鋭敏で而も比較的誤らぬものなれば、小兒の熱を診斷するには極めて重寶で天が與へたる檢溫器と謂つても可い。斯く自然の檢溫器は結構なものなれど、人の感覺は練習に依つて發達するものなれば、之が利用を経験せぬ人は、これとて必ずしも確實と

は言へぬ。然らば何うしたら可からうか、曰く手掌や口唇を利用するは唯其の概要を知るに止めておいて、精密なる検査は固より眞の檢溫器に依らねばならぬ。之を行ふには大人と同じく腋窩に挿むのであるが、併し小兒の天性として或は之を取らんとし、或は之を厭がつて頻りに泣き動くことあれば該器を背部より靜かに挿み母の手を以て其の脱出を防ぎながら、何か玩具を見せるなり、又は、

寢いれや寢いれ寢いれお子。お子には熱があるらしい。これが普通であるならば。三十六度七分より。三十七度四分までの間に止つてゐるものを。計つて見れば四十餘度。嘔や嘔々苦からん。いざ／＼お醫者參らせて。服みよき薬上げませう。若しも昇つて四十二度。降つて三十三度五分。此の世彼の世の別れ路。別れはせぬぞ坊や坊、オ、能くも聞分て。寢いれよ寢いれ寢いれお子。

といふやうに、子守歌でも唄つて賺さねばならぬ。又醫士が診察するにしても其の眠れる時を最も好都合とするものである。然るにギヤ／＼泣かせながら無理に手を觸る、に至つては小兒科専門醫に御座候とは言はれぬ、否言はせぬ自然の規則になつてゐる。偕て檢溫器を挿んでゐる時間は十分位で、これよりも最も迅速に計らうといふには、檢溫器に油を

塗り、其の尖を肛門に入れおけば五六分時に知らるゝものである。されど腋窩より其の温度は常に半度高いものなることを心得ておかねばならぬ。

但し今は四分時間で計らるゝのが發明せられたから、従來の物と優勝劣敗の定則に従ふてあらう。

口中——蝶よ花よと愛くしんでゐる我が小兒が、何と無くむづかつてゐる状を見、若しや病氣ではあるまいかと、斯う氣附かれた時には早速前章まで述べたる診察法を試み、尙進んで口中から咽頭の奥までを窺いて見ることを夢忘れてはなりません。所が呼掛三歳にもなれば「アーンなさい」と母がして見せれば小兒も亦愛らしい口を開くけれど、未だ何も知らぬ一年未滿の嬰兒では、さうは參らぬから茲に一つの策略を施さねばならぬ。母の手指を小兒の下口唇に觸ると、小兒は母の乳頭と思ひ誤まり、不隨意に口を開く、口を開けば直ちに指を入れ舌を壓へて各部を見るのである。又オギャ／＼と泣き叫ぶときは殊の外大きな口を開くものであるから、其の機を利用して見るも宜い。さてそれにて見る方法だけは了つたとした所が、何が何やら盲者の垣覗同様では何の效も無い。されば左に斯うなつて居れば何う、何うなつて居れば斯うといふ點の大體を述べて見ませう。

普通であると赤子の口中は充血してゐるから、頗る赤い色を呈はしてゐて、而も大人と違

ひ分泌物の少ないもの故、一面に乾いて舌の上には幾分白い苔を帯ぶるものだ。されど其の赤い皮の上の處々には白い小さな點が出来、そして、それが口角にまで殖える徴候の見ゆる時は大概驚口瘡として一つの恐る可き所の病だ。斯る小兒は物こそ言はね、口中は灼くが如くに熱し、且つ痛み、乳汁一口嘔んでは泣くものである。次に舌の縁舌の背舌の繫帶などに圓く或は不整の形をしたる灰色の斑點を生ずるのである。これは亞布答性口内炎として前者程には恐る可き病で無くて、療治さへすれば、長くも二週間程経てから治るもの。それから又齒齦が紅く腫れて乾き次第に脹れ、即て又出血し、或は黄色の液が出て悪臭を放ち、發熱し甚しきは頬の部までも腫れるのがある。これは腐爛性口内炎として、名は恐ろしいけれど相當の治療だに行き届けば一二週間で退治出来るもの。次は咽頭の奥まで著しく紅くなり、従つて汚い色の白い點が方々に生じ呼吸のし難い状態になり、而も其の呼吸にヒュー／＼と笛聲を帯び、且つ乳汁を吐くなどの徴候が伴へば、これぞ彼の有名な實布的里で血清療法より外に殆んど道はなき／＼親は看護するのである。此の外咽頭・舌及び齒に就いて申せば際限がありませんから、それは略し、兎に角此等の病は、母が乳房の不潔より起る場合少くはありませんから、物言へぬ赤子に代つてかくなん申し侍る。

糞便——本章は實驗談より始めます。予嘗て所用あつて友人某を訪ね、色々話した末、某の曰く序と言つては甚だ失敬だが、一つ僕の二男を見て呉れ玉はぬか、君も知つての通り生れてから今日が丁度百日目、常に至極健康なれど、何うも糞便の色が青い、で今より半月程前に某醫の診察を受けたれば慢性腸加答兒とのこと、それから早速今日まで服藥せしめて居るが、何分にも効が無い、抑々これは何ういふ譯か云々。

予は小さき身體を限なく診察したれども、發育極めて完全で、何等の異常も認めぬ。然らば今一度予の前で新しいのを洩さしめてくれ玉へ」斯う言つて、予は時の至るを待ち居ると即て出たのは豈圖らんや普通の色而も硬軟の度大いに宜しきを得てゐる。すると夫婦は「オヤ／＼意地の悪いこと」予は思はず手を拍つて「無病です無病です」と叫んだ後、左の如く説明した。

儲健康なる乳兒の糞便は一日に二度乃至四五度も有つて別に臭氣も無く其の色其の硬さは恰も半熟卵の如きもの、そして其の洩し初めは黄色でも暫く経つと綠色に變るのが往々あるこれは便中に含めるビリンビン色素褐色膽色素が空氣中の酸素に觸れ、ビリヅエルヂンヘムに變化するので、強ち病的とは言へませぬ。されば某醫も疎忽であるけれども、奥様も亦女中に任せ

ておいて、時を経てから御覽になるといふ即ち「便の色は移りにけりな徒らに我が身怠り下女がせし間に」でせう、と大笑になつたことがある。

右は健康體を病者と診誤つたのであるが、次に眞の病的診察法に就いて聊か述べれば斯うだ。

小兒が泣きながら全身を前方に屈け、手足をビク／＼させて、一二の放屁をなし間も無くシャーと水瀉があつたり、或は乳汁の固まつた物か粘り稠い液體があつたりして、厭ふべき臭氣を放てば間違も無く胃腸の消化不良である。又その水瀉が初め色あれども、其の下痢の度數を増すに従ひ、其色の薄くなり、遂には米汁様になれば所謂「小兒虎列刺」と假定し、刻一刻も早く其の手當をせねばならぬ。又下痢に加ふるに、血點或は血線を交ふることあらば、これぞ彼の恐るべき赤痢であるか、左無くば重い腸加答兒である。それから又硬過ぎて一日に五六回以上なるも宜しく無い、と言つて利慾に汲々たる政治家の如く今日硬派かと思へば明日は軟派となるも勿論質の悪い腸加答兒と断定せねばならぬ。この外尙便に就いて申す可きことは數多あれども顯微鏡などを要すれば爰に之を略しませう。

檢脈法——昔しの醫士は脈を診るを以て尤も大切な事とし、脈の奧義さへ極むれば大抵

病の判断がつく位に心得てゐたものだ。それ故今も尙その風習が残つてゐて、患者が醫士の前に出ると、何事も言はぬ中にはや手を握らす可く構へてゐる。成程脈に觸るゝ必要も勿論有るけれど、彼の漢方家が尊重する程のものでは無い。然れども事の順序として素人方に必要な點だけを聊か述べて見ませう。

生れてから一ヶ月未満の健康なる小兒の脈は一分間は百二十乃至百四十も搏つが、それより月日と共に其の數次第に減つて、二年頃までには大凡百、三年頃より十歳頃までは大抵九十、十五歳以上に至れば、大人と左程異ならぬやうになり、平均七十三四搏に至る。之を検するには小兒の睡眠中が尤も宜い、何となれば小兒は僅かの刺戟例へば哺乳啼泣に由つても直ちに脈數を増すからである。脈は大抵の場合に於ては熱度の高い低いに従ひ、或は昇り或は降るもので、熱一度昇れば脈は大抵十搏(大人は)を増すが普通である、然るに熱は高度なるにも拘らず、脈數は少く且つ緩かになつたら、スハ一大事、急使を醫家に馳せねばならぬ、これ多くは腦膜炎を併發した所の恐ろしき徴であるからだ。これと反對に無熱にして脈搏がドツ／＼と勢よく進んだら心臓擴張病と疑ひこれ亦油断をしては勿論ならぬ。それから又今が今まで高熱であつたのに、それが段々普通よりも降りそれで脈

搏は多くなり而も細かく小さく刻んで來たら、あはれ最愛の懐子も心臓衰弱若くは心臓癰痺のために臨終を告ぐるので「嗚呼今一度此世の名残に此の乳汁一口哺んでたべよ」と泣いてゐる一刹那轉々車の音。やあ先生の御來診、依的兒の皮下注射取返しましたぞ、それあの通り笑つてゐらつしやる斯うなれば目出度く。

次は脈數非常に減つて、且つ緩やかになり、一分時間に漸く五六十四(大人は)四十倍しか搏たぬ様になる事がある。之は多くは黃膽病で恐る可きは恐る可きだが、小兒には餘り本病の無きのみならず、比較的治り易いものである。次は結代脈としてト／＼／＼搏つてゐる揚句に時々一二の休みがあることがある。これ固より心臓の工合が悪くなつて來たので、其の原因により色々區別はあるけれども、何れにしても、面白からぬ徴候。又奇脈と呼氣時に著るしく觸れ、吸氣中は殆んど消えなるとするのがある。これは心囊炎といふ病に多くあるし、又身體の衰弱にも伴ふことがある。右の外、脈の硬軟或は虛實等言ふ可き事は數多あれど、患者に就いて説明せねば了り難いし、一つは熟練の結果以心傳心的に悟らねばならぬと勿體をつけておきませう。

腹部診法——腹部診法と言つても腹部にも色々様々の臓器があるし、又其の一器々々に就

いても視診・觸診・打診・聽診及び内容物検査法等と多くの區別があるから、之を御規則通りに述べれば、数十章を要せねばならぬ。のみならず打診聽診等に至つては實地に就ても仲々説明し難いものなれば、爰には其の困難なる點を除き極めて了り易い而も肝要なる所を胃腸肝脾など、順序を立てずに單簡に述べて見ませう。

小兒の腹部に觸るゝには裸體にして仰に臥さしめ、兩足を集め合して診るが通則なれど、夏はいざ知らず暖室法の不充分なる我國の冬に於ては直ぐ感冒に罹る恐れがあるから、已むを得ず著服のまま、股の間より手を入れて検査せねばならぬ。斯くして診ると腹部一般に膨れ且つ硬くなつてゐるは兎に角面白からざる徴候で或は便通不足であるか、或は胃擴張であるか、或は胃腸病かである。若し夫れ其の張方が一層甚しくて、手に觸るゝ所の抵抗方も非常に強い時は鼓腸或は腹水或は腹膜炎と氣附かねばならぬ。そして若しも鼓腸ならば恰も空氣枕を壓すが如き感あるもの、腹水にあつては液體の波動を感ずるもの、腹膜炎に在つては僅かに軽く觸れても大に痛があるものである。併し斯うは言つて見るもの、此等の感覺は熟練の結果で無ければ確なる判斷を下し得られぬものなることを豫め御承知おき下されたいものだ。又我國の小兒は概して腹部大きく殊に農家の小兒に至つては、或

は鼓腸病で無からうかと疑はるゝ者さへ甚だ多い。これは植性物の食物を多く食はしむる所より瓦斯を發生するので強ち病的では無いけれども、又宜しい結果とも申されませぬ。次に下腹の右に觸ると大いに痛がり其の上塊り物或は瘰のやうな物を手に感ずれば盲腸炎と斷定しても宜い。又キヤー泣きながら痛がつてゐるけれど、手を以て壓せば大に痛みを緩らぐのもある。これは胃痛腸痛などで斯る徴候は比較的恐るゝに足らぬものである。その他曰く何曰く何、と際限有りませぬから、今章は之に止め次は胸廓の形に就いて御話致しませう。

胸廓の形——誰でも知つて居らるゝ通り胸廓は彼の大切なる肺臓・心臓の二神が鎮坐します宮殿なれば其の宮殿の形状如何を診て大に注意をせねばなりません。一定の年齢に達してから、此處が屈つてゐるの彼處が凹んでゐるのと氣を揉んでも仲々容易に治されぬけれど、まだ水骨とも言はる可き小兒の時代に在つてはこれが矯正を計られぬとも限りませぬ。されば其の診方を一寸述べて見ませう。

尋常の胸廓は左右同形で鎖骨上窩。鎖骨とは胸廓の上端に横はつてゐる骨で、同上は可成平かに胸廓の前壁は乳嘴の部に於て少しく隆くなり、胸廓の中央なる柱、即ち胸骨は眞直に立

ち、且つ其の部は稍々凹んで溝をなし胸廓の上三分の二は肋骨を視ること無く、下三分の二に於てのみ肋骨を視ることの出来るもの、而して胸廓の後なる脊柱骨も亦前後左右に曲らず其の上肩胛骨も左右同形に而かも餘りに目立たぬのが中等以上に發達してゐるのである。

然るに膨胸とて樽の如く或は太鼓の胴の如くに膨れてゐて、呼吸の際胸廓の縮張甚だ少きは、これぞ肺氣腫といふ病の徴、これと反對に縮胸とて鎖骨の上下が目立つて凹み、肋骨は一本／＼に著しく認められ、後の肩胛骨は離れて恰も翼の如くに在るは所謂肺癆質で、結核素因を有する血族に多い。又片側のみ膨れ片側のみ縮まるものもある、前者は即ち片側の氣腫後者は肋膜炎後等に往々見る所である。

次に脊柱に就いて聊か言はう。脊柱は固より眞直で無ればならぬのに、或は後屈し或は左右に曲つてゐるは何れも病的と謂はねばならぬ。其の後屈せるは尙儂病或は骨軟化症或は骨折骨瘍などの徴候ならずんば斯る習慣を附けたる結果で此のまゝに打捨ておかば結核症に罹り易い原因を作るのだ。但し八十九十の高齡に達してから、始めて斯くなるのは此の限りで無い。されども、老いて、尙眞直な方が勿論健康なのである。前屈は後屈を矯めん

としたる結果に多くある徴で餘り無いのみならず左程恐るゝに足らぬ。左右屈は筋骨の嫩弱なる兒童に強ひて構造の良からぬ椅子或は机を用ひしめたる等の習慣に多くあるは何人も知つて居らるゝことで有らう。又我國には小兒の帯を餘り緊しく締めたり、或は毎日子守に負はしめてのみある爲に、其の影響を胸部に及ぼし、胸骨は前に突出し所謂鳩胸を作り、従つて呼吸の妨害となり、可憐の小兒を薄弱にする者往々あるは慨はしき至りと謂はねばならぬ。斯く幼きより注意を至すと致さぬとの結果か否かは知らねど、兎に角西洋人は男女共に眞直に風を切つて闊歩する後姿は如何にも堂々としてゐるが我が國の人は幾分か屈んで「ヘイ御免なさい」といふ風をして、チヨコ／＼歩くは何と無う未開人めきてゐる。されば幼きより宜しく頭を眞直にし、チャンと腰を据ゑ左右の手を垂れ一二／＼ト／＼といふ如き調子で歩かしむるの習慣が肝要である。診断學としては些と岐路に這入つたれど序なれば附記しておく。

検尿法

検尿法

検尿法——検尿法とても仲々澤山あるが、今は其の最も著明なる蛋白尿と糖尿との検査法に就いて言はう。

蛋白尿とは蛋白質が小便に混じて出るのである。其のまゝに打捨ておけば身體は漸々弱つて遂には一命をも危くするに至るものだ。これが有無の試験法は小便を試験管に入れ、これをアルコール燈で煮て、これに硝酸を少し加ふるときは白色或は褐色の凝結が出来て管の底に沈澱するはこれぞ疑ひも無く蛋白のある徴候である、故に早く治療を施し身體の健全を計らねばならぬ。

糖尿病は、これも亦大切なる所の糖分が小便中に含まるゝを云ふ。之を診断するには、前者と同じく小便を試験管に入れ、硝着を少しく加へて熱するのである。果して糖分あれば黒色の物が出来るし、さうで無いのは何等の異状を呈はさぬ。先づは一安心目出度く、序に言つておくが健康者の尿量は、男子は一日に大凡千二百瓦。女子は千瓦乃至千二百瓦である。故に五百瓦以下なるか或は三千瓦以上なるときは必ず病氣あるに相違無い、糖尿病や腎臟萎縮などは増量するし、熱性病や又は肋膜炎などは、大いに減少するものなれば、其の量を検査するといふことも診断上亦大切である。して又糖尿病の最も簡單なる試験法は小便を少し嘗めてみるのである。通例の小便は鹽からいけれど、糖尿病ならば甘い。讀者諸君よ一派の學者にならうといふには、色々の辛酸を嘗めねばならぬことを御承知ありたいものである。

これにて蛋白及び糖分の検査法大要を述べたが、尙其の定量法をも一寸書いておかう。蛋白を定量するには先づ尿の一日全量より検査す可き尿を探り、而してシエルレル氏は蛋白を沈澱せしめ、之を乾かして探るのであるが、之は今や迂遠なる方法として斥けられるやうになつた。乃で最も速に用ひられる方法はエスバツハ氏の蛋白計といふ器械を用ふるのだ。之は其の器中の蛋白層の高低に従ひ其の度目に依て蛋白の量を計算するのである。即ち一日の排尿を濾して之を試験管の或る度目まで入れ、次に蛋白を凝結沈降せしむる藥即ちピクリン酸十瓦枸橼酸二十瓦蒸餾水適宜を加へて又或る度目まで充し、護膜栓をして之を放置し然る後其の蛋白層の高さを讀むのである。糖分を精密に定量するにはフェリング氏の定量法を以て行ふのである。即ちピベットを以て二立方仙迷のフェリング氏液を他の試験管に測り取り、殆ど十倍の水を以て稀釋して煮沸し、點滴計に由て一乃至三滴の尿を加へて熱し、落射する光線に於て液の尙藍色になるや否やを見、藍色になれば再び一二滴の尿を加へて煮沸し、藍色の全く消えるまで續ける後加へたる尿の瓦數に均しく〇・〇一分の糖分を含んでゐる。乃で二十滴は平均一立

方仙迷であるからプロセントの含量を計算することが出来るのだ。併し右蛋白質分何れも實際に就いて説明せねば了らぬ、讀者之を詳しく知らうと思はゞ、斯道の人に親しく就いて學ばれたい。

診斷學大要終

藥物學大要

藥の配合

藥局方が改正になつてから藥名の變つたのがある、例へば安知歌貌林はアセトアニリドとなつた様なものだ。併し本章には矢張從來呼び慣れた名前に依てある。之は家庭用の書物であるからだ。讀者之を諒とせられよ。

藥の配合——甲藥と乙藥とを無暗に混ぜて服んではならぬ。化學の智識無き藥醫先生の中に往々之が爲に大失敗を來したる例は澤山ある、今一二の例を擧ぐれば甲醫は梅毒と赤痢と併發せる患者を診察し、思ふやう、梅毒には沃度加里が良藥、赤痢には甘汞が妙劑なりと豫て知り居ること、て、此の二藥を一つは水劑として、一つは散藥として服ましめたるに、二病何れも效無きのみならず、日を経るに従ひ、一方ならぬ化中毒に罹り、甚だ危險に迫つたことがある。又乙醫は妊婦が豆波利と痔とに悩めるを診て、暫し小首を傾けた後、豆波利には鹽酸加里よし、痔には硫黄これ妙と勇んで自ら藥室に至り、二藥を乳鉢に入れ、乳棒を持ち力を籠めて擦り混ぜれば、こはそも如何に轟然音して爆發した。

乙醫は思はず後へに撞と倒れ後頭部を打ち顔は處々火傷しながら其の儘氣絶、この凄い音を聞いたる家人を始め患者まで水よ薬よと騒いだる末、漸く蘇生はしたものの、これより誰以て診察を乞ふ者が無いやうになつた。斯やうな次第であるから、私が處方を書いた通りの外、讀者諸君に於て、自己流の配合を決してなさりますと堅く斷つておきます。

連服する勿

連服する勿れ——如何に薬の效驗等を知つたからとて醫士にもかゝらずに一つの薬を長く用ひてはなりません、萬已むを得ざる折、一時凌ぎの爲に應用して頂きたいのである。

病性も確めずの一つ薬を連服すると測られざる薬の中毒を招くことがある。これにも大失敗の好い例がある、この失敗は鍼醫どころか某國某大學の某醫學士が十二指蟲の患者を治療して綿馬越幾斯といふ殺蟲薬を今日も明日もと連服せしめたるに、病は漸く快方に赴きたれど、あな恐ろしや兩眼忽ちに明を失ひ、あはれ果敢なき目無鳥、さア斯うなると患者は憤るまいことか直ちに法廷へ損害賠償の訴訟を申立てた、されど元來この醫士は綿馬は殺蟲の效あることのみを知つてゐて、連服の結果失明に至るものなることを知らぬのであるから、故意に爲したる罪で無いのみならず、一方の重病を退治したる功もあるし、且つ連服せしめてはならぬといふ規定も無きことなれば、この訴訟は成り立たずして原告は盲

薬と年齢

目にせられ損となつた。けれども天下の制裁は法律よりも恐ろしいもので、以後は斯道に不明なる盲目醫者であるとして誰も相手にせなかつたといふ。自然の罰を受けるは、これ殊に自業自得と謂はねばならぬ。

薬と年齢——すべて薬の分量は年齢に依つて相違がある。ガウピウス氏といふ醫士は二十年から六十年までのものに與ふるを常量即ち一位とし、左表の如く定められたのである。

一年以下の者	十五分の一	四年乃至七年	三分の一
二年以下の者	八分の一	七年乃至十四年	二分の一
三年以下の者	六分の一	十四年乃至二十年	三分の二
四年以下の者	四分の一		

六十年以上に至れば年齢を加ふるに従ひ大凡四分の三、三分の二、二分の一等の比例を以て減するのである。又ヨングといへるドクトルは十二年以下の小兒に與ふる用量を記憶し易いため左の法に依り計算することにした、即ち現在の年齢に十二年を加へ、分母とし現在の年齢を分子とするのだ、例へば三年の小兒に與ふる分量は $\frac{3}{3+12} = \frac{3}{15} = \frac{1}{5}$ となるやうな道理である。今順次に列記すれば、

(二例) 含糖百弗聖 三・〇 稀鹽酸 一・〇 單舍 八・〇 水 一〇〇・〇

右一日三回分服(消化不良の處方)

これならば、先づ含糖百弗聖を天秤にて三瓦を秤り、これを温湯斗に移し、稀鹽酸及び單舍をメートルコップで量り、これをも温湯斗に入れ、それに水百瓦を加へ能く溶解するやうに箸様の物を以て掻き混ぜ、之を漏斗で瓶に移し、一日三回に分服するのである。

(三例) 攝涅瓦浸(三・〇) 二〇〇・〇 稀鹽酸 一・〇 單舍 八・〇

右一日三回分服(咳嗽の處方)

これは先づ攝涅瓦を括弧内だけの分量を秤り、これを温湯百瓦にて五分時間煎じ、これに稀鹽酸と單舍とを加へ、其の煎じ詰つた丈水を入れ、更に百瓦とし、一日三回に分服するのである。

「浸」は温湯にて五分間煎するので、「煎」は温湯にて三十分時間煎することゝ心得ておくが可い。さうして何れも括弧内の分量を其の下にある分量の温湯にて煎するのである。

(四例) 還元鐵 〇・三 規尼涅 〇・一 甘草末適宜

右六丸と爲し、一日三回食後二丸(強壯藥の處方)

先づ還元鐵・規尼涅及び甘草末を乳鉢に入れ、乳棒を以て能く擦り混ぜ、これに護膜末少許りと水二三滴乃至五六滴を注ぎ、更に能く擦り混ぜて之を掌に載せ、能く捏ね、それを六個に分ち丸めるのである。

(五例) 重曹 三・〇 硝蒼 一・五 貴若越幾斯 〇・〇六
右分三包一日三回一包(胃痛等の處方)

この處方に於て困難なるは貴若越幾斯である。まづ重曹と硝蒼とを秤つて乳鉢に入れ、に越幾斯は煉藥製であるから、直に天秤の皿に載せることは出来ぬ、故にまづ笱皮を小さく切つて、之を何瓦あるかを秤り、これに越幾斯を載せて秤るが宜い、然る後該藥を乳鉢の先へ悉く塗り、前の二藥を擦り混ぜるのである。

以上素人流に調合する法を述べたが、黑人の爲に聊か詳しく説けば左の通りである。

滴量及滴量器——液量は普通のメートルコップでは大抵半瓦以上で無くば量ることが出来ぬ、故に稀鹽酸〇・一といふ如き少量を調劑しようとするには其の量り方が一寸六かしい、乃で醫家は斯る場合に多く滴数を用ふるのだ、然れど滴は其の液の比重の大小、液體の稀薄と濃厚、液體を滴し出す器の縁の如何に依て精密なる分量に行かぬものである。さ

滴量及滴量器

液體の種類	一瓦中の滴量	一滴の重量
水	二十滴	〇・〇五
丁幾類油類	二十五滴	〇・〇四
爾舍利誤別及拔	十二滴	〇・〇八
依的兒	五十滴	〇・〇二
酒精	三十滴	〇・〇三
硫酸	十滴	〇・一〇



れば第一圖の如き滴量器を用ひて更に角同大の滴を得るやうになつた。之に依ると種々の液體の一グラムは大約右の如き滴數を含むものである。

次に外用の目的殊に點眼に對しては第二圖に示すが如き器械を用ふ。これは藥液を瓶に盛り、其の栓として挿んである管を少し引き出し、其のゴムを貼つてある部を指で壓して直

皮下注射及其の方法等



ばボタリくと一滴宛落ち下るものだ。斯くの如くにして落ち下る滴は四十滴乃至五十滴で大約一瓦に達するものである。

皮下注射及其の方法等——皮下注射器は特別なる物を除くの外は通常一瓦の容量あるもので、注射筒は硝子で出来、其の唧筒は第三圖IIの如く十分に度を劃り、圓筒の尖を

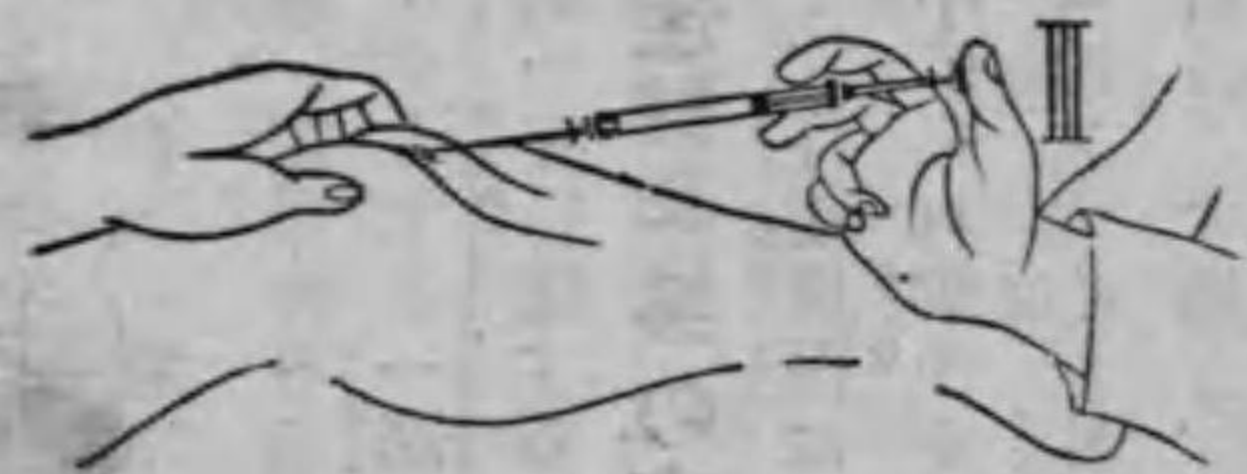
藥液に入れ唧筒を抽けば藥液は圓筒内に充つ、是に於てIの鍼を圓筒の尖に嵌めるので鍼は無論其の心が空洞になつてゐる。之より此の圓筒内なる藥液を皮下に注射せんとするにはIIIに示す通り、右手の示指と中指との間に注射器を挿み、其の拇指を唧筒の頭の上に置き、次に左手の拇指と示指とを以て注射の目的と撰んだ部の皮膚を強く牽き上げ其の牽き上げた爲に出来た皺の基底と可成並行して皮下組織中に鍼の尖を刺し入れ終りに尙少しく鍼を進め入れ、然る後牽き上げた皮皺を弛めて低く下げ唧筒を壓し進めるのである。斯

く注射し終らば圓筒を回轉しつ、鍼を抜き出し、拇指を以て其の刺し口を壓し、又軽く



之を摩擦して藥液がよく
結締織中に行き渡る
やうにする。此の際刺口

第三圖



所を除くの外は身體中何れの部へ注射するも勝手なれど、エルゴチンや昇汞などの如き刺

より出血すること、時偶に無いでは無いが、極めて僅であるから指を以て壓し、絆創膏でも貼つておけば間も無く止血するものである。元來皮下結締織は淋巴管や血管に富んでるから、注射した藥は甚だ暫時で淋巴道及び血液に入り、これと共に遠く距つた器管にも達することの出来るものである。抑、皮下注射は内服よりも效を奏することが速かであるし、又胃を傷める憂が無いからこれを賞用するので、其の作用は大抵全身的なれど、稀には古加乙涅の注射の場合の如く局所的なるものもある。又序に言つておくが大抵の藥液例へば莫兒比涅・必魯加兒比涅などの如き刺戟性ならぬ物は、大血管ある局

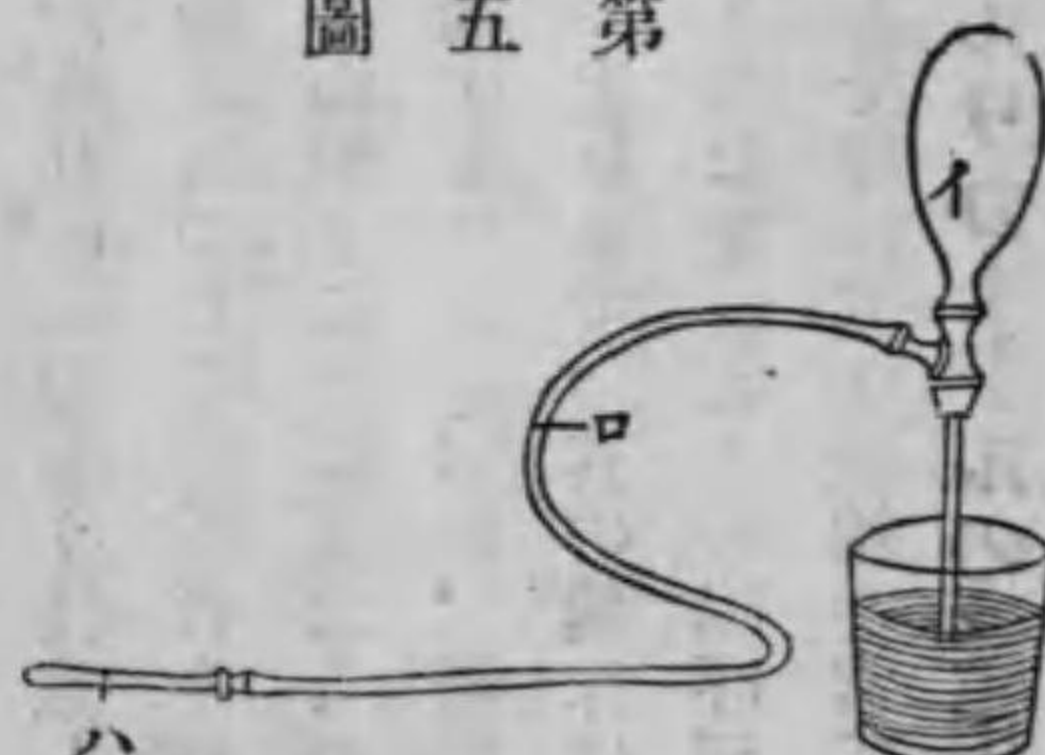
戟性の物は背部か臀部に注射した法が可い。
灌腸と器械——灌腸とは液體狀の藥物を直腸に灌ぎ入る、ものであるが、其の目的とする所は局所或は全身の作用である。局所的作用は直腸粘膜の疾病を治し、或は腸の蠕動力を興奮若くは鎮靜せしめるためで、全身的作用は滋養物を入れて體力を保ち又は増進し、或は癩瘡藥に

第四圖



由て疼痛を鎮める爲である。乃でこれに使用する器械は現今では第四圖と第五圖との二通りを用ふ。即ち第四圖の囊部に藥液を吸ひ込ませ、(イ)を直腸に入れ囊部を壓迫するのである。又此の器械を陰門に應用せんとする時には其の(イ)を脱いで代りに(ロ)を嵌めれば可い。されど藥液を多量に灌腸せんとするには第五圖を主に用ふ。即ち(イ)なる囊部の尖にある金屬の管を藥液に入れ、(ハ)部に油類を少し塗つて徐ろに直腸に入れ、其の周圍を紙か綿かで巻き、左の手指で固定しおき、(ロ)ゴム

第五圖

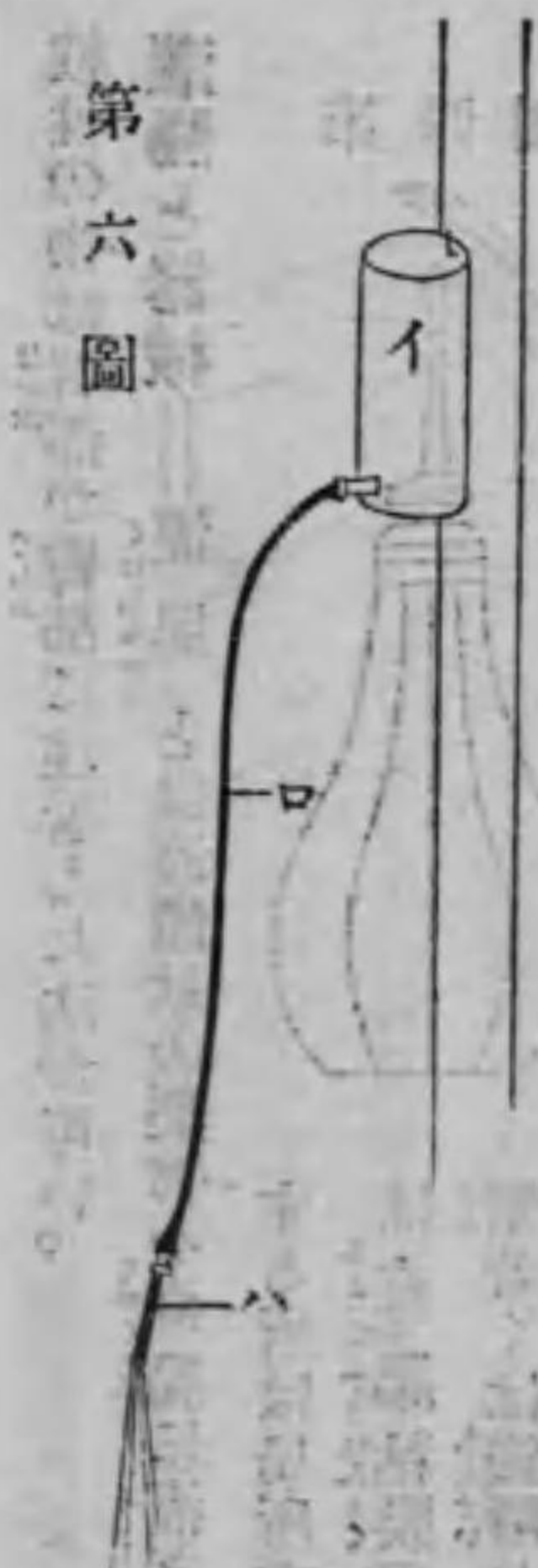


藥物學大意

イルリガートの使用

管が折れ曲らぬやう注意し、右手に握んで壓迫したり緩めたりして目的通りの薬液が悉く直腸に入つたら（ハ）管を抜きつ、豫て當て、おつた紙又は綿を以て肛門を壓へ、薬液の流れ出ぬやうにせねばならぬ。然るに醫學校卒業仕立の先生には、此の紙或は綿を當てつ、灌腸することを忘れ、灌腸してから急に（ハ）管を抜くと、豈圖らんや糞便混りの薬液は勢よく走り出で、其の飛沫は何の容赦も無く先生の顔と言はず衣服と言はず四方近邊に散りか、つた珍談もある嗚呼何事にも熟練は必要なものである。猶又其の（ハ）管を抜いでから約五分時は其の紙綿を當ておき患者の洩したがる糞便を堪へさせるが宜い。

イルリガートの使用——第六圖は Irygator 灌漑器とて、といふ器械を柱の折釘に懸けてある所である。此の器械は其の用途の廣いもので、或は灌腸器にも代用せられ、或



は子宮病者の用にも立ち、或は諸般の外科手術の際などに膿や血を洗ふ用にも使ふ重寶なものだ。即ち（イ）は金屬製の圓筒で之に薬液を入れ高き所に懸け（ハ）管の尖を

第六圖

塞いで、今や灌がんとする局所へ向けたら其の塞ぎを除くと薬液は（ロ）のゴム管を通つて送り出るものである。而して素人にも容易に取り扱ふことの出来るものなれば、何人も一個位は貯へおいても敢て無用の長物では無いと予は思ふ。併し一般の子宮病者が之を自宅で使用してゐる方法を聞くと多くは便所の柱に懸けておいて、便所で洗つてゐるやうだがこれでは十分で無い。眞に子宮を洗はうと思ふならば、便所ならぬ所で患者は仰に臥て、少し臀部を高い位に臺をなし、而して其の（ハ）管を陰門に挿入しつ、洗へば其の患部へ薬液が能く浸み渡るものである。序ながら素人の方が傷を洗つたり慢性子宮内膜炎を洗つたりする薬液の處方を書いておかう。

▲石炭酸 一・〇 水 九九・〇

右外科用の洗滌用

▲石炭酸 一・〇 水 二九七・〇 單寧酸 二・〇

右子宮洗滌料 但し使用の際其の薬液を少し温む可し

蒸氣吸入法——薬液を蒸氣の状態になして吸ひ入れることを蒸氣吸入といふ。即ち該器は第七圖の如くに組み立て、釜に湯を八分目程入れ、其の下なる酒精燈に火を點け硝子の

蒸氣吸入法

藥物學大意

膠囊劑

圖七第

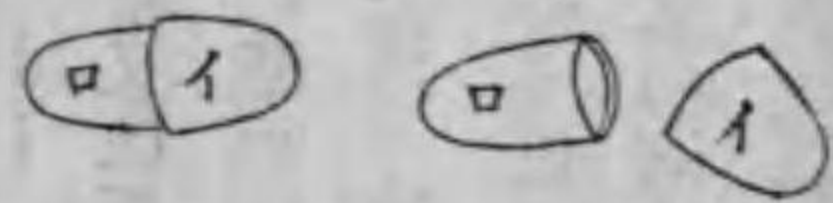


コップには所要の薬液を灌ぎ暫時経つと湯の沸騰するに従ひ、薬液を吹き出すものだ。乃で患者が大人でも左程苦しく無い病であると坐つてゐながら十分にこれを吸ふけれども、若しも重病者であつたり、或は又重病ならざるも聞き分けの無い小兒であつたりするときは横に臥かせながら吸はせて手足を該器に觸れしめぬやう注意せねばならぬ。

膠囊劑——膠囊劑とは非常に不快なる味であつたり、或は厭ふ可き臭氣を放つたりする所の液體又は半流動體乃至は粉末狀の藥物例へば骨汗波拔爾撒漢・結列阿曹篤・イヒチオールなどを膠囊に入れて胃中等に送る

をいふ。而して此の膠囊に硬性膠囊と弾力性膠囊との二種あつて、普通には硬性を用ふ。硬性の大きさは〇・五乃至五・〇を容れられる位であつて、弾力性の方は三・〇乃至一〇・〇も容るゝことが出来る、即ち弾性の方は其の膠の質が弾力あるから嚥み下し易くて、肝油

圖八第

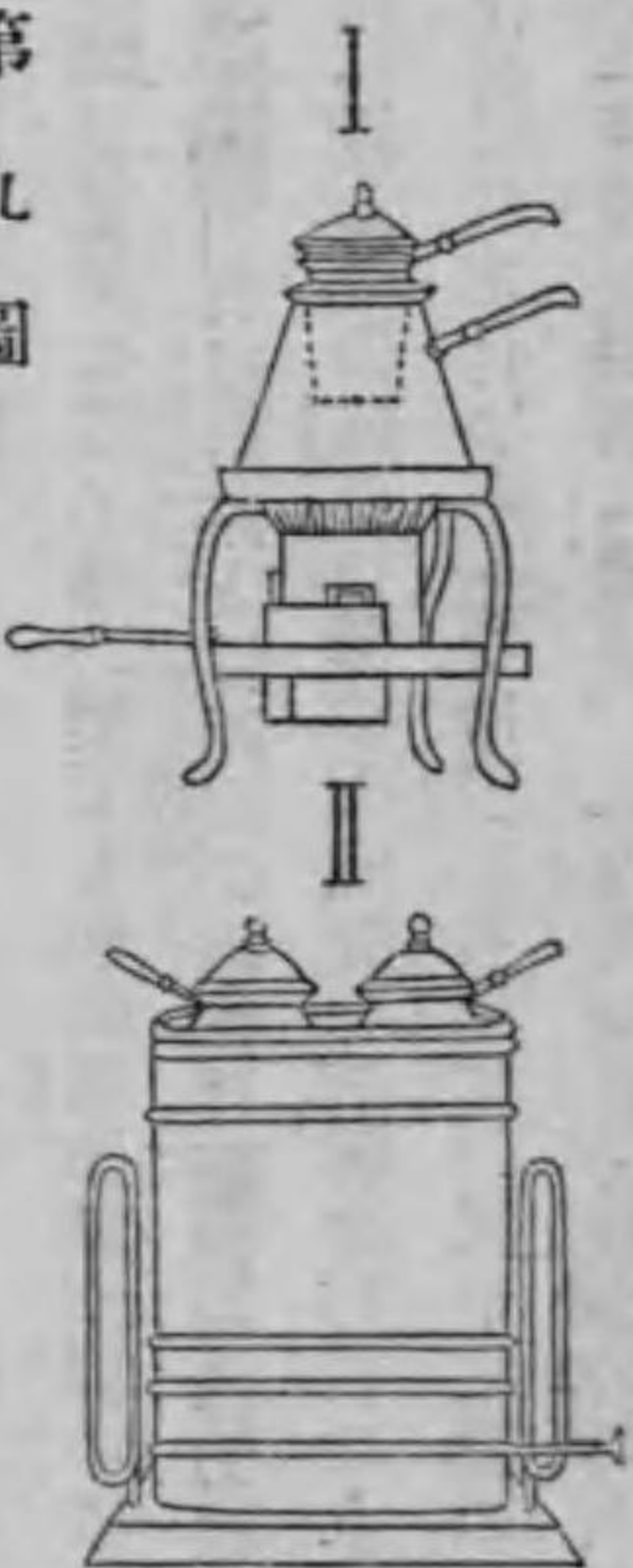


やりチニ油などの如く大量を用ひねばならぬのに都合が宜い、何れにしても第八圖に示してある所の開放せる(ロ)に薬物を入れ(イ)を以て蓋をなし(イ)と嚥めるけれど、硬性の方は咽に懸ることがあるから口に入れたる後暫時舌の上に置き、少しく唾液を以て潤したる後嚥み下すが可い。併し粉劑は此の膠囊に入る、よりもオブラートに包んで服む方が宜い。

Obiateとは餅の粉を薄く乾かしたる煎餅に似たる物である、これに粉薬を載せ、別に平たい小皿様の物に少量の水を盛り、右の薬を載せたるオブラートを其の水の上に浮べ箸を以てオブラートを折り疊んで薬を其の中に包み、其の水と共にクッド嚥み下すのだ、如何なる不味い薬でも何の造作無く胃中に送ることの出来るものである。

浸出劑——浸出劑とは固形の植物性薬物を其の物に依り或は時間内に於て水、稀には酒精に浸し其の液中に薬物の成分を溶解せしむる水様液體の總稱である。而して其の浸出が常温に於て行はるゝを冷浸と名づけ、五十度乃至七十度に於て行はるゝを温浸と名づく。次に沸湯を薬物に灌ぎ、之を更に重湯煎氣の意上で五分間煮るを熱浸といひ、濾したる液

浸出劑



第九圖

量を示す所の線を劃したる錫製又は陶器製の鍋を載せてある。即ちIは酒精燈を以て煮るので、IIは二つの鍋を小さな石油燈の竈の上に置いてあるのだ。之で一定の時間煮たる液は綿布又は亞麻布製濾布で濾し、尙濁つてゐるなら更に目の細かい物で濾すが宜い。次に處方箋に藥物の分量を示さずに書いてある時は其の藥物一分に就き十分の濾したる液を得可きを云ひ、括弧を附けてあるときは括弧内の分量を浸劑又は煎劑として括弧外の液を得らる、やうにとの約束である例へば纈草浸一〇〇・〇と書いてあらば纈草根一〇・〇を浸劑にして其の液一〇〇・〇を得らる、をいひ、機那煎(四・〇)一〇〇・〇と書いてあつたら機那皮四・〇を煎劑にして其の液一〇〇・〇を得らる、やうにするが如し。

を浸劑と稱へ、其の煮ること三十分時で得たる液を煎劑と呼ぶ。此の浸劑又は煎劑を製する器械は前章に於ては土瓶を以て代用しおいたが、之を正式に行らうといふには第九圖の如き器械が必要である。第九圖の内面には液の分

藥物使用上に必要なる術語の解釋

一回量——患者が一回服用する藥物の量。一日量——二十四時間以内に入る藥全量。藥用量——藥物用量の大小に拘らず醫士が患者の病を治す目的の範圍内なる量。中毒量——藥物を用ひて中毒症を起す可き量。致死量——藥物を用ひて生命の危険を來す可き大量。極量——藥物量の最高限で、此の量を起えたら中毒量の範圍に入らうとする量。主藥——其の病氣に對して主眼なる藥效を期す可き藥。佐藥——主藥の效を助けたり、又は合併症を除く目的の藥。賦形藥——或る藥に適當なる形態を附ける爲に用ふる藥で、例へば水・酒精或は甘草末・白陶土の丸劑の基礎となる藥物等の如し。矯正藥——不快なる味や臭を有つてゐる藥物を不快ならぬやうにし、或は美しき色を附けて外觀を宜くする藥で、細く區別すれば矯味藥・矯臭藥及び矯色藥となる。以上説きたる主藥以下を左の處方に依て例を示さう。

- ▲臭剝 (主藥) 三・〇 苦味丁幾 (佐藥) 二・〇 單舍(調味の目的) 八・〇 水(賦形藥) 一〇〇・〇

右一日三回分服

粉劑——散劑とも稱し、均等に細かく粉狀に碎いてある乾いた藥物で、これに外用と内用

錠劑を日本
左局方には
定規あり
錠劑ハ特別
ニ記スルモ
ノ外ハ善
ク乾燥セル
藥物ノ細末
及乳糖ハ末
白糖ノ細末

とあるが、内用には可成調味薬を交ふるが宜い、若し調味薬を交へても不快なる味の免れぬ物は丸劑とするか或はオブラートで裏まねばならぬ。丸劑——粉末狀の藥物を液體或は半液體或は軟かな粘り性質の物と能々混ぜて一個の重量大抵〇・〇五乃至〇・二位の球形に丸め、服用後胃腸に至つて溶解せしむ可き目的を有つてゐる物であるが、少數を製する場合には乳糖乳棒で捏ね、目分量で分けるけれど、多くの丸劑を各個均等に作らうといふには、ライマン氏の丸藥製造器を用ひねばならぬ。而して丸劑の賦形藥としては主に甘草末・亞爾答亞根末・石松子末などを用ひ、又賦形藥を兼ねて結合藥としてはアラビアゴム末及びトラガントゴム末を用ふ。されど特別な藥は此等では其の目的を達せられぬ、例へば結列阿曹篤には蠟・昇汞・硝酸銀などの如く植物質に逢つて分解し易い物には白陶土を賦形藥とするが如し。錠劑——白糖を以て基礎即ち賦形藥とし、時にはトラカクタゴムを加へて結合藥とし、これに種々の藥物を包んだもので、其の味甘く其の重量大約〇・一厚さ二乃至五密ミートルの扁平圓形の塊りである。此の錠劑を製せんとするには先づ主藥を取り、次に賦形藥たる白糖を和せ稀酒精或は偏里設林を以て潤し、之を捏ねて適宜の軟塊となし、其の際結合力が足らねば少量のトラガントゴム漿を加へて、之より錠劑製造器に上せて製するので

チ混和シ稀
酒精ヲ適宜
濃劑ニ至リ
得ルニ至リ
一(ガ)ノ錠
トナシ錠劑
塊ノ粘合劑
難キトシハ
極メテ少量
ヤゴムヲビ
加フルコト
チ得

ある。此の器械は今や色々のが發明せられてゐるが、一々紹介するは煩はしいから省いておく。砥劑——糊の如く或は粥の如く混和したる藥劑で、多くは植物の末舍利別・蜂蜜・拔爾撒謨・果泥などから成るものであるが、今は餘り之を用ひぬ。されど小兒には時々之を利用することもある。糊泥劑——外用にのみ供する軟かな粘り混和劑で、皮膚病に應用すると都合が宜い。其の目的は皮膚を清涼にして癢さを減じ分泌物を吸ひ取り、藥物を皮膚に固定して其の效力を強くするためだ、これも砥劑と同じく固形及び半流動狀或は液狀成分を區別す、而して固形中和性の基礎成分として用ひらる、は炭酸麻痺溼溼・澱粉・沈降性炭酸加爾叟謨・白堊・石松子・白陶土・酸化亞鉛・デキストリン・滑石・硅土などで、半流動の中和成分は華攝林及び其の他の軟膏劑で液狀中和性の成分は脂肪油・偏里設林・蜂蜜・澱粉・糊液及び水である。軟膏劑——日本藥局方に「軟膏劑ヲ製スルニハ特別ニ記スモノ、外ハ先ヅ難溶性ノ物質ヲ熔融シ次ニ易溶性ノ物質ヲ和シ、半バ冷却セル熔塊ニ藥物ヲ親密ニ混和シ、全質均等トナルニ至ル可シ」とあるが、之を素人に了り易く解釋すると斯うだ。軟膏劑とは豚脂・蠟・刺納林・華攝林・巴拉賓・偏里設林・澱粉などの中、一種若くは數種を基礎質とし其の基礎質が數種より成るときは火にかけて、比較的に火に熔け難い物を先に熔し、

次に熔け易い物を和ぜ、半ば冷えたる其の塊りに目的の藥物を混じ、全質が均等となるまで能く和せるのである。例へば水銀軟膏は豚脂・牛脂の基礎質と其の主薬なる水銀とからなるものなれば、之を製するに其の熔け難い牛脂を先に熔し、次に熔け易い豚脂を和ぜ半ば冷えたる所へ水銀を少し宛均等に混ぜるやうな譯である。

硬膏劑——は其の製方敢て前者と違はねども、其の基礎質の性質が違ふから、前者はトロトロと軟かなるに反し、これは常温に於ては硬く、體温に觸れ、始めて軟化し、且つ皮膚面に粘着するものをいふのだ。彼の絆創膏の如きも硬膏を布片に攤したるものに外ならぬのである。琵琶劑——は軟かい糊の様な稠さを有つてゐるもので、普通には粉末状の物質に液状物質を附け加へて製するのである。之を用ふる目的は身體の外部に附け其の濕つた温を受けしめ、或は之と同時に醫效を奏せしめるためである。乃で此の琵琶劑にする藥物は主に亞麻仁粉・亞麻仁油・餅粉・大麥粉・小麥粉などである。即ち之等を温湯に加へて捏ね、體温に均しい温度となし、之を亞麻布綿紗などに包んで患部に貼て、更にフランネル様の物を以て之を掩ひ、其の温温を護るのである。ブリスニツ氏巻法——これは布片を温湯に浸し軽く搾つて疊んだものを患部に貼て、矢張前者の如くフランネル様の物を以て被ふ

のである。芥子泥瑟布——芥子末を水又は微温湯で捏ね、然る後、前に述べたやうに瑟布とするのだ。其の目的とする所は其の部へ充血せしめて熱を導かんためである。坐藥——これは目的とする主薬にカカオ脂の如き體温に逢つて熔ける所の固形體の脂肪或は偲里設林を以て弾性の塊りとなせる膠質を具へてる混合物を賦形薬となし、之を圓錐状或は棒の形或は卵圆形或は球形等に造り、直腸・陰門・鼻などの如き孔の中へ挿し入れるをいふ。今例を舉げていふと、直腸へは腸排泄の目的を以て石鹼坐藥・偲里設林坐藥・蘆薈坐藥等を以てし、直腸壁部を保護したり、又は緩和したりする目的には主にカカオ脂を單純に挿入し、收斂の目的には單寧酸坐藥・明礬坐藥などを以てし、防腐には石炭酸坐藥・沃度仿謨坐藥など、殺菌には主に册篤寧坐藥を用ふ。陰門坐藥には單寧酸・硫酸亞鉛・沃度仿謨・古加乙涅などで、鼻には矢張明礬石炭酸イヒチオールなどを用ふ。尙二三の處方を左に書いておかう。

▲醋酸鉛 二・〇 阿片末 〇・五

右混和して十分し、何れもカカオ脂に包んで十個に作り、朝夕一個を用ふ可し(白帶下)

▲阿片 〇・三 サロール 一〇・〇 無水ラノリン 〇・四 カカオ脂 四〇・〇

振盪合劑

右二十個に分け壓搾して坐藥二十個に作り、一日四回、一個宛直腸に挿入す可し
(直腸内の潰瘍に下痢を兼ねる者)

▲カカオ脂 二〇・〇を火にかけて熔かし石炭酸 〇・五を混ぜ右十個に分け鼻孔に挿入。(臭鼻)

振盪合劑——冷水にも温湯にも熔け難く或は全く熔けぬ所の藥物で、其の比重の甚だ大ならざる粉末状の物を其の冷水なり温湯なりに入れて之を振り盪かせば暫時で其の液體と平等に混合することが出来る。乃で其の混合したる瞬間に服用するを名づけて振盪合劑といふ。されど餘り比重の大なる甘汞や鐵粉の如き或は水と平等に混合せぬ性質のあるクロロホルムや列並油などの如きを振盪合劑としてはならぬ。これにて素人の方が心得可き術語を粗く解釋したから、更に又須要の諸法を書いて此の章を終るとしよう。

含嗽洗口法

含嗽洗口法——咽頭や口中に病氣のある場合に外用水劑を含嗽する所の方法である。それには其の水劑を口内に含み、頭を後方に傾け、口を開いて舌及び頬を彼此に動かせば可いのだ。含嗽に用ふる藥液は大抵左の如し。

▲過滿俺酸加里 一・五 水 一〇〇・〇 (口内惡)

▲鹽酸加里 二・〇—三・〇 水 一〇〇・〇 (瘡口)

▲炭酸加里 一・〇 水 一〇〇・〇 (咽頭に稠い痰ある者)

▲重碳酸曹達 二・〇 水 一〇〇・〇 (口内を清潔にする目的等)

▲硼酸 三・〇 水 一〇〇・〇 (口内寄生物ある者)

▲撒里矢爾酸 二・〇 水 一〇〇・〇 (口内防腐の目的等)

發泡膏貼用法

發泡膏貼用法——發泡膏を貼るには決して手掌より大きいのを用ひてはならぬ、餘り大きいのを貼ると腎臓炎を發する恐れがある。兎に角之を貼るには絆創膏の周圍一指横徑を残したる其の中に中指を以て發泡膏を展し附け、之を其の目的の場所に貼り其の上より繃帯をしておくこと六時間乃至十二時間も経つてから注意して發泡膏を除き其の下に生ぜらる水疱を剪刀を以て切り開き徐々に乾かし遣つて皮の創には亞鉛華を撒布し、更に綿を當て、繃帯しておけば次第に痂皮が出来て治るものである。

沃度丁幾等を塗布する法

沃度丁幾等を塗布する——素人の方が最も多く塗布せらる、藥は沃度丁幾である。されば此の塗布法を一寸述べておかう。さて沃度丁幾を塗布すれば誰も知る如く皮膚には褐色斑を生ずるものであるが、これには綿を以て被ひ繃帯しておくが宜い。而して此の塗

布は二日乃至三日目位に一度が適當である。然るに毎日幾度でも塗つてると皮膚糜爛し甚しきは腫れることがある、又小兒の如き嫩弱なる皮膚には純粹の物で無く、即ち沃度丁幾、没食子丁幾の等分液を塗る方が宜い。斯く注意しても尙皮膚に糜爛を來すやうなことがあつたら亞鉛華を撒布するか、或は亞鉛華軟膏を貼つておけば大抵治るものである。次に古魯胃謨も靴擦・凍瘡其の他色々の症に素人療治として用ひらる、やうなれば之に就いても其の注意を述べておかねばならぬ。抑々古魯胃謨はトロ／＼の液であるが空氣に逢へば忽ち乾いて硬い膜を生ずるために小さな創を被うておくには甚だ都合の宜いものである。されど手指や足指の如き細い部分の周圍を悉く塗つてはならぬ、何となれば硬い膜の爲に其の部分の壞疽ることがあるからである、又古魯胃謨は發火し易いものであるから、該品を容れたる瓶は必ず密に栓をしておかねばならぬ。又これに用ひた刷毛の硬くなつたのはエーテルに浸して軟かにしたる後用ふるが宜い。

水蛭貼用法

水蛭貼用法 病氣治療の目的に供へる所の蛭は健全であつて之を手掌に載せて握れば縮つて球の様になるもので無くてはならぬ。然るに弱くて漸く命を繋いでる目的は血を吸ふ量が少くて十分なる目的を達することが出來ぬ乃で之を貼ける方法は麻布の一片を以

て蛭を固く持ち、其の尖つた口の方を其の貼けようと思ふ部分へ接けるのである。さりながら斯の如くに一疋宛貼けるのでは數多の蛭を要する場合には多くの時間を費して甚だ手数である。故に斯る場合には小さな硝子壺に幾つもの蛭を入れ、其の口を目的の部分の上に暫時接けておくと即て悉く吸ひつくものである。又、少し厚い紙に入れ蛭の口を出す丈の孔を穿けて其の部を目的の所へ接けるも可い。次に大靜淺く走つてる部や動脈の動いてる場所は蛭に吸はしめてはならぬ。又發炎部へ直接に貼けると非常に出血することがあるから可成は其の近傍に貼けた方が宜い。次に頭部の病に貼けるには額部が適當だし骨盤内諸器の疾病は會陰部を選ばねばならぬ。鼻の上とか額とかの如き場所は可成避けるやうにしたい、何となれば其の吸痕が當分の中は残つて、大に容貌を悪くするからである。蛭を貼ける數は強壯多血な人で十疋乃至十五疋、虛弱貧血の人は四疋乃至七疋位が可い。吸ひ終つた後は海綿を以て數分間壓迫しておけば止血するものだが、若しそれでも出血の止まぬ時は過格魯兒化鐵液を二三滴點らせば止むものである。右の外色々の藥物取扱方も尙數多あれど、専門家の外は左程まで穿鑿せらる、必要はありますまいと信ず、然ればこれにて一先結末を告げておきませう。

▲臭剝 一・五—二・〇 白糖 適宜

右臨臥頓服(不眠症淫情)

スルフオナル

〔スルフオナル〕 Sulfonal 之は劇藥となつてゐる碎け易い白色の結晶で、水には

溶解難く又酒精・エーテルにも殆ど溶解せぬ。效能は千八百八十六年にボーマン氏が之を發見し、カスト氏が最良なる催眠藥なることを主張して以來今日に至るまで益々賞用せらるゝ所の藥品である。一・〇乃至三・〇を與ふれば何と無く倦み疲れたやうな感覺を起し、四時間乃至八時間は引續いて睡眠するを得、それで醒めてから不愉快なる症狀を留めぬけれども久しく之を連服すると消化不良を發し、時としては皮膚に發疹を伴ふことがある。極めて大量五・〇以上を頓服すれば言語に障礙を來し、歩行蹣跚となり、揚句に癡醉の儘永眠することさへあるさうだ。之が劇藥の劇藥たる所以である。效能を改めて言へば神經刺戟に原因する不眠・熱性病者の夜間不穩・肺病者の不眠・盜汗・精神病者の不穩不眠に對して良效を奏することは臭剝の遠く及ばぬ所である。其代り癲癇には逆も臭剝に及ぶ可くも無いのみならず臭剝の如く連服する譯には行かぬ。

〔用量〕 一回〇・五、一日二・〇、乃至三・〇、盜汗には一回〇・三乃至〇・五を用ふ。極量

は一回二・〇、一日四・〇、である。予の不眠患者に對する川ひ方は、最初には一回〇・五を與へ次には他の癡醉劑に代へ、三日目には〇・六を服ましむるといふやうに交互轉々して中毒の恐れを防ぎ又習慣せぬやうにしてゐる。

クロラルヒドラル
日本藥局方
には抱水ク
なつてゐる

〔クロラルヒドラル〕 Chloral-hydra 之れも亦劇藥である、無色の結晶形で、之を服めば其の味苦きのみならず腐蝕するかの如き感を發す濃厚溶液は實に腐蝕する故に必ず多量の水を以て稀釋し、ゴム漿單舎或は橙皮舎利別の如きを混ぜて服まねばならぬ。普通量を用ふれば四五分時長くも三十分間後には自然に近き睡眠即ち睡くて堪らぬやうになつて二時間乃至六時間は熟眠するを得大量を與ふれば睡眠は深くなり知覺は減じ筋肉痲痺に陥る等がある、極めて大量五・〇以上を與ふれば昏睡に陥り甚しきは呼吸及び心臟痲痺して黃泉の客となることがある恐ろしいものだ。

〔効能〕 は腦の興奮より來る不眠症興奮性の精神病・強直症・喘息などに良效を奏す。予嘗て三十歳位なる一患者の強直症即ち身體の諸筋強直り、四肢は伸縮自由ならず脈は次第に細くなり、呼吸は將に絶えなんとし其の親は涙ながらに遺言が出来ぬかと尋ねてゐる所へ馳せ至り、直ちに本藥を與へたるに間も無くスヤ／＼と眠りに就き約五時間程更に覺醒

せぬより家族は此の儘永眠するので無いかと氣遣つてゐたが即て起き直り常の如くに談笑したるには實に本藥の良效あるを感じしたのである。又胃潰瘍にも必ず用ふべきものと信ず。胃潰瘍には早朝空腹時又は食前毎に人工加爾兒斯泉鹽を與へ、毎夕抱水格魯刺兒を頓服することを約二週間程も續ければ頗る良效のあるものだと言ふ諸家は皆言つてゐる。

〔用量〕 一回〇・五乃至二・〇となつてゐるが實際には二・〇を用ふることは殆ど無い何となれば中毒を起すことがあるからである。極量は一回二・〇、一日六・〇である。處方を左に、

▲抱水格魯刺兒 〇・七 臭剝 一・〇 アラビアゴム漿 三〇・〇 單舎 五・〇

右頓服(催眠)

莫兒比涅

〔莫兒比涅〕 Morphine。音に名高き毒藥である。之を以て古來幾多の人を殺し幾多の人を活したか計られず、白刃を閃かしたる強盜が鏡井先生を劫かしたれば先生一本の匙を手に持つてさア之には敵ふまじと身構したといふお伽話がある實に匙加減は命脈の關する所である。それは儲置き本品は白色の苦味ある結晶物で、水及び酒精には溶解す。之を健全なる皮膚に塗布しても何等の作用を呈せぬが、創面には速かに幾分の疼痛を來し

其の疼痛は亦直ちに消えて了ふ。其の少量を内服しても倦怠の感を起し、續いて鈍頭痛次に睡眠を催す。然るに之を強ひて運動せんか悪心嘔吐を起し、頗る苦悶することがある。併し人に依ては一種快活なる酩酊狀になるもあれど、之は例外の例外である。大量〇・〇六以上なれば昏睡の狀に陥り顔色チアノーゼを呈し、大小便は閉止し、呼吸は困難となり、體温は大いに降り、實に危険の狀態に迫る、けれども死ぬと否とは人に依て大に差がある。予嘗て一婦人が自殺の目的を以て大量〇・二を内服したるを治療したるが、三週間に於て全快し、今に健全で此の世に活動せるものもある。レウイン氏の説に依ればモルヒネの死量は不定にして平均〇・四に非ずんば死ぬを得ずと兎に角之を内服且つ皮下注射すれば汎發作用を呈するものである而して久しく連服すればこれが習慣となり、非常なる大量一・〇―二・〇位を服んでも平氣で居らるゝやうになる。嘗てモルヒネを食が子の玄關に來つて『私は元來役場の書記でありましたが、喘息が持病で、起る度にモルヒネの皮下注射をして貰ひたることが習慣となり、斯の如く慢性中毒に陥り正當なる業に就かんとするも身體倦怠を覺え、到底爲すことが出来ませぬ、それで三度の食事は二度まで廢してもモルヒネが服みたくて堪らず、買ひたくも高價なれば思ふやうに參らず、それゆゑ斯の如くにお醫者様

や藥屋様を御無心申すので御座います、何卒〇・一以上のモルヒネを賜ふか左も無くば五錢の御恵み下されたし云々』と述べて涙潸然たりであつた者を見た。斯の如くモルヒネは習慣して遂に慢性中毒に陥り、名醫の治療を受けざれば仲々容易に治らぬやうになる、實に恐る可きものである。

〔効能〕 は斯る有害なるにも拘らず諸般の病に用ひて卓效を奏す。今之を列記すれば左の如く約十效ある。

- (一) 精神的興奮より來る不眠症及び其の他の不眠に與ふ、併し之は抱水格魯拉兒に及ばず。
- (二) 癡狂的精神病者に鎮靜藥として與ふ、之は場合により抱水格魯拉兒に勝ることがある。
- (三) 種々の疼痛には根治的と姑息的とに論なく鎮痛藥として内服又は皮下注射すれば他藥の無効なる場合にも偉效を呈することもあるは抱水格魯拉兒の及ばぬ所である。(四) 痙攣又は強直に對し、時に有效なることもあれど、多くは抱水格魯拉兒及び其の他の鎮靜藥に及ばず。(五) 心臟障害より來る呼吸困難及び喘息の呼吸困難には良效がある。(六) 咳嗽殊に喀血を兼ねる症には佳良の成績を呈す。(七) 本品を服めば嘔吐を催すにも拘らず胃瘡・胃潰瘍其の他の原因より來る嘔吐を鎮靜する效がある。(八) 種々の下痢症にも適當すれども

之には阿片を用ふる方が宜い。(九) コレラ・赤痢には裏急後重及び疼痛などの困苦を防ぐと同時に下痢を留め、其の経過を縮むるの效がある。(十) 腸出血・腸穿孔・糖尿病などに用ひて有效なりとは疑はしきのみならず、之に勝る良藥は他に幾つもある。要するに本藥は痙攣鎮痛藥で、其の匙加減に依ては種々の疾病に用ひて困苦を救ふものである。去りながら其の匙加減は餘程老練の域に進まずんば悟ることが出來ぬ。某博士曰くモルヒネと重曹とを巧みに使ふやうになれば一人前の醫士であると。

〔用量〕 は一回〇・〇〇五乃至〇・〇三を散劑・丸劑・水劑又は皮下注射す。極量は一回〇・〇三、一日〇・一と規定してある。予の用量は他醫と異り、大抵の場合には一回〇・〇〇三の少量を用ふるを常とし、若し〇・〇一以上を用ふるときは、患者をして極めて安靜に臥さしめ、十二時間内は便器を以て大小便を取り、室内運動をも許さぬことにしてゐる。尙これに就いて議論があるけれど餘り専門的に互るから之を略す。

〔オピウム〕 Opium——これも劇藥である我國・支那・東印度・小亞細亞・ベルシヤ等に産する罌粟の殼に在る乳液を乾かしたるもので褐色の粉末をなし、一種の臭氣と辛い味を有つてゐる。其の生理的作用は殆どモルヒネと同じく效能も亦似て居れども、其の力はモ

オピウム
日本藥局方
には阿片と
なつてゐる

纈草根

ルヒネに遠く及ばず唯其の特長とす可きは下痢及び内臓出血を止むることである。
〔用量〕 一回〇・〇〇五乃至〇・一を散劑丸劑として與ふ。極量は一回〇・一五、一日〇・五となつてゐる。

〔纈草根〕 Radix Valerianae 歐洲に産するヅハレリアナと名づくる草の根であつて我が國の纈草に相當する所より日本藥局方では、これを以て代用してある。

其の大量を服すれば頭痛・眩暈・耳鳴等の諸症を發し、揚句に睡眠を食ふなどの作用を來す。

〔効能〕 は歇私的里病に對して屢々良效を呈す、その他癲癇・舞踏病等の神經諸症に應用し頗る效を奏す。

〔用量〕 一日數回、一回一・〇乃至二・〇を浸劑として用ふ。又〇・五乃至三・〇を散劑丸劑として與ふこともある。處方を左に

▲纈草根浸 (一〇・〇) 二〇〇・〇 臭剝 六・〇 單舍 一〇〇・〇

右一日六回、二日分服(神經諸病に用ふ)

▲纈草根浸 (一〇・〇) 二〇〇・〇 林檎鐵丁幾 六・〇 單舍 八・〇

右一日六回、二日分服(貧血を兼ねたるヒステリーに用ふ)

印度大麻草

〔印度大麻草〕 Herba Cannabis indicae 各地方に植る所の一年草で其の枝尖を果實が漸く熟らうとする初期に當つて取り集めたものである。

之を用ふる習慣の如何に依て大に差違はあるけれど兎に角之を内服すれば阿片の如く腦に作用するは確實である。而して其の阿片に異なる點は興奮症狀を來すこと著しく、即ち神識を失は無いで、酩酊の状態になり、初め耳鳴・眩暈を起し、續いて笑つたり噪いだりし甚しきは狂者の如くに噪ぎ立ち、或は非常に沈鬱し、同時に意識を失ひ、遂に睡眠に陥るものである。

〔効能〕 は癡癲質斯・神經痛・ストリキニネー中毒・恐水病・喘息・強直症・酒客譫妄症などに催眠及び鎮痙藥として與ふるけれど、格魯拉兒劑や阿片劑の如くに確實の效あるものは無い。予の經驗に依れば喘息者は其の少量を持藥的に用ひて奏效を見るけれども其の他には何等の價値あるものとは思はれぬ。

〔用量〕 は其の越幾斯を一回〇・〇三乃至〇・一を丸劑又は散劑として用ふ。極量は一回、〇・一、一日〇・四である。斯の如く越幾斯は内用に供ふるけれど草其の儘は卷煙草に混じて外用するのみである。

▲印度大麻越幾斯 〇・一 菲沃斯越幾斯 〇・五 甘草末 一・〇 白糖適宜
右分三包 一日三回一包宛(喘息等に)

チレオイド

〔チレオイド〕 Thyroid. 甲状腺分泌液の主要成分を含めて製したるものである。抑々甲状腺分泌液は身體の組織上に於て必要缺く可からざるものなることは一般醫士の認めたる所だ。乃で此の甲状腺が缺乏するか若くは其の分泌が不充分であると必ず精神的又は肉體上の疾病を來し特に榮養作用に妨害を生ずるものなることは争はれぬ事實である。然るに一朝之が缺乏又は不十分を來したる場合には固より其の治療を施さねばならぬ。本薬は斯る場合に用ひん爲の目的である。

〔効能〕 は精神病療法の偉効薬で、其の他肥満症・子宮纖維腫瘍・月經變調・婦人科産科の諸症・リウマチス・鬱憂症・癩癧などに用ふ。又特に若年の變調期に於る精神不安を治し小兒の發育不全・打骨・結核症などに多少の效果は必ず有る。けれども某醫が、之を内服して居れば年老いても皺がよらず白髪も生えぬ、換言すれば不老不死の靈藥だなど、吹き立てる程の效果があるものではない。

〔用量〕 は一回〇・三を適當とす。序に言つておくが本薬の粉末〇・〇七は新鮮なる羊の

ドルミオール

甲状腺〇・三に適應するとのことだ。

〔ドルミオール〕 Dormiool 本薬は無色透明の油状をなし樟腦の様な香氣と涼しく、灼くが如き味を有つてゐる。

其の睡眠作用は徐々に起り、心臓及び呼吸器の機能を害する如き中毒は無く約三・〇を服めば五時間乃至七時間も熟眠することが出来る。斯くて目が醒めても爽快で而も其の活動力に何等の異變は無い。

〔効能〕 は一般の不眠症及び精神病者に與ふれば、抱水クロラルよりも副作用が無くてもも良效がある。

〔用量〕 は一回、一・五乃至三・〇を用ふるが、精神病者に對しては四・〇乃至六・〇を與ふる方が宜い。販賣品としては〇・五をカプセル入としてある。

健胃劑

健胃劑

含糖百弗聖

〔含糖百弗聖〕

Pepsinum saccharatum 此は豚或は牛の胃粘膜から百弗聖を取り、之に乳糖を和せて製したものである。抑々百弗聖とは我等人間の胃液腺からも分泌する胃液素で肉類の主成分たる蛋白質を消化せしむるために天が與ふる自然の藥、然るに何か

の不養生で胃病となり、此の胃液素即ち百弗聖が缺乏すると肉食は言ふに及ばず植物性食物中にも含んでる蛋白質をも消化せしむることが出来ぬ、消化せねば従つて食欲も非常に進まぬやうになる、食欲進まねば身體も次第に衰弱するは理の當然。そこで醫者は此の牛豚の百弗聖を以て之を補ひ、消化を促すやうにするのである。なんと重寶な薬ではありませぬか。それゆゑ如何なる醫士も、これを健胃劑として用ひぬといふことは無い。而して小兒や青年乃至老人誰が服んでも效があるのみならず他病を胃病と誤診して用ひた所で何等の中毒をも及ぼさぬ。

〔用量〕 は一回に一・〇で一日に三回食後々々に其の儘散劑として服むか或は水に溶かして用ふるも可い。さすれば常に健胃劑となるのみならず、間接には肺癆及び貧血の諸病にも效がある。

〔パンクレアチン〕 Pancreatin——これも我等人體の膵臓から分泌する膵液の缺乏せる時、これを補はんが爲に矢張牛や豚の如き哺乳動物の膵臓から製したる薬である。これに固形と流動との二種あつて固形は哺乳動物の膵に水を加へて浸出したる後乾燥せしめたるもの。流動は腓にエーテル又は屈里設林を加へて製したる液體である。何れも脂肪を變

パンクレアチン

化する力あるのみならず蛋白質澱粉の二質をも消化する效能のあるもので畢竟腸の消化薬である。

重碳酸曹達

〔用量〕 は〇・一乃至〇・五を百弗聖と混合して用ひたり、或は牛乳又はソツプに混ぜて服むも宜い。

〔重碳酸曹達〕 Natrium bicarbonicum——重碳酸那篤留漢又單に重曹とも名づく。之は白色の粉末でこれが效能を擧ぐれば(一)慢性胃加答兒に用ひて大效を奏することがある。(二)飲食の誤用より發したる胃の汚物症に用ひて一方ならぬ良い成績を呈することもある。(三)制酸劑として醗酸過多の消化不良には此の薬の右に出づる物は恐らく無い、醗酸過多症は口中に酸味を覺え酸い嘔吐を發するものである。(四)強い嘔吐を鎮める爲に服しめて大に其の目的を達したることは屢々予の經驗したる所である。(五)咽頭加答兒・氣管支加答兒などの粘膜炎加答兒に蒸氣吸入として用ふれば多少の效力あるけれど、内服しても宜いとの説は予の經驗上疑ふ所である。(六)尿石として膀胱中に結石の出来る病に與へて良效あることもある。(七)糠枇疹として皮膚がザラ／＼になつて白い糠の様な小さな屑の剝がる、皮膚病に外用して思の外治ることもある。右の外痛風を治し利尿の效あるなど、泰西の醫學者中に論じて

るものがあるけれど、これこそ陳腐に屬せる説と予は信ず。

〔用量〕 一回〇・五—一・五を一日數回散劑の儘又は水劑として用ふ。吸入及び塗布劑としては一%乃至三%溶液である。

世人は重炭酸曹達即ち重曹が非常に廉價なる所より效力も亦これに従ふもの、如く誤解してゐるけれど、老練なる醫士が用ふれば危き一命をも助けたる例さへある。嘗て某金満家の老主人五十五歳が常に軽い慢性胃加答兒になつてゐるに搗て、加へて或日誤つて腐敗せる魚類を食したれば間も無く嘔吐瀉の如くに催し數多の醫士を招いて治療を乞へども、益々困苦衰弱し、今一兩日は保つまいなど、いふ衰れな診察、然るに最後に來りしベルツ博士は唯、單に重曹水を適宜に服ましむればそれで可いと、の簡單なる診療、名にし負ふ國手のことなれば患者を始め皆々それに従ひたるに時を經、日を追うて恢復し、今は既に六十餘歳であるけれど實に健康なるものである。此の重曹一日分を買へば僅に一厘か二厘の價、而して十年以上の壽命を延すとは實に醫士は藥を賣るものに非ずして伎倆を賣るものなることを世人知るや知らずや。
斯の如く輕症に對して一寸試みるは宜しいが餘りに其の效能を信じ過ぎて秤りもせず、

苦味丁幾

今日も明日もと分量に用ふれば却つて醜酸を増し、更に消化不良を起すものである。

〔苦味丁幾〕 Tinctura amara 之は細かに截り碎いて橙皮及び龍膽を各々五、小豆莢の粗末二、酒精百といふ割合で、五日間浸し之を壓搾し濾して製するものである。

〔効能〕 は消化器を刺戟し間接に食物の防腐をなし、消化吸収を促す所の苦味健胃劑である。されば醫士は唯單に之を用ふることは少いが、大抵の藥に伍用し彼是相待つて效を奏する材料に供するものである。

〔用量〕 は一日分として二・〇を用ふるは通例である。此の藥も重曹と同じく甚だ廉價で而も左程の中毒は無い所から、如何なる素人でも此の藥名を知つてゐて無暗矢鱈に服んでゐる人がある。されど自然の攝生を加へずして唯徒らに藥物にのみ頼らうといふことは却つて身體を柔弱にするところの基となるのである。

稀鹽酸

〔稀鹽酸〕 Acidum hydrochloricum dilutum 此は鹽酸一蒸餾水二といふ割合を

以て相混和し製したるものである。抑、鹽酸は胃液の肝要なる成分で百弗聖と力を合せて蛋白質・軟骨・膠樣質を消化するものである。然るに胃中にこれの缺乏するは言ふまでも無く胃病であつて、食欲衰へ、身體従つて羸瘦するは理の當然なれば、斯る時に之を用ひて

消化を補ふのである。又清涼劑・止渴劑として諸般の熱性を用ひ良效を奏す。

〔用量〕 一回五六滴を三〇・〇の水或は二〇・〇を二〇〇・〇の水に注ぎこれに白糖なり或は單舍利別を加へ所謂鹽酸リモナーデとなして適宜に用ふれば能く渴きを去り、爽快の感
を起すものである。然れども久時連服したり、或は過量に服むときは却つて消化力を減じ、甚しきは胃の組織を傷め虚脱に陥ることもあるものなれば大に注意すべきことである。某
醫院の藥局生は蒸餾水と間違へて患者に與へたるため、患者は非常に胃を害し、殆ど一年
の月日を費して生命を取り返したことがある。元來醫士は書生に、藥屋は小僧に藥の調合
を任せるといふは實に危險千萬なることである。さりとして藥劑師の少き我國に於ては醫士
一人で診察も調合も兼ねばならぬ、されど斯ることは到底行はれぬ始末、當路の人が何か
之が救濟法を講ぜられたいものである。

龍膽

〔龍膽〕 Radix gentianae scabrae 一名健質亞那根と言ふ、本邦では昔より漢藥として其の效能を多大に言ひ來つたもので、龍膽と名づくる草の根である。歐洲ではゲンチアンと稱する草の乾燥根で、其の成分は東西殆ど同一の物である。諸、之が醫療的效用を述ぶるに當り、一般の苦味劑に就いて概論し、然る後これに及ぶが順序である。それ苦味

藥を口の中に入れば其の刺激の爲反射的に唾液の分泌を増すと雖も、胃中に入れば却つて胃液の分泌を減少し、胃中より苦味藥を去るに従ひ、漸次に又胃液の増すものである。故に之を與ふるには食前少くも三十分時間乃至一時間を隔てねばならぬ。又其の大量を服する時は大に食欲を減じ、消化を妨ぐるのみならず、惡心嘔吐或は下痢を起すものである。されば之を適當に用ふれば消化機の衰弱せる者屢々回復せられ胃中の異常的酸酵を制限し、間接に食欲を促すは争ふ可からざる事實である。兎に角苦味劑は健胃藥として用ひられ精神過勞或は酒色過度などから來る衰弱に伴ふ所の消化不良等には頗る效を呈はすものである。然るに素人の方は往々苦味丁幾を無暗に顔を燈めながら毎日々々服んでる人がある。斯の如きは寧ろ有害と謂はねばならぬ。されば何人も唯、單に健胃劑といふ名に迷うてはならぬ。以上論じた通りであるから、

〔用量〕 は苦味藥たる龍膽即ち健質亞那根も同じく衰弱的消化不良に、一日數回一回〇・三乃至は一〇の割合を以て浸劑又は散劑として賞用せらる。
龍膽三・〇を溫湯一〇〇・〇にて五分時間煎じ、之に橙皮舍利別一〇・〇を加へ、一日三回に分服す可し。

オレキシシ

右一日數回毛筆を以て塗布(實布の利亞)

色を帯びて針狀の結晶で十三乃至十五分の水に溶解し、酒精には容易に溶解す。其の味は少く苦く、舌にヒリ、と灼けるが如き感を覺え、微かに香氣を放つ。

本品を健康者に〇・二乃至〇・五を與ふれば胃の消化を増し、胃液の分泌を促すけれど大量即ち〇・六乃至一〇も服すると食道に灼けるが如き感を起し即て胃痛を起したり、或は悪心・嘔吐を來し甚しきは身體に振盪を生じ或は癲癇症を伴ふこともある。

〔効能〕 は前記の如く消化を促す所から消化不良症・肺癆・貧血種々の衰弱狀態慢性病の快復期・手術後の食欲缺乏に用ひて良效がある。而して之を用ふるには大量なる液體例へばスープ或は味噌汁の中に入れて服むが宜いのである。

〔用量〕 は一回〇・一乃至〇・五を一日二回位、丸劑或はオブラートに包んで用ふるを適當とす。

▲鹽酸オレキシシ 〇・五 龍膽越幾斯 適宜

右爲三十九日二回、午前十時頃と午後四時頃とに五丸宛大量のスープに浮べて

クロールシアセチール

服用。

〔クロールシアセチール〕 Acetylum chloratum. 無色の液で劇しい臭氣がある。水に逢へば分解して醋酸及び鹽酸となる。

〔効能〕 は前記の如く鹽酸を分離するの性があるから消化催進藥として鹽酸の代りに賞用す。

〔用量〕 は一回二三滴乃至〇・五位を稀釋して與ふ。

硫酸ベルベリン

〔硫酸ベルベリン〕 Berberina sulfuricum. 水及び酒精には困難に溶解す。黄色の粉末をなしてゐる。

〔効能〕 は健胃藥として慢性胃加答兒・消化不良等に用ふ。

〔用量〕 は一日三回、一回〇・〇三乃至〇・五を與ふ。

強壯劑 還元鐵

強壯劑

〔還元鐵〕 Ferrum reductum 一名水素還元鐵ともいふ。今之を説く前に當りの鐵劑に就いて概論し、然る後之に及ぶが便利であらう。抑々鐵は人間の身體に於ては無くしてならぬ所の大切な成分であつて、常に血液中の(赤色素)と結合して存するものであ

る。ゴルプ、ベサネツといふ人が色々研究したる末「中等の體重ある男子は身體中に三瓦餘即ち八分二厘位の鐵を有つてゐるのである、然るに或る病氣の爲に赤色素の減少する時は鐵も亦大に減り、一瓦半以下にも及ぶことがある。然るときは顔色蒼白くなつて見るも哀れな姿になる」と。斯う申せば讀者或ひは言はれん、「斯くも身體中に無くてならぬ大切な鐵なるに我等は何時も鐵を食したることは無い、豈夫に西洋人とて鐵を副食物にも爲まいが」と。成程御尤なる質問の様だが其處は天の配劑宜しきを得てゐるもので我等が平生用ふる所の飲料水や豆類・菜類殊に茶・ビール・コーヒなどに依て斷えず供給せらるゝものなれば、色々食物を取つてさへをれば毎日六センチ瓦以上の鐵を食するものである。此の鐵の効用は血液に混つて肺臟中を流るゝ間に酸素を吸収し之を身體中の諸組織に運び其の酸化作用を媒介するものなるが何處より其の鐵を吸収するかといふに、其の一分は胃腸より血液に入り込み、其の一分は大便秘と共に出される、故に鐵劑を多量に服するか、或は多量ならざるも毎日連服すれば大便を黒色に變ずるものである。若し鐵を貧血の人例へば萎黃病者などに適度の量を毎日續けて與ふれば唇・頬・齒齦などは赤みを帯び甚だ鮮かになり、同時に食欲も進み、消化力も強くなり筋肉・心臓作用悉く活潑となり精神も亦爽快に赴

く等の大效力あれども健康者が之を用ふれば血液中に入り込まざるのみならず消化作用を妨げ食欲次第に減じ頭痛・鬱憂等の病的状態に陥るものである。然るに近頃聞く所に依れば男女學生が病氣でも無いのに否多少の病氣があるにしても其の病の何たるを窮めず、藥の何たるを解せず、唯鐵は強壯藥であるとの單純なる名に迷ひ大道に賣つてゐる所の鐵鑛泉を買求め、毎日服んでゐる者がある、笑ふ可きの至りと謂はねばならぬ。成程鐵鑛泉其物は之を沸して入浴すれば婦人生殖器の病に幾分の效力あるし、之を適度に内服すれば前述の如く貧血諸病に或は宜しからんも、彼の大道に賣る物は數日數月瓶中に貯へあることなれば、其の水の腐敗して如何なるバクテリアの生じてるかも計られず、況んや何くの水を汲んで來たものやらと疑ふに至つては實に恐る可きの至りである。故に今改めて鐵劑の効用を列記すれば(一)萎黃病(二)貧血諸症(三)急性病後の衰弱(四)大出血後の衰弱(五)過淫(六)慢性下痢後の衰弱(七)間歇熱に規尼涅と伍用して效あり、(八)腺病等である。次に禁ず可きは肺病・心臓病・胃病などである。内服の用法は少量を與ふるが最も良い、例ひ大量を用ひても徒らに消化を害するのみで、其の血中に吸収せらるゝ量は至つて少く、乃ち少量を用ふると何の差も無いものである。又其の之を服する時間は胃液分泌の最も盛んなる

時即ち食時中或は食後直ちに用ふるが宜い、何となれば胃液多ければ鐵の溶解し吸收易いからである。次に鐵泉に浴して多大の效あるかの如く賞嘆するものもあるが、鐵は皮膚より吸收するもので無いから其の效ある如くに見ゆるは浴湯其の他の含有物との爲である。右の如く鐵劑一般に就いて論じ、然る後各種の製鐵劑に及ぼさう。還元鐵は灰色の粉末で、胃液に溶解し易い所の最良なる鐵劑である。瓶中に入れ密栓して貯はぬと空氣中の酸素と化合し漸次に其の效力を失ふ。其の效能は前述の鐵劑一般と同じ。

〔用量〕 一日數回〇・〇五より〇・二位までの間である。

▲還元鐵 〇・二 規那皮末 一・五 枸橼油糖 一・〇

右三包に分け一日三回食後一包宛

▲還元鐵 〇・二 規尼涅 〇・一 甘草末 適宜

右六丸と爲し、一日三回食後二丸宛

林檎鐵丁幾

〔林檎鐵丁幾〕 Tinctura Ferri pomata. これは讀んで字の如く林檎と鐵とを以て製したる褐色に黒みを帯びたる液體で、其の效能は矢張り一般の鐵劑と同じである。

〔用量〕 一日數回大凡一・〇位である。

葡萄酒
日本藥局方
赤葡萄酒
用酒のみを採

〔葡萄酒〕 赤葡萄酒と白葡萄酒との二種あるが、其の效能は大抵同一なりと心得べし。赤酒 Vinimibubrum. 白酒 Vinum album. 此れは葡萄酒の實より製することは誰も能く知つてることである。其のアルコールを含むの多寡は葡萄酒の産地、降雨の多少、日光の強弱によつて甚だ不同あり、其の少きは三%を含む其の多きものは二十%を含む。兎に角酒料中の最良なるもので、滋養と藥用とを兼ねてゐる。されど其の價高きを以て偽造物甚だ多く、之を飲めば消化を害し、下痢を發し易く、或は反對に便秘を來すものもある。外國では其の偽造が如何にも巧妙で分析術も之を見分ることの出來ぬのがあつて、爲に老練なる検査官の舌を藉つて漸く判断するさへある。我國の葡萄酒は斯る巧妙には勿論出來ぬのに其の偽物の多いことは實に驚く可きものだ。博覽會に出品するのは純葡萄酒で、而もが安く之に加に運動が巧妙と來てるから、一等賞とか二等賞とかを得る、乃で彼等は得たり賢しと偽物を造つて之に何々賞のペーパを貼り神々しくも滋養藥用などの文字を濫用するのだ、實に可哀さうなは之を知らぬ人民である。故に素人は無暗に葡萄酒を飲んでならぬ。併し今純葡萄酒の效能を列記すれば、

- 一、過多の出血・貧血・重病快復期・萎黃病等に用ふ。

二、興奮劑としてコレラ失氣・大出血・小兒の吐瀉等に心力を奮起せしめんために與へて大效を奏することがある。

三、慢性熱性病・肺結核などに榮養を進めるの目的を以て之を用ふることもある。

四、別に疾病が無くとも薄弱なるものは食後々々に少量を用ひて滋養の效ありと叫ぶ醫士もある。

〔用量〕 用量は人に従ひ、又葡萄酒の種類にも依るけれど、下戸などは一回四瓦乃至十五瓦。上戸ならば三十瓦乃至五十瓦。故に普通には約二十五瓦を用ひ、何れも一日三四回服んで可い。

亞砒酸

〔亞砒酸〕 Acidum arsenicosum 著名の毒物で、化學上で言へば、三酸化砒素或は無水亞砒酸で、白色の粉末をなし、十五分の沸湯に溶解すれども、多くは丸劑として用ふ。本品を粉末の儘健全なる皮膚に撒布すれば、其の作用甚だ緩慢なれども後には炎症を呈し久しく持續すれば潰瘍を作るに至る。病的の皮膚に塗ければ其の部分は速かに破壊す。又健全なる粘膜上に撒布すれば強い作用は無れど、病的の粘膜なるときは高度の炎症を來すものである。亞砒酸の少量を服すれば始め食道及び胃に於て溫感を生じ、饑餓及び渴意を

起し、心臟作用は増し、且つ強くなる等の良果を見るべしと雖も、久しく持長するか、或は増加すれば諸般の器官に障害の兆を呈し、食欲は減り渴意は増し胃部は重苦しく且つ痛みを覺え、揚句に悪心・嘔吐を催し其の上下痢し、舌及び咽は乾燥し、皮膚には發疹し、頭痛はする四肢は痛む、夜は眠られず、心臟の動悸は高ぶり、繼いで榮養不良となり、容貌は衰へ筋力大いに弱る。尙進んで用ふればコレラ様の發作を來し、非常なる困苦に陥る、それでも亞砒酸の服用を止めれば此の諸症漸次に消えて舊態に回復すれど、止めざるか或は始より大量を用ふれば前記の諸症劇烈に來り、間も無く此世を去るのである、實に恐ろしい藥だ。

〔効能〕 は醫士社會に於て二説ある。甲は『確然たる良效あるものでないから斯る毒藥を用ふるに及ばず』と乙は『偉效あるもので變質劑の親玉であるのみならず、諸藥中にも嶄然頭角を表はせる有効なる藥だ』といふのである。予は爾來幾多の人に用ひたか計られねど同病同年齡同質の者でも非常に効力ある人もあるし、又効力無きのみならず亞砒酸の中毒を呈し已むを得ず服用を止むるに至るものもある。兎に角變質劑中では著明なものであるから其の効力を約七ヶ條に分けて左に列記しよう。

- (一) 神經的の病——神經痛・經久性の舞蹈病・喘息・神經病の爲に榮養不良・貧血に陥れる者
女子生殖器の疾病に伴ふ神經病男子女子の腦神經衰弱及び生殖器神經衰弱等。
- (二) 麻拉利亞性間歇熱——同じく麻拉利亞性間歇熱でも其の初期には効無れど規尼涅を用ひても斷然退却せぬ經久的の本病或は屢々再發する人々には實に有力で、之を適當に連服すれば爾來の體質を一變せる如くに全治し、再び起らぬ様になる。但し中にはさう旨く利かぬものもある。
- (三) 持病的——從來色々治療したれども治らぬ病例へば惡性貧血・腺病・消化器衰弱・胃痛・慢性の嘔吐・梅毒殊に水銀沃度の奏効せぬものに屢々偉效を奏することがある。
- (四) 呼吸器病——慢性の肺結核・喉頭結核・慢性氣管支加答兒・聲音嘶啞などに多少の效果を呈する様である。
- (五) 腫瘍性の病——癌性の新生物・惡性淋巴腺腫などに與つて力あるやうだ。
- (六) 慢性皮膚病——癩病・濕疹・痒疹其の他數年手を盡したけれども何の効無き皮膚病には必ず之を内服する必要がある。
- (七) 色を白くする——色の黒き人が之を持長して服むと色が白くなつて、以前の醜人が美

人とまでは變らねども所謂「色の白いは七難隠す」とやらで多少外貌を改めると佛國の婦人中では往々之を應用し、化粧に浮身を窺すものもあるさうだ、乃で或る醫士は之に效果有りと叫び、或る醫士は効無きのみならず身體を衰弱せしむる種になると言つてゐる。右の外萎黃病・糖尿病などにも用ふるが最も效力を呈するは頑固なる麻拉利亞病で其の次は皮膚病次は神經性の病氣其の亦次は惡性の淋巴腺腫といふ順序である。

〔用量〕 は大いに注意すべきもので偉效を奏すると惡結果を來すとは唯其の用量如何に在りといつても差支は無からう。換言すれば此の匙加減が名醫と藪醫との分る、所である乃ち日本藥局方の極量は一回〇・〇〇五で一日〇・〇二と規定してある。されど、普通には一回〇・〇〇一乃至〇・〇〇〇五より始め、次第に増量することになつてゐる。増量しても一日分〇・〇二を越えてはならぬ而して之を服むには食後直ちに用ふるが肝要である。或人は始めは大量を用ひ漸次減量するが可いと主張するが之は實に危險である。予の用法用量は最初極めて少量即ち〇・〇〇〇五を一日三回食後に與へ、一週間經つと〇・〇〇一に増し三週間目になれば〇・〇〇一五といふ割合である。斯の如く少量より始めて次第に増量するのである、けれども、それでも途中で消化障害又

は心臓の鼓動が高まるやうなことがあつたら、一時その服用を中止し、治つてから再び始めるが宜い。又其れ等の中毒症状が更に無くとも十週間に達したら約十日間休んで五週間目位の分量より再び繰り返すといふ順序にしてゐる。予は斯ういふ風にして神経衰弱者を治した例は幾人もある。尙處方を左に述べておかう。

▲亞砒酸 〇・〇〇一五 還元鐵 〇・一五 甘草羔 亞拉比亞護謨漿 各適宜

右三丸と爲し食後一丸宛

キナ酒

〔キナ酒〕 Vinum Chinese——セリ酒と白阿膠と蒸餾水とキナ皮とを製方し、之に白糖と橙皮丁幾を加へた品である。其の色は褐色であつて、其の味は苦いけれども頗る佳快なるものである。

レチチン

〔効能用量〕 は興奮強壯劑として一回一五・〇程を用ふ。

〔レチチン〕 Lecithin——神経組織殊に腦質中に存する含磷性の化合物で、卵黄よりも亦之を製することが出来る。白色で濕氣を引き易い性があり、酒精・クロロフォルムには溶解するけれども、水中及び鹽液中には唯膨起するのみである。

〔効能用量〕 は一般の強壯藥として一回〇・一乃至〇・五を丸劑として内用し、又其の〇・

ヘモグロビン錠

〇五乃至〇・一五を油液狀として皮下に注射す。腦力を過度に費す人は時々服用すべき藥品である。

〔ヘモグロビン錠〕 Haemoglobin——本藥は赤血球を増加し、缺損せる組織を作る作用ある所のヘモグロビンを錠劑となしたるものである。

〔効能〕 は貧血・病後の衰弱・神経衰弱等に用ふ。

〔用量〕 は一回四錠位宛を一日三回乃至四回用ふるが宜い。

解熱劑
撒里失爾酸
曹達

解熱劑

〔撒里失爾酸曹達〕 Natrium salicylicum——之は白色無臭の粉末で其の儘散藥として用ひらるゝが、多くは溶して水劑となし、味は甘辛いけれども、少し多く服むと、ムカク、悪心を催し、時には吐くこともある。餘り連服するか、或は大量を服むと一方ならぬ衰弱を招くことがある。

〔効能〕 は解熱藥・鎮痛藥として感冒・肋膜炎・神經痛殊に急性のリュウマチスには偉大の效を奏するものである。

〔用量〕 は一回、一・〇乃至一・五。一日量は四・〇乃至八・〇で、薄荷を少し混ぜて服め

ば、ムカ／＼するのを防ぐものである。腦脊髄膜炎・糖尿病に使用する人もあれど、予は之を賞用せぬ。又利尿の效ありと云ふ説もあれど、果して然るや否や疑はし。今一二の處方を記せば、

▲撒曹 一〇〇 白糖 二〇〇 薄荷油 一滴 水 三〇〇〇

右臨臥に頓服

頓服とは一度に用ひて了ふこと、三〇〇〇は大凡小盃に一杯である。之を飲んでから直ちに夜具を重着して寝れば發汗を催し軽い感冒ならば一度で治る。

▲撒曹 四〇〇 薄荷水 一〇〇〇 單舎 八〇〇 水 一〇〇〇〇

右一日三回分服

アスピリン
日本藥局方
にはアセチ
リルサリシ
ール酸とな
つてゐる

撒曹とはサ
リチル酸
曹達の略名
である

〔アスピリン〕 Aspirin 水に溶け難き白色の粉末で、其の効能は殆ど撒曹と同一で諸種の熱性病・肋膜炎及び鎮痛劑に供ふ。而して撒曹の如く悪心を催したり、或は衰弱に陥り難い所から、醫家皆之を賞用してゐる。殊に關節リウマチスには甚だ效を奏するものである。

〔用量〕 は一回〇・七一約三回を與ふ。

安知歌貌林

〔安知歌貌林〕 Antifebrin 此れは劇藥なれども、有名なるのみならず、左程恐る可

き物ならねば茲に掲げておかう。光輝のある無色無臭の粉末で、其の味は微にビリ、として辛い。水に溶解せぬから普通には散劑又は丸劑として用ふ。藥局方改正以來、アセトアニリドといふ名になつた。

〔効能〕 は解熱藥として種々の熱性病即ち感冒・肺炎・チブス・肺結核・急性發疹病などに用ひ、又鎮痛劑としては神經痛脊髄癆の疼痛・偏頭痛・リウマチス等に用ふ。されどリウマチスには撒曹を服む方が宜い。

〔用量〕 は一回〇・三乃至〇・四を一日數回用ふるのであるが、發汗の目的には夜間臨臥に服むを可とす。極量は一回、〇・五、一日一・五である。これ以上に用ふると所謂中毒を起し倦怠の感に續いて頭痛・眩暈・耳鳴・悪心・嘔吐等を催し、重きはチャノーゼを起し、續いて皮膚は甚しく蒼白くなり、粘い汗を流し、惡寒がして齒をガタ／＼振はせ、脈は不正になり、呼吸は困難となり、最も重きは四肢強直り、讒語を言ひなどして人事不省になることがある。斯の如き場合には身體を摩擦し温かな珈琲湯なり或は葡萄酒を飲ましめ、一方急使を醫家へ走らせねばならぬ醫士ならばカンフル又はエーテルの皮下注射をなすであ

らう。又極量を超えざるも連日續けて服めは皮下に一種の疹を發し、ザラ／＼になつて少
し痒みを帯ぶるものである。
序に該藥に於ける予の經驗を述べておかう。予は肺結核者の解熱に對しては最初は必ず之
を〇・三宛朝夕に與へ、それで減退の見込の無き時は〇・四を一日に三回も與へ、縦ひ皮疹が
出ても連服せしむる方針を取る、すると常に解熱の效あるのみならず咳嗽・喀痰大いに止
み、食慾は進み、精神も爽快を覺えて来る。連も他の解熱藥の及ぶ所で無いと思ふ。又胃痛
俗に、にも〇・四を頓服せしめ直ちに日本酒約二十瓦一杯を與ふるを常とす。斯くすれば
モルヒネの皮下注射などよりも副作用の憂無くして穩かなる效を奏するものである。今處
方を示せば、

▲安知歌貌林 〇・二—〇・四 白糖 〇・五

右爲二一包、一日二回乃至三回一包宛

安知必林

【安知必林】 Antipyrin。これも劇藥なれども、歌貌林より尙一層恐るゝに足らぬも
のである。其の味は苦くて服み難いが、水に溶けるから水劑とするの便がある。斯の如く
其の性が穩かで而も水劑とするを得可ければ小兒の解熱藥として大抵之を用ふ。

【効能】 殆ど歌貌林に同じく其の上鎖咳劑として百日咳にも應用すれば一方ならぬ
效がある。

【用量】 は一回〇・五、一日二三回與ふるを常とすれど、極量は一回一・〇、一日三・〇
で、小兒に非ざる限りは予は大抵此の極量を賞用す。若し極量を超えて用ふれば殆ど歌貌
林と同じき中毒を來すものである。

▲安知必林 二・〇 稀鹽酸 一・〇 單舎 八・〇 水 一〇〇・〇
右一日三回分服 (解熱の目的)

▲安知必林 〇・六 荳蔻越幾斯 〇・〇一 單舎 五・〇 稀鹽酸 三滴
水 三〇・〇

右一日三回分服 (四五歳の小兒の
百日咳等に用ふ)

【アンチテルミン】 Antithermin。光輝のある無色の堅い結晶で、之を齒で嚙むと
軋る音がある。而して臭氣も無く又味も無いが、唯微かに灼くが如きの感がある。冷水及
び冷酒精には溶け難く、沸湯及沸湯酒精には溶解し易きものである。

【効能】 はニコル氏之を解熱藥と稱へ始めてから今や諸種の熱性病及び肺病に用ふ。

藥物學大意

アンチテル
ミン

マレチン

〔用量〕 一日三回一回〇・二である。

〔マレチン〕 Marethin。無色無臭で、水には溶解せぬ白色の粉末である。大量に服すれば安知歌貌林の如き副作用を來し、消化器障害に引き續き過度の發汗を來し、呼吸及び榮養の障害を起すを免れぬが、一回に一〇の範圍に於て内服せしむれば決して中毒の現象は無く、熱度の下降は徐々に及び比較的長い時間繼續するから、一回の頓服でも其の作用は六時間乃至八時間多き時は二十四時間の長きに渉ることもある。

〔効能〕 は熱性疾患殊に結核性發熱及び急性慢性リウマチスに頗る良效を呈し其の他チブス胃加答兒の發熱・肋膜炎・流行性感冒などにも奏效す。今參考の爲に醫學博士佐藤勤也氏の説を擧げよう。曰く「之を要するに本品は服用し易くて副作用の少い解熱藥で結核性の發熱殊に日嘔熱を呈するものに對して良效を認む。而して其の効力は比較的長く續く云々」。

〔用量〕 は一回〇・〇八乃至〇・一五を一日に二回又は三回を可成發熱の前に與ふれば效がより多くある。

〔チアスピリン〕 Diaspirin。白色無臭の粉末をなし百分中七七・一%のサリシール

チアスピリン

酸を含んでゐる。元來サリシール酸は大量に服するか、又中等量でも連服すると消化器及び心臟機能を害し、甚しきは衰弱虚脱に陥るけれど、本品は一週間以上の連服に堪へることが出来、サリシール酸特有の作用の外アスピリン類似の發汗作用を有し、副作用は少いものである。

下劑

瀉劑

瀉利鹽
硫酸マグネ
シカムとも
いふ

〔瀉利鹽〕 Magnesium sulfuricum。――之は誰でも普通に能く知つてゐる通り無色の小結晶物で其の味は非常に辛く且つ苦い。沸湯には溶解し易いけれど、酒精には殆ど溶解せぬ。

〔効能〕 は慢性の便秘・心肺・二臟又は腎臟病が原因となる所の水腫・腦充血・急性漿液膜炎などの下泄を要する者に用ひ、又慢性胃加答兒にも用ふ。けれども久しく連服すれば下痢の持續すると共に徐々に食欲が少くなり遂に身體の脂肪は減り體重は輕くなる、それでも尙續けて居れば非常に衰弱するのみならず慢性腸加答兒を惹起し、容易に體力を回復出来ぬやうになる。近來諸家は皆濕性脚氣の初期に之を賞用するが、予の經驗に依れば一週間以上の連服をせぬが宜いと思ふ。若し之を連服せんとならば五日間程續けて服み、それよ

り又五日間程は中止し、又四五日用ふるといふやうに、而も二三度繰り返したい。予の知つてる或る人が濕性脚氣に侵され、瀉利鹽の效あることを聞き、それ宜しと無鐵砲にも三ヶ月間連服したれば強壯肥滿なる人であつたれど見る影も無く瘦せ衰へたる姿になつて、之を全快せしむるまでに殆ど一年の月日を費したのである。若しこれが薄弱なる人であつたならば恐らく冥土の人となつたであらう、慎しむ可し。

〔用量〕 一日一五・〇乃至三〇・〇で前述の如く其の味の悪いものなれば、これに稀鹽酸と單舎とを必ず混和して服用するが宜い。即ち左に掲けたる處方に依るが可い。

▲瀉利鹽 一五・〇 稀鹽酸 一・〇 單舎 一五・〇 溫湯 一〇〇・〇
右一日三回分服

蓖麻子油

〔蓖麻子油〕 Oleum Ricini。——通常リチニ油ともいふ。本植物の種子より壓搾して得たる微黄色の脂肪で微に特異の臭氣がある。勿論水には溶けぬけれども酒精には容易く溶解す。

〔効能〕 は良效ある緩下劑で、之を一回乃至二回服めば殆ど腹痛無くして快よく糞便を泄すことが出来る。故に腸加答兒或は赤痢などに罹り、收斂薬を用ひんとする前に本薬を

一二回服んで悉く宿便を除き然る後に目的の治療に従ふ順序に大抵の醫士は行つてゐるやうである。下劑の種類は數多いけれど、斯の如く一回若くは二回で氣持宜くドツサリ通する良薬は殆ど無い。けれども一利一害は數の免れざるものか、斯る良薬なるにも拘らず、連服すれば胃の消化を害すること一通りで無いのみならず厭ふ可き臭氣の有る爲にムカムカとして服まぬ中に嘔氣を催すものである。

〔用量〕 は一五・〇乃至三〇・〇を頓服すれば其の早きは五時間の中に目的を達せらる。前述の如く服み難いものなれば極めて濃厚な茶か又は赤葡萄酒の上に浮べてグツと服み下すが宜い。さすれば服んだる後も茶又は葡萄酒の味が残つて幾分氣持の悪きを混らすことが出来る。本品を瀉腸する人もあるが、それには屈里設林を用ふるに如すと信す。

〔人工加爾兒斯泉鹽〕 Carolinum factitium。——白色の粉末であつて、容易に水に溶解す。

人工加爾兒斯泉鹽

〔効能〕 はこれも良好なる緩下劑で、場合に依ては二週間位連服しても差支は無い。即ち便秘・腦充血・慢性胃加答兒・黃疸・胃潰瘍・胃擴張などに之を用ふれば卓效を奏するものである。殊に胃潰瘍には缺く可からざる良薬だ。予は屢々此の病に應用したが何れも良成

績を得た。然れども其の味鹹くて服み難いのは本薬の短所である、故に胃潰瘍者に服ましめると、さらでだに本病は嘔吐のある者なれば該薬を服むや否や吐くを通例とす。予嘗て治療したる一人は「斯んな厭な薬は取り換て下さい腹に収まらぬものを幾ら服んだとて何の効もありませぬから」と不平を訴へたれど、「之よりは外に有りませぬ、死ぬことが厭なら吐いてもく、忍耐しなさい、幾分かは腹に残りますから」斯う勵まして三週間の久しき間連服せしめたが、實に良い成績を呈はし、患者は「彼の様な良い薬はありませぬ」と今でも賞めてゐる。併し本薬ばかりを服ませたのでは無い、他に抱水格魯拉兒といふ良い薬なども用ひたのだ。又胃擴張には胃を洗ふ目的を以て他薬を服用せしむる、傍之を用ふると仲々偉効あるものである。併しながら胃腸炎及び衰弱家には用ひぬを可とす。

【用量】 一回五・〇乃至一〇・〇を五〇・〇―一〇〇・〇の水に溶かして空腹時に與ふるを可とす。一日量でいふならば左の處方に依るが可い。

▲人工加爾兒斯泉鹽 一五・〇 水二〇〇・〇

右一日三回食前分服

若し又數週間連服する場合に

普通一〇〇に
は五〇に
水を一〇〇に
多量で用ひるに
しめての用に
溶かすに
たがひなく
あつた方が
で宜い

▲人工加爾兒斯泉鹽 五・〇―一〇・〇―水 六〇・〇

右早朝空腹時に頓服

斯の如き服み苦い薬ならば單舎でも澤山入れたら宜からうと思はれようが、併し本薬は何程單舎を入れても殆ど同じことだ。故にそれよりも一回量を別器に移して之に生卵を一個落し、味はずにグツと飲み下せば幾分か混る、やうである。而して飲みたる後は冷水を以て能くく、含嗽し終りに其の冷水を一口飲んでおくが宜い。これ本薬を用ふることに就いての予の實驗したる所の例である。

【大黃】 Radix Rhei 之は本植物の根莖を製したるもので、其の儘之を浸劑にも供するが、多くは散劑として用ふ。

【効能】 は健胃及び下劑に用ふ。されど、健胃としても之に優る良薬は幾つもあるし、下劑としても他の下劑を伍用するに非ずんば左程の價値は無い。兎に角一回の便通を得るに適す。序に言つておくが、昔から漢方家の用ふる大黃は其の製方が悪くて、之を服めば裏急後重を起し、頗る腹痛を感じるものである。故に購求の節には必ず「局方の大黃をお呉れ」と言はねばならぬ。

〔用量〕 一日數回、一回〇・五乃至五・〇である。併し健胃劑には一回、〇・一乃至〇・五を與ふ。尙處方を左に、

▲大黃末 二・〇 甘朮 〇・二 白糖 適宜

右分二包一日二回朝夕一包宛

▲大黃浸 (二・〇) 一五〇・〇 重曹 三・〇 單舎 一〇・〇

右一日三回分服

〔リシコール〕 *Risicol* 本藥は前に述べたヒマシ油の成分に何等の變化を與へず製したる白色の無味無臭なる粉末である。抑ヒマシ油は他の下劑に求むることの出來ぬ美點即ち腸に至れば糞塊を包んで刺戟を緩らけ腸内を滑かにし排便を催さしむるは他に類例の無い良藥である。併し惜しいことには不快なる臭氣と不快なる味が有り、爲に惡心嘔吐を催し、胃の消化を害するを如何せんやだ。然るに藥化學の進歩發達は遂にヒマシ油を原質に化學變化を與ふること無く其の弊を免れたるものを製し、極めて藥物を嫌ふ患者にも服用せしめられるやうにしたのは實に便益であることは著者も度々之を實驗して保證する所である。が併し原ヒマシ油よりも其の價が非常に高いから我國の貧民患者が用ひ難

リシコール

いは甚だ遺憾である。

〔効能〕 是腸を刺戟せず即ち腹痛無くして、暫時にして粥の如き便を催さしめるから腸の炎症例へば盲腸炎の初期・産婦の宿便・赤痢・チブス其の他の便秘結症に一回又は數回用ふると快く宿便を下す效がある。さりながら久時連服すると胃を害するから宜しく無い。〔用法用量〕 は大人一回の頓服用には五・〇乃至一五・〇を牛乳・スープ・コーヒ・葡萄酒或は茶に浮べて服用するのであるが、分服としては一日五・〇乃至一五・〇を用ふるが適當だ。小兒には其の年齢に依り違ふとはいふもの、大凡大人の五分一位である。

〔カスカロイド〕 *Cascoloid* 本藥は日本藥局方に掲載してあるカスカラサグラダ皮の樹脂を錠劑となし、糖衣を施したるもので、本藥の一錠中にはカスカラサグラダ乾燥エキスの〇・一三三瓦を含んでゐる。

〔効能〕 は緩和爽快なる便通を與ふると共に胃液分泌の作用をなすもので常習便秘の持藥として、連服しても左程に害は無く、又衰弱せしむる憂の殆ど無きは他に類例の少い良藥といふを著者は憚らぬ。

〔用量〕 は一回量、二粒乃至六粒であつて、可成は日暮に服むが宜い、何となれば其の

カスカロイド

アペレイン

作用が十時間乃至十二時間で現はれるからである。
【アペレイン】 *Apelain*——白色無臭の粉末で、其の味も不快で無く、薬物を嫌ふ人や小兒にも服用し易い。

【効能】 は緩和下劑として諸種の便秘及び常習便秘に用ひて其の目的を達せられる上に副作用が無くて而も其の奏效する時間が速い。併し、カスカロイドよりも其の價は高い近時歐米では素人用の常備薬として賞用すること其の錠劑も出來てゐる。

【用量】 は一回〇・二乃至は〇・四であつて、錠劑ならば一回に三錠乃至六錠を服用す可し。

エキソチン

【エキソチン】 *Exodin*——黄色の粉末で、臭氣も無く、又味も無い。水には溶解せず又酒精にも溶解せぬ。之は主に錠劑として行はれ、醫士も亦之を用ふ。其の一錠中にはエキソチン〇・五を含んでゐる。

【効能用量】 は有力なる無刺激性の下劑で、一回若くは數回之を用ひ、宿便を下すの用に供ふ。即ち右の錠劑一箇乃至三箇を服めば八時間乃至十二時間以内で確に效を奏するものである。

エモジン

【エモジン】 *Emodin*——大黃・センナ等種々なる下劑の有効成分で、酒精及びアルカリ液に溶解する赤黄色の粉末をなし、其の溶液は赤色を呈してゐる。

【効能用量】 は瀉下劑として一回〇・一を與ふれば頗る有効である。

收斂劑
次硝酸蒼鹽

【次硝酸蒼鹽】 *Bismutum subnitricum*——單に硝蒼ともいふ。白色の細かい粉末で而も無味無臭であるから、小兒に與ふるには至極宜い。水には溶解し難いものなれど、便利上振盪合劑として與ふることもある。

【効能】 は胃腸を收斂保庇するものと謂つて可い。即ち胃病に就ては消化不良醗酵物或は炎症或は嘔吐殊に潰瘍に有効である。腸病に在つては胃病よりも效力多く、近頃は色々の下痢殊に潰瘍的に賞用す、又腐敗性の下痢、小兒の吐瀉病にも應用す。一般に腸粘膜炎の糜爛部を防護する所の蓋となり、直接に刺激を減するを以て第一の作用となすとトラウベ氏は言つてゐる、之を素人の方に了り易く言へば、硝蒼を服むと胃腸に至り、恰も壁を塗つたやうになつて或は收斂し、或は保護するのである。けれど、或る人は「硝蒼は有效なる薬に非ず、之を用ひて效ある如く見ゆるは他の有効品たるモルヒネや阿片、又は莨菪な

ど、伍用するからだ、若し之を單用すれば其の效力若し有るにしても甚だ僅微である』と然るに近頃之を駁する人の説に曰く『硝蒼を單用して效無きが如くに見ゆるは其の分量が當を得ざるからだ、若し一日の量三〇乃至五〇も用ふれば大いに效あるものである』と予の經驗に依れば重き腸加答兒若くは赤痢等に用ふるには少くも五〇時に依ては一〇〇にも昇るが宜いと思ふ。即ち一回量二〇宛五回も與へねばならぬ。斯く多量に用ふれば幾分食欲を減ずるかも知らぬけれど、其の他には何等の害無くて而も偉大の效を奏するものと信ず。然るに該藥は他藥に比して其の價高く一弓即ち三〇〇入一瓶は數十錢併し一弓て其實二六〇程し其無之を一〇〇も用ひて一日分十五錢東京開業醫の藥價では何等の利益が無い。さりとて高價藥と名づけ特別に徵收するも見苦しなどいふ算盤勘定から之を用ふる者が少いさうだ。又、中には誠のある醫士が多量に之を用ふるにしても藥舖の方で又奸策を廻らし、硝蒼に似たる物を賣りつけて法外の利を貪らうとする。嘗て大阪の病院長は赤痢患者には一日量一〇〇を與ふるけれど、何等の效無きのみならず、却て病勢を高むるやうである所より、はてさて不審なること、段々取り調べて見たればそは硝蒼ならで硝蒼の反對作用を及ぼす藥品であつたから、大に吟味して今度は良好なる硝蒼を與へたれば患者は日増に

單寧酸

但し單寧酸
アルブミン
を用ひた方
るが胃を害す
憂は無い

快くなつたといふ。實に日本商人の公徳心の缺乏せるには毎度のことながら慨嘆の至りである。

收斂の目的を以て外用にも供ふるけれど、そは酸化亞鉛に及ばぬと予は信ず、又振盪合劑として一乃至三%の溶液を瘰癧病に注射することもある。尙其の他軟膏となして皮膚病に應用する人も有れど左程の效ある者に非ず。

〔單寧酸〕 *Acidum tannidum*. 一名鞣酸とも云ふ。少し黄色を帯びた白い粉末で、其の味は甚だ澁いものである。

〔効能〕 は收斂止血の目的を以て下痢病・内臓出血例へば胃腸・肺・子宮・腎臓などの出血・白帶下・膀胱加答兒などに散藥・丸藥又は水藥として與ふ。又金屬性の中毒等に用ふることもある。外用には鼻出血・鼻加答兒・痲疾などに單用し、或は五十倍乃至二百倍の液となして用ふ。又、單寧酸軟膏として腋臭に數月持長して用ひ仲々效あるものである。

〔用量〕 は一回〇〇五乃至〇・五を一日數回服用するのであるが、〇〇五では其の效力少く、〇・五では大に胃の消化を害し、食欲を減ずるの憂があるものである。但し大出血等の場合は此の限に非ず。

▲單寧酸 〇・三 含糖百弗聖 三・〇 白糖 適宜

右分三包一日三回一包 (下痢症)

▲單寧酸 二・〇 三百倍石炭酸水 二〇〇・〇

右白帶下又は痲疾に注射

素人の方が内用するには單寧酸銨を用ふるが便利である。單寧酸銨とは單寧酸五分、白糖九十五分を能く混和し、一銨中には單寧酸が〇・〇五を含有する割合になつてゐる。故に〇・一を服まんに二銨を用ふれば可い割合である。

〔醋酸鉛〕 Plumbum acetium. — これは劇薬である。白色結晶性の塊りで、僅に酸い臭氣を有し、水には容易く溶解す。之を藥量用だけ内服すれば甘味を覺え口中が乾燥する感起す位に過ぎねども、長久しく用ふれば、胃腸粘膜の分泌を止め、消化器を妨害し、便秘するやうになる。其の大量一〇・〇以上を服用すれば急性中毒を發し、頭痛・眩暈・昏睡甚しきは衰弱・知覺脱失或は痲痺し、時としては二十四時間以上數日内に死んで了ふ。若し死なざるまでも慢性中毒症に罹り身體は瘦せ衰へ、色は悪くなり、消化不良を訴へ、便秘を來し呼氣には臭氣を帶び齒齦は鬆疎る皮膚は乾燥する、其の他疝痛を發し、知覺は鈍麻

醋酸鉛

になるなど、逆も長生の出來ぬものである。斯の如き恐る可きものなれば劇薬としてあるのだ。併し其の方法宜ければ次の如き效力あるものだ。

昔は肺炎・關節炎・リウマチスなどに頗る大量を用ふるともあつたが、現今は肺出血・腸出血などに少量を阿片に伍用し、散劑丸劑又は水劑として用ふ。其の他下痢・氣管支炎・肺結核の喀痰過多に盜汗又は咳嗽を兼ねる者に、これも少量を用ふ。外用としては其の範圍が内用よりも汎く即ち分泌物の多過る潰瘍或は粘膜炎即ち鼻汁の過多等に其の溶液を塗布し、或は耳・陰門・子宮などにも撒入し扁桃腺・口腔炎の含嗽劑ともなし、又涙液の多き症等に點眼藥となし其の他外傷には冷罨法とし又は洗滌劑となし、皮膚の皸裂・表皮剝脫などに軟膏として用ふるなど一々數へきれぬ程應用するものである。

〔用量〕 は日本藥局方の極量は内用は一回〇・二で、一日〇・五となつてゐるが、普通には〇・〇二乃至〇・〇五を一回量とし、一日には〇・〇五乃至〇・二位である。外用には一%の溶液を用ひ、含嗽には〇・五位を可とす。點眼水には〇・〇五%の稀薄なる者を用ひ、撒入藥又は注射藥としては〇・一—〇五%の溶液其の部分に依り病の輕重に従ひ斟酌す。

〔硫酸亞鉛〕 Zincum sulfuricum. — 一名皓礬と云ふ。これも劇薬である。無色の結晶

硫酸亞鉛

形で、水には溶解すれども酒精には溶解せぬ。健全なる皮膚に其の溶液を塗布するも何等の異常を呈せぬけれど、潰瘍面及び創面或は健全なる粘膜に腐蝕作用を呈し、稀薄なる液は分泌物を制限し組織を固くし、且つ腐敗を止め悪臭を除くの效を奏す。其の少量〇・〇一乃至〇・〇三位を内服しても何等の影響無きが如しと雖も之を反覆すれば食欲減少し便秘を起す、其の量稍多ければ腸加答兒を起し、精神遲鈍になる。更に大量〇・一乃至〇・四を服用すれば直ちに嘔吐を來し、腹痛を伴ふ所の下痢を起すこともある。更に一層の大量を用ふれば口中の粘膜は白くなつて皺を生じ、且つ縮み劇しき吐瀉を來す、最も大量七・〇乃至八・〇を服めば劇烈なる症候を呈し衰弱呼吸困難になり數時間で往生すること疑無し。これ劇薬の劇薬たる所以である。けれども醫士は此の作用を利用して種々の效を奏せしむ。されば左に之を記さう。

昔は癩癩・ヒステリー・眩暈・神經痛などに鎮靜薬として用ひたれども、今は害あるも效無きものとするやうになつた。又昔は消化器・呼吸器の分泌過多なる加答兒症に應用したれども、今やこれに勝る良薬の出で、之を取る者は實に稀である、併し過つて毒物を食した場合等に催吐劑として今でも用ふる人もあるが餘り效は無い。これに反し外用としては偉

大の效を奏す。殊に眼科には諸薬の王とも言ふ可きものである、即ち眼瞼結膜の急性及び慢性加答兒・初生兒眼炎・角膜潤濁・トラホーム涙液分泌過多等大抵の眼病に應用す。邊鄙なる土地では眼科専門に非る醫士が眼病を診察して何病なるかの診斷がつかねば先づ二%の硼酸水で洗はしめ傍ら〇・二%の皓礬水を點眼薬として與ふるが通例となつてゐると謂つても可い位である。次に鼻粘膜の分泌物過多・耳漏などに五十倍乃至二百倍を塗布又は注射す。次に出血性の潰瘍・粘膜の糜爛などに二十倍位の濃厚液を塗布することがある。次に痲疾に五百倍乃至千倍の液を注射す。其他膀胱出血・腦及び子宮の粘液漏などに百倍乃至千倍のものを注射したり、或は口・鼻・咽頭の粘膜病に百倍乃至二百倍の含嗽水を應用するなど仲々效能の廣いものである。

〔用量〕 は日本藥局方では一回の極量〇・〇六、一日の極量〇・三となつてゐる。外用は右に述べた通りなれど、尙便利の爲二三の處方を書いておかう。

▲硫酸亞鉛 〇・〇二 蒸餾水 一〇〇
右一日數回、一回一二滴を點眼。但し慣る、に従ひ、〇・〇三乃至〇・〇五位に度に進むべし。

▲硫酸亞鉛 〇・二—〇・五 水 一〇〇・〇

右麻疾に注射

▲硫酸亞鉛 一・〇 水 一〇〇・〇

右分泌過多に塗布

亞鉛華軟膏

〔亞鉛華軟膏〕 Unguentum zinci. 〓これは酸化亞鉛一分豚脂九分をよく混ぜて製したるものである。

〔効能〕 は概括して言へば分泌物の多い糜爛や潰瘍には殆ど病の何たるを問はず用ひても差支は無位である。卒業後間も無く開業した經驗の少き醫士が亞鉛華軟膏を輕視したる爲に不名譽を招いたる話は幾つもある。嘗て某醫學士は或る患者の額一面に何とも名の附けられぬ潰瘍があつて、それが爛れ、ジク／＼と分泌物の多いのを診療したる其の方法は、先づ五十倍の石炭酸水を以て洗ひ沃度仿謨を撒布し、ガーゼを當て亞麻仁油紙を載せ整然と繃帶した。されど幾日経ても益糜爛の殖えるばかり、是に於て或は硼酸を試み或はデルマトールを代用するなど、色々工夫を費せども依然として治らぬ。或る日患者は之を某藥店の主人に話したれば、『欺されたと思つて亞鉛華軟膏を塗けて御覽なさい』といふ、

心ならずも之を試したれば四五日で綺麗に乾いた、『成程醫士のいふことばかり信じられぬなア』。又某醫學得業士は麻疹後の小兒の皮膚が糠狀に落屑して其の後の結痂が紅くなつて治らぬを診察し、色々治療したる末亞鉛華粉を撒布したまでは行つたれど何うも思はず無い所より他醫の診療を受けたれば、矢張り此の軟膏を塗けよとのことで早速に行ひたれば、これも日に増し美事に治つたといふ事がある。併しながら、これは例外の醫士失敗談を話したのであるから何事もさうだと誤解し素人の勸告を受けぬことあらまほし。用量は随意で可い。

明礬

〔明礬〕 Alumen 〓これは白色の粉末で其の味は微かに甘くて大に澁い。水には徐々に溶解すれども酒精には溶けぬ。

〔効能〕 は下痢・小兒の催吐劑などに用ふる人もあれど、左程の效あるものではない。外用には古來より漢方家も西洋醫も共に用ひたもので、今でも尙廢れずにある。即ち子宮粘膜炎・分婉後の收縮不全・痲病・白帶下・腋臭・潰瘍面・耳・鼻中・咽頭部の分泌物過多及び爛れ、衄血・足の蹠の汗多きなどに粉末其の儘又は溶液を塗布或は注射又は含嗽して甚だ效がある。

〔用量〕

は内用には一回〇・一乃至〇・五。外用には十倍百倍乃至五百倍等其の症に依て斟酌す。

醫療上の外明礬は汚い水及び不良の飲料水中なる不潔物を沈め之を清淨にするの性質があるから、此の目的に向つて汎く衛生上に應用す。

鹽茄子を漬けるのに此の明礬を入れておけば不潔物を沈降するのみならず、茄子の色が美くなつて氣持が快い。美しき山吹色の澤庵と共に一つ器に盛れば食欲津々として来る、亦以て利用すべしだ。

次に此の溶液を妙なことに應用する人がある、それを語る前に某博士の議論を書いて然る後に述べよう。某博士は曰く「人には交接慾と生殖慾とあつて、縦ひ夫婦が交接するにしても子を設けようと思つて交接するもあれば子は既に十分なれど、唯交接慾のみに従ひ交接するもある。理屈一方からいへば、三四人も健康な子を生めばそれで可い、中以下の生活をする者などに在つては以後生まれるれば教育は十分に出来ぬし却つて家族一同迷惑にもなるし、又生まる、子とても不幸な目に逢はねばならぬから、目的だけの子を設けたら、以後斷然交接を廢せねばならぬ譯だ。が併しこの理想は實際に行はれようか、否々々非常

に意志の堅き不世出の英雄に非んば到底行はる可きものではない、有夫婦の者が法律上道徳上爲す可からざる姦夫姦婦をさへ敢て忍ぶ者がある世の中に一點の道徳に背かざる天晴れての夫婦が如何でか之を廢さるべき事やはある、されば斯る場合にはルーデサツクを應用せよ云々。乃で又某ドクトルは曰く「博士の論旨には賛成すれど、ルーデサツクの如き物を陰莖に嵌めればコーベル氏腺より分泌する處の液體を妨げ従つて夫婦殊に男子の快感を殺ぎ、又女子の粘膜を傷めんなどの弊害がある故に、ルーデサツクに代ふるに五十倍の明礬水を利用せよ、即ち交接後直ちに該藥を腔中に注射して清潔に拭ふのである、さうすると第一に精蟲を撲殺し傍ら防腐にもなり、又子宮加答兒などの豫防にもなる、現に子宮加答兒等ならば療治にもなる云々」と。不經驗なる予には果して然るや否やを信ずることとは出来ぬけれど、恐らくは一旦吸収したる精液は明礬水位で必ず死なぬものであらう、若し又假りに信なりとしても絶體的に之を賛成せぬ、何となれば幾人生れた所が子を設ける程の年齢で而も子を生む程の健康體ならば育てられぬ道理は無い、生まぬ中は要らぬと思つてゐても既に生れて顔見れば末程可愛く、それが爲に働く勇氣も一層興奮して来る、又長子の方は追々成長して役に立つ。されば幾十人生れたとて何をか憂へん、一人でも多

くの臣民を作つて國家の御用に立つ可しだ、不自由なる行爲をして何の愉快かある快感を得んが爲の交接をなし、後で明礬水を注射する時の不愉快を想像して御覽なさい、思半に過ぎるでせう。議論は岐路に入つたが、世には避妊法など、書いて青春男女の心を動かす、情落到誘ふ所の雑誌や書物が幾つもある、若し之を信じて行はゞ自然が罰するものと心得られたし。

〔硝酸銀〕 Argentum nitricum. 此れも劇薬で、我國の薬局方には結晶硝酸銀を採用してある。無色の結晶で水には溶解し易いものである。其の性光線に作用せらるゝから黒色の瓶中に貯へねばならぬ。之を健全の皮膚に塗布しても白色を呈し、少く知覺を鈍くし、次第に光の感應に由り黒くなり、微に皺を生じて縮む。其の少量〇・〇一乃至〇・〇三を服すれば咽頭に少し辛い感起す位なれど、反覆して用ふれば胃部に温熱の感起し、食欲缺乏惡心嘔吐を起す。大量〇・一乃至〇・二を用ふれば胃の粘膜を腐蝕し、劇烈なる胃炎の後死んで了ふ、されば之を劇薬とする所以である。

〔効能〕 は往時今でも舊式を採用人は下痢・胃潰瘍及び脊髄癆などに一日、二三回〇・〇〇五乃至〇・〇二位を内服したれども、現今は次第に用ふる者の無いやうになつた。外用には其の

硝酸銀

範圍頗る廣く、奏效も亦著しき場合が多くある。今其の主要を列記すれば、
 實布的里・肉芽贅殖・壞疽・分泌物過多・トラホーム・鼻茸・凍瘡・瘰癧・横痃・梅毒性潰瘍・痔核などに其の濃厚液二〇%位即ち硝酸銀二〇水一〇〇の割合の物を塗布して仲々效がある。
 又初生兒眼炎・化膿性外耳炎・咽頭加答兒・生殖器殊に尿道の疾患慢性癩病・膀胱加答兒・白帶下・慢性膈炎などに二千倍乃至三千倍の溶液を塗布或は注射し、然る後に千倍の食鹽水を注射するが宜い。又五百倍位の溶液五〇〇を慢性下痢及び赤痢に灌腸するも頗る效を呈することがある。又白髮染として用ふれば天然の黒さとは固より違ふけれど、黒く染るには相違無い。但し後に生えたのは矢張り白から又塗り換へねばならぬ。而して塗るまでに其の準備として石鹼を用ひ、水にて能く清潔に洗ひ、然る後又微温湯にて洗ひ、髪を能く乾きたるを待ち、没食子酸一〇水五〇〇液を刷毛にて髪根部から毛尖まで丁寧に残り限無く塗布し、これを乾かし、それから愈々左に掲けたる處方に従ふのである。

▲硝酸銀 二〇 蒸餾水 一五〇〇 アンチモニウム液 適宜
 右塗布 但し使用の際誤つて皮膚を黒く染むることのある場合は沃度加里一〇〇・〇水三〇〇の液を以て洗ひ落す可し。

ビスマール

〔ビスマール〕 Bismal—灰白を帯びたる褐色の懸疎の粉末で、アルカリには黄を帯びた赤色を以て溶解し、其の溶液は酸類を加ふれば、再び本薬を析出するものである。

〔効能用量〕 は收斂薬として頑固なる下痢に一日三回、一回〇・一乃至〇・三を與ふると頗る良效がある。

Δ
パラフォルム

〔パラフォルム〕 Paraform—白色の結晶粉末で、水には溶解せぬものである。

〔効能用法〕 は内用として霍亂・下痢などに〇・〇五乃至〇・一を與へ、又肺癆及び鼻加答兒に吸ひ入れしめ、又本薬の蒸氣は病室及び肌衣の消毒に用ふ。

ビスモン

〔ビスモン〕 Bismou—赤を帯びたる黄色の粉末で約二十%の金屬者鉛を含み、冷水及び熱湯に溶解す。

〔効能〕 は粉末又は溶液として内服及び灌腸に供へ、大量を與ふるも副作用が無く、其の水溶液は他のビスミット製劑の如く全く胃壁に配布せられ、且つ速かに胃の幽門より直腸に至るまでの腸内容物は短時間に分離して亞酸化ビスミットを生じ、而して硝蒼の如き不溶性で無いから、小兒や哺乳兒に水劑として與へらる、は甚だ便利である。之を急性及び慢性の腸障害又は消化不良に用ひて頗る效力がある。

アドレナリ

〔用量〕 は一日三四回、一回〇・五乃至一・〇を牛乳又は其の他の流動物に混合して服用せしむ。

〔アドレナリ〕 Adrenalin—副腎より得たる製品の薬物學的作用は其の皮質中に存する一種の物質に基くもので、西曆一千八百九十五年始めて、フレンケル氏は之をスワイモゲニンと名づけて市場に出し、次にエーベル氏はエビネフリンと名づけて之を出し、一千八百九十五年にはフェルト氏は確實に其の有效成分を純粹の状態に於て分離することを成功し、兩氏は其の成品をアドレナリンと命名し、フェルト氏は類似の方法を以て其の有效成分を製し之れをスブラレニン Suprarenin と名づけられたが、其の他副腎の結晶性有效物質は色々の名稱を以て市場に行はれてゐる。兎に角高峰氏の製品は羊又は牛の副腎を醋酸含有の水に浸し、其の浸し出した液を蒸發して濃厚とし、酒精を加へて無効の物質を析出せしめて濾過し、其の濾過したる液を眞空中で蒸發して少量となし、之にアンチモニアを加へて粗製アドレナリンを得、此の粗製品を精製するには、之を酸性となしたる酒精に溶解し、其の溶解したる液にエーテルを加へて雜物を析出せしめこれを又濾過して其の液にアンチモニアを加へて眞正のアドレナリンを得るのである。之を發明するまでには色々

の辛苦を経、種々の手数をかけて出来たので、學者の功績は世人實に感謝の意を拂はねばなりませぬ。斯くて出来上つた藥品は白色乃至灰白色の結晶性の粉末で、水・酒精・エーテルには殆ど溶解せぬけれども熱湯には稍々溶解し易く稀薄なるアルカリ及び酸類には容易く溶解するものである。

〔生理的及効能〕 は大に血液を増すと同時に諸血管を縮少し心臓動作を緩和ならしめ瞳孔を散大し尿中に糖を排泄し、白血球を増すものである。故に收斂藥及び止血藥として大に賞用せられ、又局所痲酔の目的を以て單純若くはコカインと配合して用ひらる。今、更に詳しく其の醫治作用を述べれば(1)外科に於ては大出血にタンボンとし、又滲潤痲酔用の痲酔藥に加へ、(2)婦人科に於ては子宮内膜炎又は子宮出血に用ひ、(3)耳鼻咽喉科では出血性中耳炎・鼻の手術・劔血・鼻加答兒等に用ひ、(4)泌尿器科では膀胱腫瘍・膀胱出血・尿道出血・夜尿症等に應用し、(5)胃腸科では出血に用ひ(6)眼科では局所痲酔藥と配合して網膜炎・慢性結膜炎・虹彩炎・緑内障・眼の手術などに知覺脱失の目的に用ふ。尙其の他強心劑として諸般の虚脱・脚氣衝心・ベスト等に偉大なる效を發し、又喘息・百日咳・バセドー氏病などにも良效を奏することがあるなど實に靈藥中の靈藥だと稱するも敢て過大の報告で無いと

著者はお太鼓叩いておくを憚らぬ。

〔用量〕 は耳科及び外科では千倍乃至五千倍の溶液を用ひ、結膜炎には五千倍乃至一萬倍の溶液二三滴を以て貧血せしむるを得。膀胱出血には一萬倍の溶液を用ひ皮下注射には二千倍溶液一立方仙迷を以て極量とし、胃腸の出血には一千倍の溶液二十滴乃至三十滴を内用するのであるが、其の他の疾病には之に準じて知るが宜い。極量は〇・〇〇〇〇九乃至〇・〇〇〇一となつてゐるが、ミュレル氏は〇・〇〇〇〇五乃至〇・〇〇〇〇七五の範圍内ならば嫌ふ可き中毒作用が無いと言つてゐる。尙色々の製劑もあるが、そは拙著「新藥素人藥物學」を見られたい。

皮膚病劑

百露拔爾撒

皮膚病劑

〔百露拔爾撒謨〕 Balsamm peruvianum 此は中央亞米利加のサンサルヴァドル國のバルサム濱といふ一地方のみに生えてゐる喬木を立木の儘にて其の樹皮を打ち敲き、それより出る汁を直ちに取るか、或は又其の部に布片を纏ひこれに其の汁を含ませ、更に之を製したるものである。

藥物學大意

且つ防腐の力ありと唱へ又或る醫士は色々の潰瘍又は火傷・凍瘡などに外用すれば大なる效有りといふけれど、これ皆陳腐に屬せる舊説で、今や、この目的に向つては、之より勝る良薬は續々發明せられてある。けれども獨り疥癬の蟲を殺す效能に至つては、此の右に出る良薬は恐らく無い、即ち如何に頑固な此の蟲も、此の薬に觸る、や二十分間長くも四十分間経てば必ず往生して了ふ。斯様に效力確實であるばかりで無く、頗る爽快なる芳香ありと且つ之を皮膚に塗けても刺戟することの少いとで、醫士社會には現今大いにこれを賞用せられてゐる。

〔用量〕 は先づ患者をして入浴せしめ、加里石鹼を以て垢や脂を洗ひ落し、然る後四・〇乃至六・〇位を其の儘或は同量を五十瓦程の酒精に溶解し、これを塗擦し、毛布を以て其の部を被ひ、大凡一晝夜間に二三回反覆し、其の間は臥床に居るが可い。而して全治したらば舊衣服を悉く着換へることが肝要である。斯くして數日の後再び癢さを感じて來たらば、再びこれを反覆して大事に至らぬやう注意せねばならぬ。

〔イヒチオール〕 Ichthyolum ーこれは燃土質化石より製したるもので、其の化石は大洪水以前の魚類及び海獸の遺物とのことである。斯る昔の遺物を今や取つて以て薬用に

イヒチオール
日本薬局方
にはスルフ

オイヒチオール
モニウムと
なつてゐる

供ふるとは造化の力否人智の應用亦以て巧妙なるものと謂はねばならぬ。

〔効能〕 は甚だ多くあるけれど、一口に言へば色々の皮膚病薬である。第一に面部に用ひて卓效あり、次は酒齶鼻次は毛髮脱落症次は子宮内外膜炎・糠枇疹・濕疹・痒疹次は凍瘡・火傷次は癩病次は僕麻質斯・齒痛等に其の儘か或は水に溶かし、或は他薬と混ぜて塗れば何れにも多少の效力あるものである。

〔用法〕 は而麩に塗るには爪にて脂を壓し出し、然る後イヒチオール軟膏（イヒチオールとたも）を塗擦し之を數日間續け、それより醋を以て洗ふが宜い。酒齶鼻には晝間水蛭を貼け、能く血を吸はしめ夜間に至つて右イヒチオール軟膏を塗るが上分別である。毛髮脱落症には初め石鹼を以て能く洗ひおき、一時間経てイヒチオールを十倍の水に溶かして塗れば頗る效のあるものだ。糠枇疹・濕疹・痒疹にはイヒチオール十瓦ラノリン五十瓦といふ割合に和せて塗擦すべし。凍瘡にはイヒチオールとテレミン油とを等分に交せて用ふる方が宜い。火傷にはイヒチオール二瓦ワゼリン軟膏百瓦の比例にて能く混和したるものを塗布すれば其の創を早く治せしめる效力あるのみならず痛みも鎮めるものである。されど、予の経験に依れば癩痕を残し易いやうである。癩病には矢張りラノリン五倍を混ぜて塗れば勿論全

イヒチオールの如くは、皮膚病に應用するに、強い傾斜を有する。故に、後述のオールの方へ、宜い。

幾答利斯丁

治の効は無いが、他の内服薬等の効と共に多少の助けとなるはウンナ氏及び其の他醫士の認むる所である。儂麻質斯にはイヒチオール一、バラピン軟膏三といふ比例に混ぜて塗ればこれ亦内服薬の効を助くるものである。齒痛には少量のコロホルムを混ぜて綿に浸し用ふれば甚だ効ありと述べてる醫士もあるけれど、果してイヒチオールの効ありや否やは疑はしい。斯の如くイヒチオールは色々の皮膚病薬及び鎮痛薬として用ひらる、所の重寶なる薬である。又或る醫士は癩病・儂麻質斯其の他の病に一日量大凡一・〇乃至二・〇を水に溶かして内服すれば大なる効を呈する云々と述べてるけれども多くの醫士は大抵塗擦薬として外用に供ふるものである。

【幾答利斯丁幾】 Tinctura cantharidum. 一名 芫菁丁幾ともいふ。これは昔恐る可き毒物として取り扱はれたる斑猫といふ蟲を乾かして製したる粉末一瓦と酒精十五瓦との割合を以て五日間冷處に浸し之を搾り濾したる物でこれぞ名に負ふ芫菁丁幾である。

【効能】 は昔は色情の無い人に或は陰萎病に催淫劑として内服せしめたさうである。否、今も尙之を迷信してゐるものがある。併し斯の効能は無いのみならず其の量を過つて服めば一方ならぬ毒性を逞うする所の劇薬である。然らば現今の醫士は何に用ふるか、曰く讀

者諸氏も既に知らる、通り、毛髮の發生を促す刺戟薬として外用するのみである。けれど其の用ひ方が悪いと皮膚が赤くなり其の上、水疱が出来て揚句に薄い毛も禿けて了ふやうな滑稽を演らかしたる例も往々あることである。されば之を使用したき方は左の處方に依り、數月數年續けねば効無きことを前以てお断り上申候なり。

- ▲ 芫菁丁幾 一・〇 リチニ油 五〇・〇 ベルガモット油 五・〇

右三品を能く混ぜたるものを一日數回塗けるが宜い。但し之を塗ける前に良石鹼を以て洗ひおくことが肝要である。世には藥罐に毛の生えてゐる畫など掲げて針小棒大に廣告する毛生薬もあるけれど、利を貪らん爲の毛小棒大薬と心得て宜い。

芫菁軟膏

【芫菁軟膏】 Unguentum cantharidatum. 幾答利斯軟膏又は發泡膏ともいふ。これは幾答利斯末と阿列布油・黄蠟・的列底とを交せて製したる所の膏薬である。

【効能】 は何れも引赤誘導即ち吸出膏薬である。されば速かに膿汁或は毒物を吸ひ出しむるの目的を以て、七八時間も塗けておけば大抵其の効を奏するものである。彼の狂犬に嚙まれたる場合などに一刻も早く之を塗擦すれば其の毒を蔓延せしめずして濟むことが

刺納林

ある。
〔刺納林〕 Lanolinum. — 羊毛の脂肪を水に混和し、アルカリを以て洗浄したる脂肪である。

之に含水ラノリンと無水ラノリンとある。含水の方は白色無臭の軟膏様で二十五%の水を含んでゐるが、無水の方は褐色の軟膏質を呈はして幾分の臭氣を放つものである。

〔効能〕 は無水ラノリンは含水ラノリンよりも硬膏を作るに適し、且つ大量の鹽類溶液或は脂肪質を吸収せしめんとするに用ふ。されど普通には含水ラノリンを用ひてゐる。何れにしても今ラノリンの長所を列記すれば(一)化學的抱合は鞏固で久しく貯はへても分解せぬ。(二)皮膚に入り込む力が強くて之を他薬と配合すれば、他薬をして速かに血行中に吸ひ込ますやうにする。(三)多量の水を含むの性がある。故に或る薬物の水溶液をもこれに混和することが出来、又能く粘膜に固着することの出来るものである。(四)尋常脂肪とは異り、小機生體を含まず且つ機生體の入り込むことを妨げるから防腐的の蓋となる。尙左の處方を参考として皮膚病に應用するが可い。

▲撒里矢爾酸 一・〇 豚脂 二・〇 ラノリン 一〇・〇

右外用(皮膚病)

▲ラノリン 六・〇 水銀 二五・〇 水銀軟膏 一・〇

右外用(梅毒)

▲黃若越幾斯 一・〇 ラノリン 一〇・〇

右外用(鎮痛)

▲石炭酸 二・〇 ラノリン 四五・〇 豚脂 三・〇

右外用(皮膚病)

▲イヒチオール 一・〇 ラノリン 九・〇

右外用(皮膚病)

▲ラノリン 二〇・〇 澱粉 一〇・〇 撒里矢爾酸 一・〇 酸化亞鉛 一五・〇

右外用(皮膚病)

▲焦性没食子酸 一・〇 豚脂 一・〇 ラノリン 九・〇

右外用(皮膚病)

▲ラノリン 四五・〇 白降汞 五・〇 豚脂 五・〇

藥物學大意

右外用(皮膚病)

▲硼酸 一・〇 豚脂 二・〇 ラノリン 七・〇

右外用(皮膚病)

▲ラノリン 二五・〇 豚脂 五・〇 クリサロビン 一・〇

右外用(禿髮小瘡疹)

▲沃度仿護 一・〇 豚脂 一・〇 ラノリン 八・〇

右外用(防腐)

▲沃度加里 一・〇 水 一・〇 豚脂 一・〇 ラノリン 七・〇

右外用(收斂の目的)

〔苦利沙羅並〕 Chrysarobinum 護亞粉一名アラロバ Araroba は南米ブラジル國に

産する喬木の幹なる空洞や罅裂に自然と積つて褐色の粉末である。而して苦利沙羅並は其の護亞粉より熱偏蘇爾を以て落し出したる成分である。水には溶解せぬがコロロホルム、氷醋酸、偏蘇爾には容易く溶け、酒精・エーテルには困難に溶解す。護亞粉及び苦利沙羅並は皮膚を刺戟し、粘膜には一層強い作用がある。故に此の薬を採る

職業者は常に結膜炎や紅斑様の炎症に罹つてるとのことである。之を多量に皮膚に塗ると、紅斑・而皰などを發し且つ皮膚は灼けるが如く或は非常に痒く其れが爲に眠られぬことさへもある。又表皮や爪などに附くと紫褐色になり、數日の後は次第に剥れて消散するもので、其の皮膚より吸収せらるゝ量が多いと腎臓を刺戟して蛋白尿・血尿を起すことがある。又之を内服すれば著しい吐瀉を起すものである。

〔効能〕 は鱗屑疹・濕疹・癩風・頑癬・糠枇疹・痒疹・寄生性匍行疹などに用ひて效驗確實である。

〔用量〕 は三四倍の攝華林と混ぜ、或は七乃至十倍の古魯胃膜と配合して用ふ。今處方を記せば、

▲苦利沙羅並 一・〇 華攝林 一〇・〇

右混和して軟膏とし塗布。但し護謨紙を以て覆ふ可し。

〔エピカリン〕 Epicarmin 市場に賣つてゐる物に二種ある。一は醫藥として用ひ、其の色白く、之を純エピカリンといひ、一は獸醫用に供へ、其の色赤を帯びこれを獸醫用エピカリンと云ふ。今茲に述べんとするは純の方で、酒精エーテルには溶解し脂肪油とは混和

す。

〔効能〕 は殺菌力と刺戟を緩和する效あるとの爲に疥癬・寄生蟲匍行疹及び痒疹其の他の寄生性皮膚病に用ひ、而して無味無臭無刺戟無毒であるから使用上何等の危険は無い。
〔用量〕 は疥癬には十%の軟膏として一日三四回擦入し、其他には十%乃至十五%の酒精液として塗布す。

〔オイチオール〕 Euthiol——普通イヒチオールの如き一種厭ふ可き臭氣無く加ふるに少しも刺戟を有せぬのである。

〔効能〕 は手及び顔面の急性再發性濕疹に濕巻法として用ふれば醋酸礬土巻法の際に於けるが如き濕潤を呈せず、又能く痒痒を治するものだ。丹毒・淋巴腺腫・横痃・乾性炎症及び火傷に消炎劑として用ひ、且つ收縮せしめることの出来る所から凍瘡・紅斑・血管腫などに効果を奏す。

〔用量〕 は濕巻法としては二%乃至は五%の溶液となし用ひ、其の他の症は隨意である。

〔レプロール〕 Leprol——藥學博士下山順一郎氏の創製である。即ち大楓子油酸の誘導體であつて、殆ど褐色の粉末をなし、其の味は大楓子油酸とは異り、刺戟性の無いもの

オイチオール
ルに述べるに
前イヒチオ
品て刺戟の代
少い其藥で
ある

レプロール

で、之を乾燥せる大氣中に置けば更に變化せぬが、濕つた大氣中に置けば軟かに變化するが潮解するまでには至らぬ。冷水には徐々に溶解し十倍の沸湯には澄明に溶解し、其の溶液は冷ゆるに従つて濁り、酒精には僅かに溶解す。

〔効能〕 木下藤一氏の報告に依れば從來の藥物に比するに内用外用共に便利で、(一) 結節癩に對して效力を認む。(二) 内外用共に中毒作用無く従つて胃の障害も無い。(三) 注射内服共に少くも四ヶ月以上繼續せねば眞の效力を認めぬ。(四) 結節の變化は初發又は新生のは全く消え中等度に硬くなつてゐるのは次第に軟化し、吸収して了ふ。高度の結節は軟化して崩れ、遂に肉牙を發し癩痕を結ぶが、其の癩痕は左程に醜く無い。(五) 神經性及び斑紋には效力が弱い云々と。又、土肥慶藏氏は曰く癩病に對しては大楓子油が特效藥であるが其の純良品が無つた。然るに此の大楓子油より精製したる本藥は結節癩に對して偉效がある云々と木下氏又曰く、治療中に溫浴を併行すると新陳代謝を進めて尙一層の效力がある云々と。

〔用量〕 は内服一回は〇・五乃至一・〇であつて、一日に三回が適當である。散丸及び水劑何れでも可い。又注射藥としては一〇%乃至三〇%とし、毎日二・〇宛筋肉注射を行ふが

適當であつて、疼痛を覚えて來ることが無い。小兒又は虛弱者には一〇を二回注射す。因に言つておくが小生は『續素人藥物學』一七二頁にも述べた通り本病者の溫浴には酸性泉たる草津溫泉が最も宜いといふを憚らぬ、詳しくことは同書に説いておいたれば参照せられたい。

ノイフォルム

〔ノイフォルム〕 Neuforn——フォルマリンとグワヤコールの混合物で白色不溶解性の粉末である。故に其の性は創傷及び皮膚病に對し收斂防腐殺菌の作用を呈し、而も無刺戟である。

〔効能〕 は沃度製劑の代用として創傷・狼瘡・火傷・凍瘡・横痃・陰部匐行疹・鬱血性皮膚炎などに用ふると收斂防腐殺菌の外に兼ねて又鎮痛の效力を有するものである。

〔用法用量〕 は乾燥を要する場合には單に撒布し、然らざる者には五乃至十%の軟膏として用ふ。

アンチレプロール

〔アンチレプロール〕 Antileprol——本藥は神經痛の妙藥としてバイカロー氏の報告があるから茲に其の概要を擧げて其の儘述べておかう。曰く「予が二ヶ年間四十の實例に徴しアンチレプロールを神經痛に適する物なるを確めたである。乃ち予は本品の二〇乃至

五〇此の量は稀を膠囊に入れ、癩病者に與へたるに大抵は不快の感をも起さず、又障害も認めずに連用せしめることが出來た。即ち硬結腫・皮下癩・神經疾患にも同様の結果を得た。去りながら一部の患者を二ヶ年間治療し、其の経過に就いて甚だ効果が良かったとは言へ、之を以て癩病を全治せしめる藥だといふことは明言出來ぬが、其の奏效に至つては大に意を強くするに足るものだ。

予が從來本患者を取り扱つたのは第一は病院、次は自宅及び遙に地方より予の許に來れる所の外來患者で其の多くは勞働者だから、清潔及び衛生といふことに對しては殆ど何等の念をも有せぬものであるから、治療上に於て大なる困難を感じた。而して此の際予を助くべき助手の如き人に手を煩はさず、予一人で彼等を取り扱ひ唯其の實地の方面のみに止めず、却て科學上の研究に重きをおいた。所で本藥を用ふるに當り他の藥品を併用せぬことにした。故に其の良果を得たるは全く本藥なることを證據立てることが出来る。

本藥は即ち硬結腫及び滲潤が消え、少も神經現象を伴はぬことが證明せられる。又、二三の患者が大部快くなつた所から治療を止めたれば其の後に病氣再發し再び予の許に來たに依て、又此の藥を用ひたれば、又々快復せし實例もある。斯くて如何に連服せしめても胃

レニガロール

の障害を来さぬものである云々」と、繰り返して賞讃し、多少效能を廣告的に述べてあるが若し此の通り神經癩に效力あるものとせば前述のレブロールがあるし、癩病者は更に憂ふるに足らぬ、果して然るや姑く記して識者の教を乞ふ。

〔レニガロール〕 Lencicalol——化學的に言へば、三醋酸焦性没食子酸で、之を皮膚病各部に應用しても蛋白尿或は他の中毒現象を起すこと無く又健全なる皮膚に對して無刺激性で白色の結晶性をなし水にて溶解せぬ所の粉末である。

〔効能〕 は急性慢性の諸種の濕疹に用ひて良效がある。
〔用量〕 は十乃至二十%のレニガロール亞鉛バスタ或はレニガロールウキルキンソンバスタ等として用ふ。

防腐劑

石炭酸

〔石炭酸〕 Carbolic——は防腐藥中で最も重要な位置を占め最も汎く行はれてゐる大なる藥である。特異の臭氣と灼くが如き味とを有し、細長き無色の結晶をなせる一塊をなす。時を経れば微に紅色を呈す。十五乃至二十分の水に溶け酒精・エーテル・グリセリン等には随意の比例に於て溶解す。石炭酸の稍濃厚なる溶液即ち二十倍以上の物を皮膚に注

ぐときは最初暫時の間は著しき焮灼を感じて白斑を生じ間も無く赤くなり二三日の後表皮は剥けて落つ。又頗る濃い滴液に在ては深部に及び知覺脱失を來す。又濃厚なる石炭酸を稍多量に服するときは腦及び神識上に癱瘓作用を起し甚だ危篤に迫ることがある。故にこれを劇藥として素人には五十倍以上に非らずんば賣られぬことになつてゐるのである。
〔効能〕 は内用に供ふることは甚だ稀であつて、而も確實なる奏效あるものではない。唯糖尿病などに甚だ少量を用ふることがある。之に反して外用には其の區域最も廣大である。西曆千八百六十七年にリステルといふ人が始めて防腐的療法に應用すべきを論じて以來今日に至るまで本品を除きては外科の療治が出来ぬ位になつてゐる。即ち種々の外傷や手術瘡を洗滌し次に腐蝕・刺戟分泌制限の目的を以て種々なる粘膜の膿性及び腐蝕性分泌物のあるものに含嗽或は注射又は塗布することがある。例へばチフテリー・氣管支炎・白帶下・痲疾などに於けるが如し。次に種々の皮膚病例へば白癬・癩風・火傷・凍瘡などを洗ひ或は塗布し、又は軟膏として塗擦す。次に急性關節リウマチス・丹毒・骨炎・腺腫などに注射することもある。次に純品を齶齒に用ふ。尙其の他醫士の手や器械を消毒し、傳染病毒に汚れたる又は疑ある住居・病室・屍室・廁・下水・溝・排泄物などを消毒するなど其の用途の廣き

ことは一々数へきれぬ程である。但し厠や下水又は排泄物等には廉價なる粗製石炭酸で可い。

沃度仿謨

〔用量〕 は内服には〇・〇一乃至〇・〇五を丸劑として與へ、外用には二十倍乃至は百倍にしたる溶液を用ふ。但し汚物の消毒には少くも五%で無くては効無しと知るべし。

〔沃度仿謨〕 Jodoform 〓 は千八百六十二年セルラス氏が始めて之を發見し千八百七十九年リステル氏が最も確實なる防腐藥なることを論定して以來今日に至るまで偉大の効を奏しつゝある。黄色の細小なる結晶粉末で、一種の強い臭氣がある。水には殆ど溶解せぬものなれど、酒精やエーテルには容易く溶解す。

〔効能〕 は石炭酸と同じく内用に供することは甚だ稀で、大抵は外科用のみである。何となれば其の少量〇・〇五乃至〇・一を内服しても頭痛を感じ、食欲缺乏し心臓の動悸は高ぶり、面皰の様な物が顔面に表はる、之より稍々大量に於ては身體に倦怠を生じ心臓部に疼痛を感じ下痢を來す。けれども之を外用すれば石炭酸の如く迅速に消毒の効は呈せぬけれど、漸次に長く其の効力を呈はすの長所がある。換言すれば其の作用が急速に消滅せぬのだ。故に外科醫は石炭酸水で洗つたる後に之を撒布し繃帶するのである。今更に其の効力

硼酸

を列記すれば(一)腐敗に陥らざる創傷を保持して必ず腐敗せしめぬやうにし、且つ治癒を促す。故に骨折・骨疽の切斷面・火傷・化膿せる下疳・横痃に賞用す。(二)瘰癧・瘰癧・梅毒性腺腫・關節藥丸の腫脹を消散するの目的に用ふ。(三)化膿性の耳病・膿性の眼病に用ふ。(四)肛門の裂傷・痔疾・痲疾に用ふることもある。(五)鼻加答兒・咽頭喉頭の潰瘍に用ふ。(六)婦人科の病即ち子宮口糜爛・乳嘴の潰瘍・陰門炎・陰門濕疹などにも用ふ。(七)結核性關節炎及び手術の出來難き部へ注射することがある。斯る場合には沃度仿謨一〇、エーテル、阿列布油各々七〇より成れる物を用ふ。さりながら(一)より(六)までには粉末の儘を撒布し、或は酒精及びグリセリンに溶解せるものを用ひ、又或る場合に依ては二十倍の單軟膏に混和して塗擦すれば良效あるものである。

〔硼酸〕 Acidum boricum 〓 光澤を有する鱗の屑に似たる結晶形の粉末であつて水には溶けぬが沸湯には溶解す。

其の殺菌防腐の効力は石炭酸や、沃度仿謨に比すれば速く及ばぬけれど生體に對しては最も無害なるものなれば今や汎く賞用せらるゝやうになつた、往時は鎮痙の效ありとか或は胃中に腐敗物の出來たる場合又はチフテリの如き傳染病などに宜いとかと一日數回〇・一

デルマトール

乃至は一・〇を粉劑又は丸劑として内用したることもあれど、今は既に陳腐の説となつて其等の目的にはこれに勝る良薬は幾つもある。外用には前に述べたる如く毒性及び刺激性の少きを以て耳鼻の疾病・咽喉炎・膈炎に用ひ、或は口中の含嗽・白帶下・痲疾に注射し、又は酒精・グリセリンに溶解して皮膚病に塗布し、或は軟膏として擦傷・皸裂・火傷などに塗擦することもある。又眼科醫は眼を洗滌するには唯一の物として實用す。若し是等の場合には石炭酸水を用ひんか、其の刺戟強く、却て其の目的を達することが出来ぬ、斯る場合には硼酸の效力亦以て大なる物と謂はねばならぬ。

〔用量〕 は二%乃至四%の溶液を用ふ。

〔デルマトール〕 Dermatotol.——沃度仿謨に似たる黄色の粉末なれども仿謨の如くに臭氣無く且つ皮疹を發するの憂無きを以て其の效力は仿謨に劣ると雖も之を代用することがある。

〔効能用法〕 は即ち創面或は潰瘍に撒布し、或は又濕疹の如き皮膚病に軟膏として塗擦することもある。

安息香酸

〔安息香酸〕 Acidum benzoicum.——光澤のある白色の針狀をなせる粉末で、水に溶

解せぬものである。

〔効能〕 は防腐殺菌の力無いでは無いが、現今は主に祛痰劑として應用せられ、而もこれよりも安息香酸那篤留謨を用ふ。兎に角老人小兒或は虛弱者の氣管加答兒・肺炎などに用ふ。

〔用量〕 は〇・〇五乃至〇・五を散劑丸劑として一日に數回與ふ。外用には防腐性繙帶料に備へ、或は尿道及び膈の疾病に注入することもある。

ミルトール

〔ミルトール〕 Myrtholum.——ミルテンといふ植物の葉を蒸餾して製したる澄明の液體である。一種の芳香があつて其の味はピリリと灼くが如く而して後に涼しい感を起す。

〔効能〕 は消毒防腐としては有力なるもので腐敗性氣管支炎に對しては確實なる效力を奏するものである。又肺の結核菌發生を防ぐの性があるから、本病の初期に於て頗る有望なるものと謂つても恐らく過言ではあるまい。之とよく性質の似てゐる列底油もあれど列底油の如くに頭痛や眩暈などを發することなく又石炭酸や結列阿曹篤の如くに粘膜も刺戟せず而して連服しても食慾を缺損せるが如き憂は無い。予は嘗て慢性氣管支加答兒患者に應用したる實驗談を序に掲げておかう。該患者は氣管支加答兒に罹つてから二年の間は

晝夜にコン／＼咳嗽を發し何時も痰壺を抱き而も其の痰は惡臭を放ち、黄色を帶び、一見人をして汚穢の感を起さしむ。其の上患者は食慾不進筋肉瘦せ衰へ素人見には何うしても結核者の様である。爾來色々の治療も受け、様々の薬用も試みたが効は無いとのこと、乃で予は高價なるを省みず、本品を與へたるに、一日にして頗る爽快を覺え、咳嗽や痰も大いに減じ、連服すること一週間にして食慾も増し、殆んど全快したる状態になつた。これより後多くの患者に試みたが、其の輕症なるものには比較的に効力が少きも重症なるものには何れも意外の良成績を呈してゐる。

〔用量〕 一日五六回〇・一乃至〇・二五を膠囊となし用ふるを常とす、但し呼吸及び尿に一種の臭氣を放つのと其の尿の紫色に變ずるのを見ても敢て驚くには足らぬことを一言附記しておく。

〔チオコール〕 Thiocolum. — グアヤコールを基礎として製したるもので、該藥品百分中五十二分のグワヤコールを含む。白色の粉末で何の臭も無く味は始めは苦くて後には幾分の甘さを感じる。水に溶解せず。又酒精にも溶けぬのである。生理的作用は殆ど結列阿曹篤・クワヤコールと同じであるが、其の刺戟作用等は凡て彼より

チオコール

も緩和である。

〔効能〕 は伯林なるターフェル氏の報告に依ると結核菌の蔓延を防ぎ且つ結核菌を撲滅するの力があるのみならず他の藥品に比すれば臭氣も無く水劑とすることも得可く消化器に障害も來さず、其の上咳嗽を緩和する效がある云々と、併し予は未だ實驗せぬとなれば之より色々と審査の上他日再び讀者に其の結果を報告するであらう。

〔ヨードル〕 Jodolum. — 之を化學上で論ずるとピルロールの四沃度化合物即ち四沃度ピルロールで八十八・九%の沃度を含み、沃度防護に比ぶると其の用量は七・八%少い。が併し沃度防護よりは有害の副作用が少い爲に沃度防護の代用として大に用ひらる、所の薬である。其の色は白に少し黄を帯びてるか或は褐色の細かい粉末で、光線に逢へば黒くなり、水には僅に溶け、酒精・エーテル・脂肪油には容易に溶け、苦し酒精溶液に水を加へると乳汁の様に濁り指に附ければ脂肪の如き感覺がある。本品を貯へるには黒色の瓶に入れ、暗所に置かねばならぬ。

本品の作用を沃度防護に比ぶれば其の毒性緩慢で、〇・五以上を内服して初めて體温減退し、呼吸麻痺するに至る。之を粘膜及び創傷のある皮膚上に塗擦すれば微かに其の面を腐

ヨードル

蝕して白い量が出来、且つ其の創傷分泌物を無臭に保ち、治癒を促す所の作用あるにも拘はらず小機生體に對するの作用は頗る弱いものである。

〔効能〕 は内用としては沃度加里の代用として第三期の梅毒・甲状腺腫・腺病などに用ひ、又肺結核に應用する人もある。けれども予の經驗に依れば此等に對して効力の少いものと信ず。外用には其の毒性が少くて且つ臭氣の無い所から沃度仿護に代用するけれど、其の効力は弱くて逆も沃度仿護には及ぶ可くも無い。されど應用す可き病を列記すれば諸般の潰瘍・化膿性腺炎・狼瘡などに外用し、喉頭結核・化膿性耳炎・肥天性及び瘦削性鼻炎などに嗅入粉及び吹入粉となし又眼科には肉芽性及び慢性結膜炎にワゼリン軟膏二と十として用ふ。又之を外用するにはヨードル綿紗とし、或はコロヂウム劑として使用することがある。綿紗とするはヨードル・コロフォニウム・グリスリン各々一分を酒精十分に溶解してこれに脱脂綿を浸し製するのである。

〔用量〕 一日〇・二乃至は〇・五を數回に分泌せしむ。外用には一乃至十%の軟膏等を用ふ。

▲ヨードル 〇・五 甘草羔 甘草末 各適宜

右爲三十九日一回三回、一回五丸宛（梅毒等）
▲ヨードル 一〇〇 酒精 一五〇 偲里設林 三〇〇
右混和して塗布（諸般の潰瘍等）

ナフタリン

〔ナフタリン〕 Naphtharinum 石炭多兒を乾かして製する一種の炭化水素で、無色の光輝のある葉狀結晶をなし、一種の厭ふ可き臭氣が有つて非常に辛い味がある。水には溶け難いが酒精及びクロロフォルム・エーテルには容易に溶解す。

人及び高等動物に對しては其の作用の弱いもので、之を皮膚に塗つても又數瓦を内服しても幾分か消化機を妨げることがある位で、著しい症狀も呈せぬけれど、細菌や蚤・虱・蚊などに對しては強烈なる毒物である。されど惜い哉不溶解性であるから肉類の如き物に應用しても其の物と混和して密に觸る、ことが無いから十分なる防腐の作用を呈する譯には行かぬ。

〔効能〕 は内服には防腐藥として慢性腸加答兒・吐瀉症・膀胱加答兒・腸の害生蟲などに與へ、又解熱藥として腸室扶斯などにも用ふ。されど予の經驗に依れば内用としては餘効の無きものと信ず。外用としては疥癬・濕疹などに十乃至十二%の油溶液を用ひ、又、

下疳・白帶下にも應用す。又、創傷潰瘍などにも乾燥性糊帶藥として用ふれば惡臭を除きて肉芽の發生を促し頗る良效のあるものである。

〔用量〕 は内用としては一回量〇・一乃至〇・五を一日四五回膠囊に盛り、或はオブラートに包みて與ふ。但し一日量は五・〇を超えてはならぬ。

ベトール

〔ベトール〕 Betolum. 光澤のある白色の結晶粉末で、味も無れば臭も無い。水には溶解し難いけれど、エーテル・クロロフォルム・熱酒精には容易に溶解するものである。又グリセリンには溶解せぬけれども、熱胡麻油には直ちに溶解す。

〔効能〕 は防腐藥又解熱藥として用ふるけれど、不快なる副作用を來さぬものだ。又種々の膀胱加答兒殊に痲疾性の者には多少の效を奏す、又腸加答兒や急性關節リウマチスには頗る良效あるとのことだ。又腸中の腐敗症には試む可きものだと言張する醫士もある。

〔用量〕 は内用には一日三四回、一回〇・三乃至〇・四を丸劑散劑とし、外用、殊に痲疾には柯々阿酪を加へて尿道挿入藥とす、即本品一、柯々阿酪四の割合を以て製す。

▲ベトール 一・八 白糖 五・〇

右分八包一日四回一包宛

ヨチオン

〔ヨチオン〕 Jothion. 本藥は微に黄色を帯びたる油狀の液體で、其の臭氣は不快では無い。約七十五分乃至八十分の水及び二十分のグリセリンには溶解し、又酒精・エーテル・クロロフォルム及びワゼリンには容易に溶解す。而して約八十%の沃度を含み、容易に皮膚を通じて皮下脂肪に溶解し、皮下結締織内に分解して沃度アルカリに變化するものである。斯くて適用後三十分乃至は四十分経つて尿及び唾液に沃度を檢出し、三日乃至四日間は尙持續してゐるから、本品の少量を用ひても以上の時日間は沃度が身體組織内を循環し比較的に大量の沃度は生體內に吸收せらるゝものである。されば皮膚に塗擦するのみであつて内服又は皮下に注射するときは中毒の恐れがあるから可成は行はぬ方が宜い。

〔効能〕 は醗菌及び其の他の皮膚病又は毛髮疾患の病源に對抗するから強力なる防腐殺菌の效を奏す。又或る醫士は沃度加里の内服に代用し、或はヨードチンキの代用として脊髄癆・梅毒性神經炎・骨膜炎・慢性子宮炎・慢性睾丸炎・肺氣腫・氣管支喘息・動脈硬化症などに用ふると良效があると述べてるが疑はしく。又醫學博士平井純太郎氏は小兒の肋膜炎及び腦膜炎の後期、腹膜炎などに宜いと奨めてゐるが、小生は未だ之を實驗

せぬから一つ試して見たいと思つてゐる。

〔用法用量〕 は等分のオレフ油又はラノリンに混和して用ふるか或は二十五乃至五十%の軟膏として塗擦するかせねばならぬ。又粘膜或は陰囊の如き鋭敏なる局部に用ふるには十乃至三十五%の軟膏として用ふるが宜い。但し何れも塗擦する局部を度々變へねばならぬ。

〔イツフォルム〕 Isoform. — 四十七%のヨードを含有するもので、銀の如き光を有する葉狀の結晶で冷水・酒精・エーテルには殆ど溶解せぬが沸湯百分には全く溶解するものである。

〔効能用量〕 は極めて有力なる防腐薬及び防臭劑として創傷及び種々の皮膚病に應用するが、用法はイツフォルム粉一〇・〇、炭酸カルチウム四〇・〇或はイツフォルム粉一・〇ツゼリン又はラノリン五〇・〇の軟膏として用ふる。又他物を混ぜずに單純なる物を撒布しても可い。

内用としては胃腸の防腐に與ふ。用量はイツフォルム膠囊即ち一箇中に〇・五の本薬を含む物を一日に一乃至四箇を與ふ。

△イツフォルム

オルトフォルム

〔オルトフォルム〕 Orthoform. — 白色の無臭なる軽い結晶粉末で水には溶解難く、酒精・エーテルには溶解す。

〔効能〕 は防腐と局所麻酔とを兼ねたる爲に切創火傷などに用ふれば苦痛を軽減せしむ。

〔用量〕 は酸化汞或はサリチール酸汞を注射する直前に本品〇・三乃至〇・六を添加すれば其の注射が痛くない。

利尿劑

利尿劑 附 心臟強壯劑

硝酸加保護

〔硝酸加保護〕 Kalium nacetium. — 白色の結晶粉末で水蒸氣を含める大氣に觸るれば潮解し水及び酒精には容易く溶解す。

〔効能〕 は腎臟實質炎に原因する水腫に用ひぬ外は凡ての利尿劑に供し頗る良好の成績あるものである。其の他慢性胃加答兒・痛風・リウマチス等に效ありといふ人もあるが、予の經驗では何うも信ぜられぬ。

〔用量〕 は一日數回一・〇乃至三・〇で普通には一日量四・〇を用ふる。

〔硝酸加保護〕 Kalium nitricum. — 白色の結晶或は白色の粉末で水には溶けるが酒

硝酸加保護

精には溶解せぬ。

其の少量〇・五以下を服めば涼しいやうな辛い味を有つてゐる爲に聊か渴きを止めるといふ外に何等の作用も無れど、久しく用ふれば食欲を減じ續いて悪心を來し、胃痛を伴ひ、便秘するやうになる。大量五・〇以上を用ふれば口中咽喉頭の粘膜は乾燥して胸は灼けるが如く感ぜられ、嘔氣が出て嘔吐を催し甚しきは脈搏は不整となり、呼吸困難・筋肉衰弱遂に此の世は暗くなつて來たやうに感ずると同時にバツタリ倒れて死んで了ふ。斯の如く以上説きたる薬は劇薬で無けれど誤つて用ふれば實に危険なる場合に立至る。況んや劇薬毒薬に至つては小心翼々取り扱はねばならぬ。

〔効能〕 は肺炎・肋膜炎・心臓内膜炎・外膜炎其の他の水腫に實答答利斯次と伍用して良效がある。

〔用量〕 は一日三回、一回〇・三乃至一・五を水劑又は散劑として用ふ。又胃腸の悪しき人や衰弱者には用ひぬが宜い。

〔實答答利斯葉〕 *Folia digitalis* 歐洲の西部より南部に互る山々に自然と生えてる草の葉であつて、近時我國でも移植するけれど其の効力は遙に劣るさうである。故に其

實答答利斯葉

の野生の物殊に種より生えてから花を有つ時の間に探つたのが最も良い。而して之を探つてから一年以上貯へると往々有效成分の分解を起し大いに其の効力を減じ、寧ろ用ひぬを可とするに至るものであるとのことだ。

一定量を超えて服用すれば其の初めは心臓の鼓動が少なくなつて、脈は大きく搏つ位なれど次第に興奮せられると心臓は痙攣の状態に陥り非常に不正なる鼓動になり、遂に休止してバツタリ黄泉の客となる、實に恐ろしい薬である。これ其の劇薬たる所以である。又少量即ち一定量であつても之を連服し數日乃至數十日も續くと一時に大量を用ひたと同じく脈搏は急に不整となり、頭痛・眩暈・嘔吐・不眠などを起し、悶へ苦しむものである之を蓄積作用といふ。之に就き予の實見したる某醫の失敗談を附記し世人の注意を惹き起しておかう。

今より十五六年程前に予が郷里の某漢法醫が或る水腫患者を診察したるに患者は「先生の許へ薬を取りに運ぶこと甚だ不便なれば我が町にて買ひませう、就いては如何なる薬を飲んで宜きか教へ玉はれ」と乞うた。某醫は「可矣々々」と實答答利斯五錢、澤瀉十錢と記したる紙を與へ、「之を買ひ求めて十包に分け水一合半を入れ、一合に煎じ詰めて二度に服み

なさい云々」患者は喜んで之を買ひに行けば「澤瀉は上げますけれど實答答里斯は醫者様の判を押したる買請書を御持ち下さい」と斷る、乃で患者は直ちに某醫へ引き戻したれば「さうか面倒臭いことを言ふな」と呟きつ、「一金五錢實答答里斯右買請候也」の末に年月日姓名を記し、ビタリと實印を押して渡した、患者は教へられたる通り毎日行つてると、四日目の朝起き出で、便所へ行く途端フラフラと眩暈がし倒れるや否や「胸が裂けるやうになつて来た、嗚呼苦しい」と叫びながら間もなく三十歳を一期として此の世を去つた。返すくも藥は實に恐ろしいものである。されば素人の方は縦ひ普通の藥でも醫士監督の上ならでは連服せぬことにして下さい。

〔効能〕 は斯の如く恐ろしき藥なるにも拘らず、之を上手に用ふれば偉大なる效力を奏するものである。諸般の水腫に利尿劑として用ふるのみならず少量を以て心臟の力を増し且つ強壯ならしめ、血液の壓力を進むるなど心臟衰弱に對しては此上無き良藥である。詳しく言へば心臟筋肉の衰弱・血液循環の不活潑・心臟瓣膜の障害・呼吸困難・熱性の急病・急性リウマチス・產褥熱・肺炎・肋膜炎・心臟内外膜炎及び腎臟炎・諸般の水腫などに之を用ひて危急を救ふことの著明なるものである。但し解熱の效殊に奇妙なるは心臟の鼓動高ぶるに有るに非ず。

用ひ、又緩むにも用ひ緩急何れにも效を奏する一事である。

〔用量〕 は一回〇・一乃至〇・二 大量に用 或は一回〇・〇三乃至〇・〇五 少量に用を浸劑散劑又は丸劑として一日二三回用ふ。併し前述の如く蓄積作用ある藥なるを以て之を用ひたるときは屢々患者を診察して脈搏が緩くなつたとか、心臟の鼓動が不正になつたとか、又は嘔吐を催したりなどしたる折は直ちに其の服用を止めねばならぬ。日本藥局方には一回の極量〇・二、一日の極量一・〇となつてゐる。尙左に二三の處方と予の經驗したることを記し醫學生の參考に供へておかう。

▲實答答里斯浸 (〇・五)二〇〇〇 赤葡萄酒 二〇〇 單含 八〇〇

右一日三回乃至六回分服

右は脚氣病者の心氣亢進又は心臟衰弱に二日間乃至四日間連服せしめても差支無い、其れ以上は小心翼々として用ふ可し。

▲實答答里斯末 一〇〇 還元鐵 一・五 鹽酸規尼涅 二〇〇 甘草末 適宜

右六十丸となし、一日三回食後二丸宛

右は心臟瓣膜病に用ひて偉效を奏したことは予の數回實驗せる所である、而して此の處

實答里斯
丁幾

方に依れば十日分の連服で一日分の實答里斯の量は〇・一、一回分は〇・〇三餘となる。斯の如き少量ならば二十日間連服しても差支は無いと信じてゐる。併し右三處方共に毎日診察して中毒の症狀無きかを確かむることは甚だ肝要である。

〔實答里斯丁幾〕 Tinctura digitalis. 實答里斯葉一分を酒精十分に浸すこと五日間之を壓搾したる上濾して製したるものである。

〔効能〕 は前者と同じく用量は一日量一・〇乃至一・五を三回に分服するが適當である。日本藥局方の極量は一回、一・五、一日五・〇となつてゐる。之を素人的に考ふれば、效能に於て違はぬものなら煎じたりする手数が無いから丁幾のみを用ひ、其葉は用ひぬが宜からうと、併し先輩及び予の經驗に依れば葉の浸劑は偉効あれども丁幾は遙に劣るのみならず、少し大量に用ふれば葉よりも中毒の有様が甚しいやうである。されば可成は葉浸を用ひたいものである。尙一の處方を記しておかう。

▲實答里斯丁幾 一・五 カフェイン 〇・三 單舎 一〇〇 水 一〇〇〇
右一日三回分服

右は登山或は競走等をなして疲勞を感じたる場合に一日乃至二日の連服に適す。

ストロファン
ツス丁幾

〔ストロファンツス丁幾〕 Tinctura strophanthi. 熱帶の亞弗利加に産するスト

ロファンツスといふ灌木の種子一分を酒精十分に浸して製したるものである。

其の作用効能は頗る實答里斯に似て而も實答里斯の如く甚しき中毒性狀及び蓄積作用を來すこと無きを以て實答里斯を長く用ひたき場合に之を代用するのである。併し實答里斯程の效力無しと認めらるゝのみならず之を連服すれば時日こそは遅くなれ、矢張り蓄積作用を呈するものなることを忘れてはならぬ。

〔用量〕 は一回五六滴一日一・〇を普通とす。規定の極量は一回〇・五一日二・〇となつてゐる。予の經驗に依れば心臟の諸病に實答里斯の代用として一日量一・〇を三週間位連服せしめても蓄積作用無しと信ず。而して利尿の奏效は殆ど無いやうである。

〔チウレチン〕 Diuretinum. 柯々阿豆と名づくる植物の種子より製方したるもので白色の粉末をなし、熱湯酒精には其の半分位溶解するが、冷水には甚だ僅かに溶解す。

其の大量を服すれば心臟には著しい作用は無きも筋肉痲痺し、強直を起すなどの困難がある。けれども咖啡涅・實答里斯等の如き恐る可き性狀を呈するものでは無い。

〔効能〕 は利尿一方の目的を以て諸般の水腫に用ひ甚だ良效を奏するものだ。而して他

の利尿劑は腎臟炎などに用ふると腎臟を刺戟するの憂あれども本品は斯る弊の伴ふことが無いから近時は醫家皆大いにこれを賞用するやうになつた。

〔用量〕 一回一〇乃至二〇で、一日量は六〇を適當とす。之を散劑にすれば風化するを以て左の處方に依るを可とす。

▲ヂウレチン 六〇〇 水 九〇〇 單舎 一〇〇 薄荷水 一〇〇〇
(全量二〇〇〇の容積となる)

右一日六回に分服

海葱

〔海葱〕 Bulbus Scillae. — 歐洲地中海濱に産する百合の様な根のある草であつて其の根を製方したものは即ち本藥である。浸劑煎劑又は丸劑として應用す。

其の新しき根を皮膚に觸接すればピリ／＼と刺戟して赤く且つ熱し、甚しきは水泡を生ずるに至る。又、之を内服すれば胃腸を刺戟し、頗る苦痛を感じるに止まるけれど、若し大量を服用すれば胃腸加答兒を起して嘔吐や下痢瀉の如くになり、其上筋肉痙攣し困苦を招くものである。

〔効能〕 是色々の水腫症に用ひて仲々效を奏す。併し之を單純に用ふることも無く、他の

利尿劑或は鐵劑規尼涅と伍用するを常とす。而して腎臟炎・消化不良・下痢を兼ねる水腫症には必ず用ひてはならぬ。何となれば水腫其の物に效あつても、又一方には大害を與へ、所謂前門の虎を逃れて後門の狼に逢ふやうな結果を來すからである。又氣管支加答兒其他の呼吸器病に祛痰劑とし或は稀に催吐劑として用ふることあれど、之には之に勝る他の良藥は幾つもある。

〔用量〕 一日數回一回一〇・二乃至一〇・二を通常とす。

〔アドニチン〕 Adonidin. — 誰でも能く人の知つてゐる福壽草の中に存する物で無晶形の褐色を呈せる粉末をなし、水には容易に溶解するものである。

〔効能〕 利尿劑及び心臟強壯藥としてヂギタリスに代用す。

〔用量〕 一日三四回一〇・二乃至一〇・〇五を與ふ。

〔ヘリプロチン〕 Periplozin. — 印度産の或る植物より得たるもので、無色の結晶をなし、水及び酒精には溶け易いがエーテルには溶解せぬ。

〔効能〕 はヂキタリス・ストロファンツスに似たる作用がある所から心臟強壯藥として用ふ。

アドニチン

ヘリプロチン

カロフェリン

〔用量〕 は生理的食鹽液(〇・六%溶液)に溶解して皮下に注射す。一回の極量は〇・〇〇一となつてゐる。

〔カロフェリン〕 Karopherin. — 之に安息香酸テオプロミンリチウムとサリチール酸テオプロミンリチウムとの二通りあるが、何れも白色の粉末で水には溶解す。

〔効能用量〕 は利尿劑として諸般の水腫に應用す。一日三四回、一回、一・〇を服用す。

殺蟲劑

殺蟲劑

〔苦蘇花〕 Flores. — 亞弗利加洲アビシニヤ國の高山地に繁殖する植物の花を採つて乾燥したるものである。

生理的作用は未だ詳かになつてをらぬが、兎に角大量に服めば悪心嘔吐を來し續いて下痢し、又小便の通じが甚だ困難となり頭痛がして頗る倦怠を覺えるものである。

〔効能〕 は條蟲を驅除する目的より外に何等の效は無い。

〔用量〕 は一五・〇乃至二五・〇で其の粉末を温湯に混ぜ振盪して服むが宜い。而して之を服用するには、前日は斷食するか或は葷・辣菜などを食する位にしておいて、今朝早々一五・〇を服し、一時間を経て又一五・〇更に一時間を経て一五・〇を服み、其の間は靜に仰臥

加麻刺

し、嘔吐を催しても可成我慢し、薄荷油糖又は氷を食べてゐるが可い。三度服み終つて一時間経たら蔑麻子油三〇・〇を濃厚なる茶の上に浮べて服み、下痢を促さねばならぬ。蟲は前日より食物が無くて弱つてゐる所へ殺蟲劑が三度も來るからさア堪らぬ、乃で苦痛困難の爲に往生して了ふか或は這々の體である。然るに又搗て、加へて下痢を促さる、故已むを得ず外界に出るのである。

〔加麻刺〕 Kamala. — 亞細亞の南部・西印度・呂宋竝に濠洲の大部分に産する植物の果實の外皮を取つたものである。

生理的作用は前者に同じである。

〔効能〕 は矢張り條蟲驅除藥であるが、之を苦蘇花に比ぶれば各々一長一短がある。苦蘇花は其の效力確實であるけれども、悪心嘔吐を來し、婦人小兒及び虛弱の人には適當せぬし、本品は屢々奏效の不確實なるものある代りに其の性が穩かで右の如き苦痛が少いのみならず下痢する作用あるを以て服んだ後下劑を用ふるの必要は無い。

〔用量〕 は六・〇乃至一二・〇を二回乃至四回に三十分を隔て、分服するが常である、而して斷食等の方法は前者に同じ。

石榴根皮

家庭醫學

九四四

〔石榴根皮〕 Cortex Granati. —元は東印度に産し今は温帯熱帯各地に培植し我國にも到る處に綺麗なる花を開き、其の實も熟すれば美人の口を開いたる如き趣きを添ふ。而して其の根は薬用となつて人命を助くるに至つては「人にして樹木に如かざる可けんや」の感がある。新たに乾燥せるものを選ばぬと段々と効力が減る。石榴根皮は單寧酸の多量を含んでる爲に容易に嘔吐を催し腹痛下痢を發す。尙大量を服すれば眩暈を發し、視覺にまで障害を起し、耳は鳴り腓腸筋に痙攣を發するに至る。

〔効能〕 は之も條蟲驅除薬であつて、西洋の醫術を輸入せぬ昔から我國に用ひられたるものである。某醫は赤痢に卓效あると云つて居るけれど、予は未経験なれば保證し難い。

〔用量〕 は三〇〇乃至六〇〇を水三〇〇〇に一日も浸して其の冷浸したる水と本品とを其の儘煎じて大凡二〇〇〇に煮詰め、之を濾して單舎四〇〇と薄荷精適宜とを加へて苦蘇花を服むやうな方法を以て三回に分服するのである。而して服用後は苦蘇花と同じくヒマシ油の頓服が必要である。

〔珊篤寧〕 Santonine. —之は劇薬である。光澤のある無色の結晶粉末で、光に觸れば黄色となり、其の效力を失ふものであるから色瓶に入れて光を遮り貯へねばならぬ。

珊篤寧

〔効能〕 は蛔蟲の特效薬で其の他蟻蟲を驅除するにも用ふ。

〔用量〕 は一回〇〇五乃至〇〇一。極量は一回〇〇一、一日〇三となつて居るけれども予は常に左の處方に従ふ。

▲珊篤寧 〇・一 甘汞 〇・二 大黃末 一・〇 白糖 適宜

右分三包一日三回一包宛

〔綿馬越幾斯〕 Extractum filicis. —綿馬といふ植物の根一分を取つてエーテル三分を注ぎ鍊藥的に製したものである。

〔効能〕 は條蟲十二指腸蟲などの驅除薬として賞用せらる。けれども連服の出來ぬものである。

〔用量〕 は一回二・〇乃至一〇・〇を丸劑又は膠囊に入れて用ふ。用ひたる後大凡二時間を経てヒマシ油を頓服するを要す。

〔知母爾〕 Thymolum. —北米のモナルダといふ草などの揮發油中に存し、香氣の佳いもので水には溶けぬが、酒精・エーテルには能く溶解し、大量のグリスリンにも溶解するものである。

綿馬越幾斯

知母爾

藥物學大意

九四五

之を粘膜に塗れば炎症を起すけれども、石炭酸の如くに腐蝕はせぬ。少量に内服すれば左程のことも無いが、大量に用ふれば胃腸炎を起し、體温脈搏を下降し小便に血が交るに至り遂に衰弱虚脱して斃る、ものである。

〔効能〕 は關節リウマチス・肺炎・チブス・糖尿病などに試用するけれど效能の無いものと先輩諸氏もいつてゐるし、予も亦然りとなす。又十二指腸蟲や條蟲其の他腸内の寄生蟲驅除に有效なりと云ふ學者もあるし、或は疑しいと駁する醫士もある。乃で予の經驗に依れば寄生蟲は夫々の特效藥があるから本品を用ふには及ばぬが十二指腸蟲だけには本藥を用ひて屢々良效を呈してゐる。されど、其の用法は初め綿馬を二日程も連服せしめ、然る後に本藥を持長するのだ。何となれば綿馬は連服すると失明するの憂があるからである。外用には石炭酸を用ふ可き場合に水溶液・酒精溶液・グリセリン溶液を與へ、寄生性皮膚病には軟膏として塗擦す。又火傷には水溶液、腐敗性氣管支加答兒・肺病などの吸入劑としても水溶液を用ふ。近時は又麻疾の注射藥として大に之を賞用するやうになつた。

〔用量〕 は一回〇・〇五乃至は四・〇を内用とし。外用には大抵千倍の溶液を用ふ。今處方を示せば、

▲知母爾 〇・五 薄荷油糖 一・五

右混和して三包とし一日三回一包宛(胃腸の異常醗酵)

▲知母爾 一・五 薄荷油糖 適宜

右分三包一日三回一包宛 (十二指腸蟲)

▲知母爾 二・〇 蒸餾水 二〇〇・〇

右注射 (麻疾)

檳榔子

〔檳榔子〕 Nucces arcaeae. — 印度呂宋に培植する檳榔といふ樹の實で昔より漢方家の珍重したるものである。

生理的作用は詳かならねど、兎に角唾液の分泌を増し、腸の蠕動を進め腫孔を縮少せしむる作用がある。尙大量に用ふれば迷走神經を刺激して心臟の鼓動を休止せしむるに至る。

〔効能〕 は條蟲退治であるが、少量に服めば效無く、大量に服用すれば危險がある。故に今は獸醫が動物に應用する位に過ぎぬ。或る漢方醫が予に勸めて曰く「漢藥とても馬鹿にす可きものならず、腸加答兒や赤痢に本藥と木香とを各々一匁五分水一合半入一合に煎じ用ふれば其の卓效あることは實に驚くに堪へたるものである、或は爾來幾多の人を治し

たか知れぬ君も一つ試して見られよ」と是に於て予は三人の腸加答兒患者に用ひたれば、中二人まで蛔蟲が下りましたと告げた。而して各々一週間程で全治した。併し之は該藥の爲に治つたのか、或は自然に治つたのか一向に了らぬ。けれども條蟲に限らず蛔蟲や蟯蟲などを驅除する性質のある物と信ず。

〔用量〕 は其の粉末四・〇乃至六・〇を牛乳に混和し、服用後例の蓖麻子油を用ひねばならぬ。但し予の腸加答兒に試用したる分量は一日量五・〇を一〇〇・〇の温湯に十五分間煎出し三回に分服せしめたのである。

雜劑

〔吐根〕 Radix Ipecacuanhae。これは劇藥である。南米殊にブラジル國の濕潤なる森林中に生ずる小植物の根を乾かしたものである。

〔効能〕 は少量を用ふれば祛痰劑となり、大量を服めば催吐劑となる。又收斂劑として赤痢・腸加答兒にも用ふ。

〔用量〕 は吐劑としては一回〇・一以上で、祛痰劑としては一回〇・〇一乃至〇・〇五を散劑又は浸劑として與ふ。併し予の經驗に依れば祛痰劑としては浸劑が最も效を奏すると信

吐根 雜劑

沃度丁幾

〔沃度丁幾〕 Tinctura jodi。之も又劇藥である。沃度一分を酒精十二分に溶解したるものである。暗褐色の液體で、一種の臭氣を有し、之を皮膚に塗布すれば即て表皮の剝脱するものである。

〔効能〕 は嘔吐を鎮め腸チブスの下痢に收斂を促す目的を以て内用に供する者も有れど左程の效ある者とは思はれず。外用には陰囊水腫・甲状腺腫・關節炎・淋巴腺炎・肋膜炎・寄性物皮膚病等に塗布す。

〔用量〕 は一回〇・一乃至〇・二で、極量は一回〇・二、一日一・〇となつてゐる。外用には純品を其の儘又は二三倍の酒精を以て稀釋したるものを随意の量を以て塗布するのである。

藥物學大意

六九

沃度加爾謨 略名沃剝

〔沃度加爾謨〕 Kalium jodatum。矢張り劇藥である。白色の骰子形をなせる結晶物

で水及び酒精に溶解す。大氣中の水蒸氣に觸れて潮解し易いから瓶中に入れ密栓して貯へねばならぬ。

〔効能〕は驅梅藥又は吸收劑として梅毒・腺病・慢性リウマチス・肋膜炎の末期・神經痛・喘息などに用ふると頗る良效を呈す。けれども即效の有るものでは無くて連服してゐる中には不知不識の中に良好なる成績を呈するものと心得ねばならぬ。

〔用量〕は一回〇・一乃至〇・五を一日數回水劑として用ふるが宜い。併し本藥は漸々増量するを可とすれば最初一日量〇・二位より初めて一週間毎に〇・一を増し、三〇位にて一時中止せねばならぬ、若し其の間にも中毒即ち頭痛・不眠・耳鳴・諸分泌增多などの苦痛を來すときは中止の已むを得ざることもある。一般に醫士は沃度加留膜よりは沃度那篤留膜を賞用す、其の故は消化を害すること少いから久時連服するに適するからである。

〔沃度那篤留膜〕 Natrium iodatum. 一名沃度曹達とも云ふ。白色結晶形の粉末で其の味苦く且つ辛し、水及び酒精に溶解す。

〔効能用量〕は何れも沃剝に同じと知る可し。尙處方を左に、

▲沃度曹達 〇・三 苦味丁幾 二・〇 單舎 一〇〇〇 水 一〇〇〇

沃度那篤留

絆創膏

右一日三回分服

〔絆創膏〕魚膠を白色の絹片に塗布して之を乾かしたるもので、之に英法絆創膏と獨逸絆創膏とあるが、獨逸の方は能く粘着して宜い。今兩方の原語を書いておかう。

英法は Emplastrum adhaesivum anglicum. 獨逸は Heftpflaster.

〔効能〕は小さな疵や或は繃帶の代りに之を少しの石炭酸水に濕して貼ればピタリと硬着して之を保護するものである。

〔偲里設林〕 Glycerin. 澄明無色の粘い液體で、味も無く臭氣も無く水及び酒精に溶解す。

〔効能〕は表皮剝脱・皸裂・火傷其の他色々の皮膚病や耳内乾燥などに塗布し、又は下劑の目的を以て灌腸料にも供す。内用とすること殆ど無い。

〔用量〕は一回二・〇乃至五・〇を灌腸し塗布には隨意の量で可い。

〔白糖〕これは誰でも知つてゐる白砂糖のことであるが、醫藥の用に供するものは極めて精製してある。

〔効能〕は調味料で用量は隨意なり。

白糖

偲里設林

單舍利別

乳糖

蕃木龍越幾斯

家庭醫學

〔單舍利別〕 白糖六十五分を熱蒸餾水三十五分に溶解したものである。

〔効能〕 は同じく調味料で用量は隨意で可けれども通常は八・〇乃至一〇・〇を一〇〇・〇の水に交ふ。

〔乳糖〕 白色の粉末で微に甘味を有し水には徐々に溶解す。

〔効能〕 は大氣中の濕氣を引くことの無いものであるから調味を兼ねて散劑の伍用藥となすに過ぎぬ。用量は隨意である。

〔蕃木龍越幾斯〕 *Extractum strychnini* 蕃木龍として東印度に産する樹の種即ち蕃木龍子の細末を酒精に浸し之より製したるものである。其の味苦く其の色は褐色で水には濁つて溶解す。

生理的作用はストリキニーネの弱いやうなもので、少量と雖も其の味苦い爲に嘔吐を發することがある。稍大量に用ふれば痙攣を發し四肢強直り、運動を妨げ言語呼吸等にまでも障害を生じ、精神不穩となる。大量に用ふれば尙一層に甚しき發作を來したる末に往生寂滅する。

〔効能〕 は慢性胃加答兒・胃痛其の他消化器の弛める消化不良或は腸の弛める下痢、又は

反對に便秘等に諸家皆之を賞用してゐる。殊に胃擴張には頗る良效を奏す。或は痙攣症殊に膀胱加答兒及び脚氣の痙攣などには多少の效を呈はすやうである。

〔用量〕 は一日數回〇・〇一乃至〇・〇五を散劑丸劑として用ふ。

▲蕃木龍越幾斯 〇・〇六 重曹 三・〇 硝者 一・五 乳糖 適宜
右分三包一日三回一包宛 (胃擴張・腸加答兒・慢性胃加答兒等)
但しオブラートに包んで用ふるを可とす。

▲蕃木龍越幾斯 〇・〇六 鹽酸規尼涅 〇・一 甘草末 適宜
右六丸となし、食後二丸宛 (脚氣・其他の痙攣症)

〔蕃木龍丁幾〕 *Tinctura strychnini* 蕃木龍子一分を酒精十分に浸して製方したる澄明なる黄色の液體である。これも前藥と同じく頗る苦い味を有してゐる。生理的作用及び効能は前者と同じ。されど予の經驗に依れば如何なる道理か越幾斯の方が效くやうだ。

〔用量〕 は一日數回、一回〇・一乃至〇・五である。

日本藥局方は一回の極量越幾斯は〇・〇五。丁幾は〇・五。一日の極量は越幾斯は〇・

藥物學大意

五。丁幾は一日二・〇となつてゐる。

▲蕃木龍丁幾 一・〇 重曹 三・〇 單舎 一〇・〇 水 一〇〇・〇

右一日三回分服 (消化不良腸加答兒 胃擴張等に用ふ)

葯刺巴根

〔葯刺巴根〕 Radix jalapae. 墨西哥國の地に産する草の根を乾燥したるもので其

の味は始め淡泊で後に辛い。

皮膚粘膜に塗れば刺戟を遣うするもので少量に服すれば軽度の下痢を起すに止まるも稍大量に用ふれば二三時間を経てから數回の液便を洩し、悪心嘔吐を起すことがある。進んで大量を用ふればコレラ様の下痢を起し胃腸炎を發して彼の世へ移轉せねばならぬやうになる。

〔効能〕 一回の峻下を要する場合に適當してゐる。醫士に依ては屢これを用ふる人もあれど予は少量を瀟蒼と伍用して常習便秘或は通經の目的に用ふる外は餘りこれを好まぬ何となれば胃腸炎を發し易いからである。

〔用量〕 一回に〇・五乃至は一・〇であつて強度の下痢を望む時には稀に二・〇を與ふることもある。

不思議なる經驗談

予の醫士に成り立ての頃頑固なる便秘症を診察したるに患者曰く「爾來種々なる灌腸や内服藥例へば僱里設林・ヒマシ油・甘汞・巴豆・瀟蒼・瀉利鹽・大黃・加兒々斯泉・葯刺巴根など醫士は色々と手を換へて用ひられましたが大ビクともしませぬ、灌腸すれば唯其の藥だけが下るに止まり、更に效無く、他の内服藥は徒らに嘔吐を催す材料となり、一週間目乃至は二週間内に少量の硬便を洩す位であります云々」と、藥の名まで能く知つてゐる。予は思ふやう如何なる頑固な便秘でも葯刺巴根が效を奏せぬことはよもあるまい、大方前醫は、少量を用ひたのであらうと、乃で大量二・〇に白糖を甚だ多く混ぜて與へ斯の如く甘ければ嘔吐を催すことは無いと患者を慰藉して服ませ、傍ら僱里設林の灌腸をしたが、依然としてゐる、明日又も繰り返したが、何の效も無い。餘り不思議であるから一つの方便を設け、患者に向つて曰く、「予は非常に特效下劑を知つてゐるが之は秘密で話す譯には行かぬ兎に角其れを二三日服まれよ、それでも效無くば他醫に診て貰ひなさい」斯う言つて瀉利鹽三〇・〇稀鹽酸一・五單舎一〇・〇水一五〇・〇一日三回分服の水藥を與へた。患者は之は瀉利鹽の味が致しますれど違つてゐませうか」予は瀉利鹽如き有り觸れの藥とは違ふと答へた。すると、患者は二回分だけ服み、急使を馳せしめて曰く「三回立て

滿那

つげに瀧の如く下りますが、之でも宜しう御座いませうか云々』占めたぞく、差支無いと一日分だけを服ませて後は又色々治療をしたが、二三年以來の便秘症は一ヶ月程で全快した。其後予は又屢々葯刺巴や瀉利鹽を他の患者に試用したが、何れも瀉利鹽は左程の效無
いけれど、葯刺巴は恐ろしき峻下劑となる。嗚呼之から考へて見ると藥も其の人に依て臨
機應變の處置を取らねばならぬし、身心の關係も亦妙なものである。

〔滿那〕 Manna.——歐洲の南部殊にシシリ島に産する本植物の幹に截口を附け、其の
截口より流れ出る液體を乾かしたるもので、其の味は甘く容易に水に溶解するものである。

〔効能〕 は溫和なる下劑で虛弱なる人及び老人小兒には甚だ適當である。又糖尿病者に
與ふるも其の糖分が尿に増加せぬ所から本病者の食物に附加して甘味を助ける品にも應用
す。

〔用量〕 は三〇・〇乃至六〇・〇を適宜に紙めてゐるか、或は水か牛乳かに溶解して服む
も可い。

止血綿

〔止血綿〕 Crossypium stypticum.——過格魯鐵液二十五分酒精十五分を取り混和し之
に精製綿を浸し、其の綿を壓搾し光を遮つて乾燥したるものである。

芥子

〔効能〕 は出血したる部へ當て、壓迫繃帶すれば止血するものである。

〔芥子〕 Semen sinapis.——我國に産する芥子草及び歐洲に産する同屬の草の種子を搗
き碎いて粉末としたるもので、其の色は黄色で味は甚だ辛い。

本品を水に攪拌せて皮膚に塗ければ速かに刺戟して堪へ難き痛さと灼くが如き感を起し、
其の局部は赤色を呈するに至る、それでも尙持續してゐる時は水疱が出来て遂に爛れるやう
になる。

少量を内服しても口腔や咽頭を刺戟し、胃部には温感を起し、他の食品と共に取れば消化
を促す作用あるのみならず、予などは涙出しながらサッパリと宜い氣持になれど、大量を服
すれば胃痛嘔吐を發し胃腸を害するものである。

〔効能〕 は昔は祛痰劑及び利尿劑として内用したるが今は急性毒物を吐かせん爲め素人
療治として用ふ。

外用としては醫士に於ても仲々侮られぬ大切なる品だ。即ち之を微温湯に溶かして昏倒者・
假死者・虎列刺患者の厥冷期・腦充血等に或る局部へ塗ると其の塗つた部分へ充血を起し、
其の反動として他の部分に血液の集まるを防ぐの效を奏す。其の他神經痛・リウマチス及び